

劣等生の世界でRPG

無理やー

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ただの高校生だった。それなのに家に帰るとそこは知らない家、知らない土地。しかもRPGのように自分のステータスが見える。

神のイタズラで死んでしまった俺は劣等生の世界へきてしまった。しかも俺を殺すために次々と刺客が現れるらしい。

俺は死なないように強くなる。誰よりも。あのチートお兄様よりも…

目次

プロローグ	1	模擬戦①	140
原作前		模擬戦②	154
3年後	9	部活勧誘期間	170
最初の刺客	26	L e r r e v e c o u l e u r	
脱走した少女	44	勧誘	200
第二の刺客？	54	占拠	214
入学編		襲撃	227
一高入学	81	突入、そして新たな刺客	245
昼休み	94	四聖獣との戦い①	ほのかVS玄武
放課後	105	零VS白虎	259
風紀委員	126	四聖獣との戦い②	リーナ、深雪VS
		青龍	276

四聖獣との戦い③	和樹、達也他	v s
朱雀 前編	—	293
四聖獣との戦い④	和樹、達也他	v s
朱雀 後編	—	311
幕間 幹比古の悩み	—	335
九校戦編		
九校戦メンバー決定	—	350
幻海	—	363
四人目?	—	377

プロローグ

俺は真田和樹、18歳。高校3年…だったはずだがこれはどういうことだ？俺はさっきまで友人と一緒に帰って自分の家に着き、家に入った。そしたら何故か知らない家にいた。

一度家を出たがそこはさっきまで歩いてきた道ではなく、知らない場所だった。

家の表札には『真田』と書いてあった。俺の家？…イヤイヤ意味分からん…

…取り敢えず家に入ろう。玄関を見たところ誰もいないし、それどころか新築のよう綺麗だ。

家に入ったが正直すげえと思った。さっきはパニックになってたからそれどころじゃなかったが、庭が普通に庭園というくらい花が咲いて綺麗だし広い。家も豪邸とはいえないが普通に3階建ての家で一部屋が広い。いや、これって豪邸といえるのでは…

それはさておきリビングのテーブルの上に何か置き手紙があった。俺の名前が書いてあったので読んでみると…

『拝啓真田和樹様、

あなたは今起きていることがなんなのか分からず混乱していると思います。私はあなたをその世界に転移させた神です。あなたは本来家に入った数秒後に家に突っ込んできたトラックに轢かれ亡くなるところでした。ですが史実ではあなたはここでは亡くなるはずがないはずなのです。原因はわかりません。ただ、神である私がわからないということは別の神の力が働いた可能性があります。そうなれば再びあなたを殺すための刺客が現れるかもしれません。その刺客に殺られないように強くなりなさい。そのためあなたには力を授けます。

因みにその世界は『魔法科高校の劣等生』に酷似した世界です。

あなたがどれくらい強くなったか知りたいたときは『ステータス』と頭に浮かぶだけで自分のステータス、もしくは相手のステータスを見ることができます。

お金の方は銀行口座に入っております。両親は交通事故で死んだことになっていきます。学校は一週間後転校生として入学できるようになっています。

それでは第二の人生楽しく生きてください。』

……………マジかよ……………

俺本当は死んでたの？ 全然実感が湧かないんだけど…

まあいいか。 なんだかこの世界RPGみたいな世界みたいだから 自分がどれだけ強くなれるのかがちゃんとわかるっていうのが面白いし魔法も使える。 何よりあの『魔法科高校の劣等生』の世界だ。 まさに美少女しかないと言っても過言ではない

世界

サイツツツツコーーじゃねあかー

前世で彼女がいなかった俺にとって正に楽園。 よーし、必ず強くなって美少女GET
だぜ!!

そうと決まれば先ずはステータス！

ステータス

名前 真田和樹 9歳 小学4年生

レベル 1

4 プロローグ

体力	50	／	50
サイオン	50	／	50
力	3		
敏捷	10		
頑強	2		
器用	9		
魔法力	5		
魔法技能	5		
スキル	全智の眼		飛天御劍流（初級）
魔法ポイント			
加速系	5		
加重系	5		
移動系	5		
振動系	5		
収束系	5		
発散系	5		
吸収系	5		

放出系 5

無系 5

系統外 5

知覚系 5

飛天御劍流

龍追閃 龍翔閃

9歳!?小学4年!?どういうこと?俺は自分の体を確認した後洗面所に行き鏡を見ると明らかに背が小さくなっており小学生だと分かる見た目だ。

「マジかよ……まあいい。原作開始が高校入ってからだからな。いきなり原作開始ってならなくてよかった。いやまてよ、俺が主人公たちと同じ年とは限らねえ。ここはいつ原作開始になってもいいように訓練しなきゃな。あと、この全智の眼って何だ？」

スキル欄に全智の眼というスキルがあり不思議に思っている

全智の眼

全てのことを見透せる目。

相手の強さ、感情、筋肉の動き、起動式等

達也の精霊の目（エレメンタルサイト）よりやべー。感情や筋肉の動きが分かるってことは相手がどういう行動をするか前もって分かるってことじゃん。

あと、飛天御剣流？俺の好きなアニメに出てきたやつだ。俺が使えんのか……よっしゃ、こうなったらトコトン強くなってやるぜ。

それから俺は家の中を調べこの家の地下室があるらしく行くと見たこともない機械

や広い部屋があつた。どうやら訓練スペースとCADの調整をする部屋のようだ。

そして机の上には刀と本が3冊置いてあつた。

3冊の本のうち2冊はCADの使い方と調整そして、この世界の魔法に関わる本だつた。これはありがたい。どうやって魔法使うのかわからなかつたから。

そして、残りの1冊は飛天御剣流の秘伝書だつた。これがあれば飛天御剣流を極められるな。

早速俺は今できる魔法について実験した。正直、魔法について書いてある本は今日1日では読みきれないため基礎的なところだけ読んだ。そして現在わかつたのは、どうやら現時点では物を移動させたり、物を重くしたり、物を熱くしたりと簡単なことならできようだ。

飛天御剣流も初級を身に付けているせいか前世の時並に体が動きやすい。小学生の体でこれだけ動ければ高校に入るまでには達也と同等以上の力を身に付けられかもしれない。まあ油断はしないけど。俺にとつて達也は原作キャラでありながらチートキャラだからな。寧ろ勝てるイメージがないのだが…

それから俺はひたすら特訓し、今日は1日を終えた。翌日もそれを繰り返して1週間俺は特訓に明け暮れていた。

転生してから一週間が過ぎ俺は学校に通うことになった。また小学生から通うのかよと思うと前世で読んでいた其名探偵を思い出す。

学校から帰るとひたすら特訓。その繰り返しで俺は毎日を過ごした。

高校生の俺にとって小学生の相手をするのはきつい。話が合うわけがなく孤立した。まあ俺は別に気にしなかった。今の俺にとって強くなる事が一番の喜びと言うか趣味になっていたため、誰かと遊んで鍛練の時間が減らないことは俺にとってはよかった。

孤立している俺に対していじめようとしてくる子供もいるが、高校生の俺が小学生相手に口で負けるわけがなく、言い負かされることはない。言い負かされると今度は暴力振ってくるが、俺のチートすぎる目や毎日鍛練している俺が負けるはずがなく俺をいじめようとするものはいなくなつた。逆に孤立していったが気にしない。

それが3年続き、中学生になった。

原作前

3年後

転生してから3年が経ち俺は中学1年生になった。飛天御剣流を使うせいか体格にも恵まれ、今では身長が178cmある。3年間毎日のように鍛錬していたおかげで今の俺のステータスがこのようになった。

ステータス

真田和樹 12歳 中学一年

レベル18

体力 148 / 148

サイオン 184 (221)

力 71 (85)

敏捷 87 (104)

頑強 70

器用 90 (118)

魔法力 82 (98)

魔法技能 88 (105)

スキル

全智の眼 飛天御劍流 (上級)

秘劍・焰靈 (ほむらだま)

魔法ポイント

加速 50

加重 40

移動 10

振動 40

収束 50

発散 60

吸収 15

放出 45

無 50

系統外 35

知覚 50

魔法

自己加速術式 領域干渉 情報強化 硬化魔法 圧縮空気弾 高温（ハイテイグ
 リー） 反射障壁（リフレクター） エア・ブリット 偏倚解放

飛天御劍流

龍追閃 龍翔閃 龍巻閃 飛龍閃 土龍閃 龍巢閃 双龍閃

魔法も剣技も大分上がった自信がある。るる剣の剣心のように神速を覚え、全智の眼のおかげで相手の動きを先読みし、一度に複数人倒す位の技能はできるようになった。

魔法も少しずつだが使うのに慣れてきた。

問題は実戦経験が少ないことだ。

現時点では大して影響はないが、後になって何かしらないとは限らない。

だが、今年は2092年、沖繩で大亜連合が攻めてくるはず。ここで俺がどれくらい強くなったのか確かめてやる。

中学に入學してから3ヶ月が経ち夏休みに入った。夏休みに入り1週間が過ぎ、俺は沖繩へ行くことにした。大亜連合が攻めてくることは知っているが、それが何月何日かまではわからない。司波家が沖繩へ行った一週間後ぐらいだったような気がするのだ。その日に合わせたのだ。

沖繩に着き別荘を持っているので先ずはそこへ向かった。
 すると向かう途中、俺は今までで見たことがないぐらいの美少女を見つけて思わず足を止めてしまった。そして、彼女のステータスが見えた。

ステータス

司波深雪 12歳 中学一年

レベル11

体力 68 / 68

サイオン 208

力 23

敏捷 30

頑強 14

器用 36

魔法力 97

魔法技能 69

魔法	魔法ポイント
領域干渉	加速
インフェルノ	加重
ニブルヘルム	移動
コキユートス	振動
	収束
	発散
	吸収
	放出
	無
	系統外
	知覚
	35
	75
	40
	45
	40
	50
	60
	90
	55
	45
	60

『彼女が司波深雪か？なるほど…確かに絶世の美少女とか言われるわけだわ…。でも美少女すぎて逆に近寄りがたいな。友達ならともかく恋人にでもなったら隣に歩く俺が浮く存在になるな。しかも魔法ポイント高！もう90いつてるのあるよ。サイオン量は俺とほぼ同じか…。俺ってそこまで腕を上げてたんだな……………それより……………』

俺は彼女の後ろに控えている男に目がいった。

ステータス

司波達也 13歳 中学一年

レベル33

体力 238 / 238

サイオン 420

力 88

頑強 74

敏捷 122

器用 149

魔法力 45

魔法技能 178

スキル

神速（残像） 体術（上級） 精霊の目（エレメンタルサイト）

魔法ポイント

加速 20

加重 20

移動 20

振動 20

収束 20

発散 20

吸収 20

放出 20

無 90

系統外 50

知覚 100

魔法

自己加速術式 自己修復術式 分解 再生 術式解体（グラム・デモリツション） 術

式解散（グラム・デイスパーション） 雲霧散消（ミスト・デイスパージョン）

戦略級魔法

質量爆散（マテリアル・バースト）

『彼が司波達也か。レベルたつか!!ステータスも俺以上。俺もかなり訓練を積んできたつもりだけど、やっぱ達也すげーな。……だけど、俺を消そうとしているやつは

もつとステータス高いんだろうな……。　　まだまだ強くないとな……。』

それから数日後、大亜連合が攻めてきた。俺はまだ達也達に顔を見られたくないの
フードとカツラを着けたあと、刀とCADを持って敵を殲滅しにかかった。俺は何人も
斬った。人を斬るのに俺は実感がわかなかつた。人を殺しているのにな。

まあいい、今は深雪さんを助けることからだ。

俺は軍の基地に向かった。だが、見張りは嚴重だ。　　あまり軍の連中に見つかりたく
なかつた俺は辺りを警戒しながら入っていった。

『思ったより時間がかかったな……。』

俺は今やっと軍の基地に侵入したが何処にいるかがわからなかつたため時間がか

かっていた。そんなとき、確か軍人さんが外ではなく中に入っていったことからそこに深雪さんがいると悟ったのだ。

後をつけていったら案の定深雪さんがいた。その近くには穂波さんと深夜さんがいて深夜さんがサイオン酔いしている。おそらくキャスト・ジャミングをやられたのだろう。

軍人同士何か言い合っているとき、深雪が精神凍結魔法『コキュートス』を使い軍人の一人を凍らせた。その事に安堵したのか無防備になってしまった。

『キサマー！』

「マズイ！」

軍の人数人が深雪さんにマシンガンに向けた。

『危ない!!』

穂波さんが深雪さんの盾替わりになろうと覆い被さった。マシンガンを持った人達がトリガーを引いた。その瞬間弾が暴発した。

俺の魔法振動・加速系魔法『高温（ハイデイグリー）』

「フーツ…危ねえー…」

俺の魔法振動・加速系魔法『高温（ハイディグリー）』で火薬の温度を上げること
でマガンの弾を暴発させた。

「!?」

俺は全智の眼を使い達也がものすごい速さでこちらに向かってきていることがわ
かった。

「やばっ!」

俺は急いでこの場から離脱した。

……深雪達がいるところから爆発音が聞こえ俺は急いで深雪のいるところへ急いだ。
部屋の前に誰がいる。敵か!?そいつは急いでその場を離れた。後を追いたかったが深

雪の身が心配だったためそちらを優先した。

「深雪!!」

「お兄様!!」

「大丈夫か!？」

「はい、お兄様!!」

「何があつた?」

「どうやら軍の内部に裏切つた人がいるようです。危ないところだったので、相手のマシンガンが暴発したおかげで私たちに怪我はありませんでした。」

「……マシンガンが暴発?……それは全部か?」

「……はい。全部でした……」

全部で10近いマシンガンが暴発するなどそんな偶然あるか……?

「(ということはさつきいたやつか?だが、何のために……)」

「…危ない危ない。さすがに今達也に会うのは早すぎる。四葉に入る気はないからな。会うのはもつと強くなってからだ。」

単独でも四葉に勝てるぐらいまでは知られたくない。少なくとも原作が始まるまでにはそれぐらいの力を手に入れる予定だ。

「さて、後は外に出て敵を殲滅するか。」

俺は外に出て敵を倒していった。まさに人斬り抜刀斎のようだ。一度で複数人を斬り、秘剣・焰霊をミックスにした飛天御剣流の前に敵は次々と斬られ燃えていった。そして、高温（ハイダイグリー）で周りにいるマシンガンは使用不能、使おうとした相手は全員マシンガンが暴発していた。俺はそれを気にせず相手を斬っていることから俺がやっている気がつき相手はナイフで俺を襲っているが俺は次々と斬っていった。遠くにいる相手には圧縮空気弾や偏倚解放で倒していき2、30分ほどで辺りを血の海に変えた。

「フーツ、此処等の敵はこれで全部かな…？つていうか何で国防軍は此方に誰も来ないのか不思議なんだが、まあ来ないなら来ないで別にいいけど…!？」

突然俺にサイオン弾が飛んできた。しかもその威力は1層は越える岩を粉々に破壊

した。いくらなんでもそれだけのサイオン弾を撃てるのは10師族クラスじゃないと無理と判断した俺は一瞬深雪か?と思っただが、深雪だったら冷却魔法で足止めすると考えた俺は瞬時に頭を切り替えた。

「誰だ!」

サイオン弾が飛んできた方に眼を向くと俺は驚愕した。

「ほう、俺の妖丸をあゝの状況でかわすとは、成る程、只の人間ではないということか……」

「……………何で……………お前が……………」

俺は自分の眼を疑った。何故ならこの世界にはいるはずのないやつが目の前に現れたからだ。

「楽しませてくださいよ」

その相手は乱童。

最初の刺客

「(何でこいつが……まさか、神が言つてた俺を殺そうとする最初の刺客か?)」

以前この世界に転生したときに神から自分を殺そうとする神がいて刺客を送ってくるかもしれないと……

「くつくつくつ、一応教えておくが助けが来ると思わない方がいいぞ。俺の認識障害

の結界があるから誰もここには近づいてこない。」

!? だから誰もここに近づいて来なかったのか!? これだけ敵を倒してるの元に

軍人の誰も近づいてこないのはちよつと不思議に思っていたんだ。 達也なら気付き

そうなもんなんだけどな。

「さて、殺りますか……」

そう言つてやつは一瞬で俺の懐に入つてきた。

「!? (速い!?)」

「はあああああああ!!」

乱童はパンチを連打してきた。俺は何とか捌くことが出来るが何発かは俺の体を掠めていた。

「ちっ！」

「逃がさん！」

俺は間合いをとろうと距離を取ろうとするがヤツは追いかけてきて追撃してきた。刀を使う俺にとつてこれだけの至近距離は分が悪い。俺は刀をしまい拳で応酬した。

だが、刀の鍛練ばかりしてきた俺にとつてそれは愚策だった。俺は何度もヤツのパンチをもらい、俺のパンチは空を斬った。

「フッフッフ、どうやら体術はあまり鍛えてなかったようですね。確かにお前の身体能力は私と互角と言つていいでしょう。だが、それをお前はちゃんと活かしてきれてない。例えばパワーやスピードがあろうと技能がついてこなければ宝の持ち腐れもいところだ。おまけに実戦経験も恐らく少ない。俺は数々の奥義といわれる技を学び会得し、相手の技を学んできた。そんな俺にお前がかてるか!!」

「くっ！」

俺は間合いを詰めさせないように刀を抜き、刀を振れる自分の間合いを保とうとした。技能は確かに向こうが上だがスピードは俺の方が上だ。

「フッフッフ、いいですよ。先ほどと比べてかなりよくなりました。」

「嘗めんな!!」

俺の焰霊と飛天御剣流を併用した剣術。だがヤツには大した苦ではないらしい。

そこで俺は刀を振りながら加速魔法を使いCADを操作した。あくまでCADを操作する指の動きを速くしただけだ。それぐらいならCADを使わなくても魔法が使える。

俺は刀を振りヤツはそれをかわした。そこに俺の魔法が発動した。

収束系魔法『偏倚解放』。

「何!？」

ドツガアアアアアアアンツ!!!

「ぐあああつ!」

乱童はそれを避けることはできなかつた。

「もらつたあ!!」

俺はよろめいたヤツの背中を斬つた。

「ぐっ!」

焰霊で斬ると焼くの両方の痛みを受けた乱童は急いでその場を離脱した。

「はあつはあつはあつ、やるな。どうやらお前を甘く見すぎたようだ。」

序盤は乱童が現れたせいで不意をつかれてしまったために
 心が乱れてしまい劣勢だったが、刀を振るえる間合いなら俺の方が有利なのだ。拳で
 撃ち合う至近距離では乱童に分があるようだが……
 冷静に見ればステータスは俺の方が高いのだ。

ステータス

乱童 ???歳

レベル 45

体力 138 / 218

サイオン(妖気) 193 / 193

力 68

敏捷 75

頑強 83

器用 118

技

火掌発破拳

斬空烈風刃

妖気の糸

縮身の術

妖丸

それに

俺はまだ

本気じゃない。

俺は両手両足につけてあるリストバンドとパワーアングルを外した。すると俺のサイオンが増大し、体も軽くなった。

「バ、バカな！何故だ、何故靈力が上がる!?!」

実際はサイオンなのだが…、いや、同じなのか?…よくわかんねえけど俺の両手両足につけていたリストバンドとアングルには重いだけでなく磁力でくつつくようになつておりサイオンを流し続けないと身動きがとれなくなる。魔法制御も上手くなり、半年も経てばサイオン量も増える。それだけではなく湯浴みや風呂で体を洗うとき直接肌に当たるよう一時的に消えるためいちいち外す必要はない。

「さて、色々ご教授してもらって助かったが、これ以上お前とここで戦い続けているわけにもいかないんでね。終わらせてもらう。」

久しぶりにバンドを外したせいとか体が軽いうえ、サイオンも充実している。負ける気

がしねえ。…さてよ、ここに幽白の乱童がいるってことは…

俺はサイオンの塊を作り出した。それも一つじゃなく無数に作り出した。その数30。

「な!?!」

「ははっ、やっぱりできた。初めてにしてはこの数は中々だ。じゃあ実験代わりにくらったとけ!! 裂蹴紫炎弾!!」

俺は30個のサイオン塊が一ヶ所に集めそれを蹴りだした。それが30発のサイオン弾が発射され乱童に襲いかかる。

「くっ! 数が多い!」

乱童はサイオン弾を防ごうとするが7、8発防ぐのでやっつとで残り20発以上のサイオン弾を防ぐことは出来なかった。

「うわああああああ!!」

ドツガアアアアアアンツ

爆発音とともに砂煙が舞った。それが晴れると乱童が倒れていたが、すぐに立ち上がった。

「っ!? 今のは、…今のはかなり効いたぜ…」

「思ったより上手くいったがやっぱりまだ誘導弾には出来ないか…」

乱童に当たったのは精々7、8発とたったところだろう。それでも乱童にはかなりのダメージのようなだ。体力がかなり減っている。

「いきますよ。」

乱童は襲いかかってくるがさつきまでのスピードがなく簡単にあしらえた。全智の眼をもつ俺には乱童の筋肉の動きでどういう動きをしてくるのかはつきりわかる。

その上、バンドを外しサイオン量が増え体が身軽になり、さらに、体力がなくなりスピードが落ちた今の乱童の動きでは俺を捉えることはできなかった。もはや勝負はついていた。

乱童は右こぶしを振り抜き俺の顔を捉えた。

「もらった!」

しかしそれは残像であった。

「何!?!」

そのあと乱闘は再び背中を斬られた。

飛天御劍流『龍巻閃』

「ぐああああああ!!」

背中を斬られた乱童は前によるめいたが倒れなかった。すぐに振り向いたが既に俺は追撃を行っていた。

乱童を斬ったあと地面に刀を刺し引きずり秘剣『焰霊』を発動。そして乱童の間合いに入り全身の急所を高速で乱撃した。

秘剣『焰霊』、飛天御劍流『龍巻閃』の合わせ技。名付けて

飛天御劍流『火巢閃（かそうせん）』

それを受けた乱童は斬ると焼くの両方を連撃で受けてしまったため、体が炎に焼かれ絶命した。

「フーツ、とりあえず勝てたがバンドを外さないと勝てないというのはまだまだだな。だが今回の戦いはいい経験になった。裂蹴紫炎弾も使えるようになったのは大きいな。

この世界では一対多数を相手にすることが多いからなこれは大きい。今度から誘導弾にできるように訓練しないと…。つと、そういえば今の戦況どうなってるんだ？」

長い間乱童戦っていた俺は今の戦況が気になった。敵の銃撃音がない今戦いは終わったのかとも思い俺は現場の状況を知るためにその場を走り去った。

暫くすると軍人なのか武装した3人が海岸におり一人の男がでかいライフルのようなモノを持っており構えていた。

「(あれは達也か？成る程、今から質量破壊(マテリアルバースト)を使うところか…。またよ…たしかこの時…)」

その直後、敵の戦艦から艦砲射撃が達也たちに襲いかかった。その時達也たちのところへ一人の女性がきた。

「（あれは穂波さん？ そうだ。確かここで穂波さんは魔法の過剰行使でなくなるんだ！）」

俺は急いで敵の艦砲射撃を防ぐ為に来る限りのサイオンの塊を作り出した。その数、50。

「くっ！結構キツいな。まあいい）裂蹴紫炎弾!!」

怪我はなかったが深雪や母様、穂波さんが殺されかけたことで俺は敵に報復するため軍に頼み戦いに参加させてもらっている。敵兵をすべて片付けたあと、敵艦隊がこちらへ向かってきている。その数6隻。俺の『マテリアルバースト』を使えば殲滅できるため風間さんと真田さんの二人で海岸に向かった。試し撃ちをして射程距離を測ったが20 km圏内じゃないと届かないため敵からの攻撃を受けてしまう。

敵からの砲撃がきた。数が多すぎて防ぎきれない。

「援護します！私が達也君を守りましょう！」

穂波さんがきた。防御魔法を展開していくがいくら穂波さんでもこれだけの数を防ぐのは無理だ。仮に防いだとしても魔法の過剰行使で死んでしまう。そう思っている
と横から無数のサイオン弾が飛んできて敵の砲撃を打ち落としている。

「(アイツは！さっきの…)」

全てではないにしろ砲弾を打ち落としているため穂波さんの負担が軽くなった。しかし今は魔法に集中する。

戦略級魔法『マテリアルバースト』発動

眩い閃光が走り、それがなくなり海には先程いた艦隊の残害すらなかった。

それを確認した後、俺達を守った先ほどの男がいたところに目を向けたが既にそこには誰もいなかった。

3年後にまた会おう。
司波達也

『クエスト、』 第一の刺客』 『
ントがアップしました』 桜井穂波を救え』を達成しました。 経験値と魔法ポイ

ステータス

真田和樹 12歳 中学一年

レベル 21

体力 165 / 165

サイオン 230 (276)

力 81 (97)

敏捷 98 (118)

頑強 77

器用 108 (130)

魔法力 100 (120)

魔法技能 110 (132)

スキル

全智の眼 飛天御劍流 (上級)

秘劍・焰靈 (ほむらだま)

魔法ポイント

加速 50

加重 40

移動 10

振動 40

収束 50

発散 65

吸収 15

放出 45

無 70

系統外 35

知覚 75

魔法

自己加速術式 領域干渉 情報強化 硬化魔法 圧縮空気弾 高温（ハイテイグ
 リー） 反射障壁（リフレクター） エア・ブリット 偏倚解放 裂蹴紫炎弾（れっしゅ
 うしえんだん）

飛天御劍流

龍追閃 龍翔閃 龍巻閃 飛龍閃 土龍閃 龍巢閃 双龍閃 火巢閃 追火閃 火

翔閃 火巻閃

脱走した少女

沖縄に大亜連合が攻めてきて一年が過ぎた。その一年間相変わらず俺は訓練の日であった。もはやこれは俺の日課と言うか、趣味と言うか、友達と遊ぶという習慣がもうすでになくなっていった。というよりお家には未だに友達という人が一人もない。強くなることに必死になりすぎてそういうのに 時間を費やしてる時間がないのだ。それでも気晴らしというのははしないので 長期の休みには旅行に行ったりはしている。一人で。寂しくはないぞ。

今日も夏休みということで新潟に旅行に来ていた。新潟というのに特に意味はない。 たまたま一条家の一条将輝に 会えたらラッキーぐらいの気持ちだ。

滞在は三日間ホテルをとり、のんびりと新潟県を満喫していた。そして新潟県にきてわかったこと、一条家は新潟じゃなくて石川県だよ！俺は完全に勘違いしてしまいガツクリしていた。まあすぐ頭を切り替えたが、アホなことをした自分がちよつと内心ショックだった。

そんなある日の夜、夕食後ホテルの近くの公園でいつもの鍛練をしていると、突然近くで戦闘音が聞こえた。俺は急いでその現場に向かった。するとそこには金髪の美少

女が8人ぐらいの取り囲まれている。何か話しているようなので俺は茂みに隠れてその話を聞き耳をたてている。

「アンジェリーナ・クドウ・シールズ！スターズを脱走したお前には上層部から抹殺命令が出ている！大人しくしてもらおう！」

「……ウイリアム総隊長……」

「アンジー！あなた何故スターズを裏切ったの！」

「今の軍のやり方が気に入らないからよ！それに私は軍にすることを強制されている。だから日本までできたの！」

「……でもアンジー、日本に来てどうするつもり！九島家に頼つてもスターズは一番そこをマークする。九島家につくまでスターズが追っ手が来ることぐらいあなたにだってわかっていたはず。スターズからは逃げられない。あなたにわからないはずがないでしょう！」

「……………」

「よせ、シルヴィア！これ以上の問答は無用。これより脱走兵アンジェリーナ・クドウ・シールズ准尉を抹殺する。」

ウイリアム総隊長の言葉でシルヴィア以外の隊員がアンジーに銃を向けて発砲した。すると全ての銃が暴発した。

『!?!』

『アンジェリーナ・クドウ・シールズ！スターズを脱走したお前には上層部から抹殺命令が出ている！大人しくしてもらおう！』

それを聞いた俺は驚いた。なんでこんなところにリーナがいるんだ？ しかもスターズを脱走だって！リーナはそろそろスターズの総隊長になる頃だったはず。

そんなことを考えていると、リーナを取り囲んでいる隊員たちが、リーナに銃を向けた。

「ちっ！」

今はそんなことはどうでもいい。俺はすかさず魔法を使った。

俺の得意魔法『高温（ハイデイグリー）』

銃の引き金を引いた隊員たちは銃が暴発し、銃を持っていた手が怪我をした。隊員たちが怯んでいるすきに、俺は背後に回りその場にいたリーナ以外の全員を気絶させた。

「え？え？何？」

今の俺は縮地一歩手前の動きができるため、普通の人には捉えることすらできない。リーナなら見えることができたかもされないが、今は夜のため周りが薄暗く、それも不意打ちだったためそこまで気を配る余裕がなかった。

「フーツ、大丈夫ですか？」

「あなたは？」

「ただの通りすがりの一般人ですよ。」

「一般人があんな動きできるわけじゃないじゃない！」

「まあいいじゃない。白馬の王子様ってことで」

「白馬に乗ってないじゃない……」

「だーっ！ああ言えばこう言う！何でもいいだろ！少なくとも敵ではないってことで」

「……まあそうですね。とりあえずありがとうって言わせてもらうわ。」

「ああ、ということでの場を離れるぞ！」

「え？」

「え？じゃねえよ！ しばらくしたらこいつら眼覚めつぞ。そしたらまたお前襲われることになるんだぞ！」

「……そうですね……」

「納得したところで……」

俺はリーナをお姫様抱っこした。リーナはいきなりのことと思考が追い付かなかったが、だんだん現状を理解してきて頬を赤らめていった。

「っ!!ちよっ!!」

「いいからされてろ！」先ず俺が泊まってるホテルに連れてくぞ。」

「ホホホホテルって!!!」

傍目から見ても激しく動揺しているのがわかるリーナは顔耳まで真っ赤になった。

「今何を考えた？」

「ベベベ別になな何も考えてないわよ!!」

「顔が真っ赤だぞ？」

「これは夕日が赤いからよ!!」

「今は夜だぞ?」

「うるさいうるさいうるさい!!」

激しく取り乱して暴れているリーナを見てオレはかわいいなあと思ってしまった。

「まあとにかく今はそこに連れて行くぞ。話はそれからだ。」

そう言い俺は自分の泊まつてるホテルにリーナを連れて行つた。周りに敵がいな
いとも限らないため、俺は全力で走つた。俺の全力ということは常人の目では認識で
きないほどのスピードがあるので、ホテルに着くまでリーナは生きた心地がしなかつ
た。

「きやあああああ!!!」

俺たちはホテルに帰り部屋に入った。

「着いたぞ。」

「死ぬかと思つた…」

ホテル着いたときリーナはげっそりしていた。逆に俺はリーナがおもいつきり俺に

しがみついていたため、リーナの豊満な体を堪能し凄く気分がいい。

「改めてありがとう。助けてくれて…。」

「さっきも言ったけど、たまたま通りかかったただだから気にしないで…。ところでこれからどうするつもり?」

「… そう聞くことはさっきの話を聞いてみたいね」

「盗み聞きしてるみたいで申し訳なかったけど、状況が分からなかったからどうするべきか知りたくてね。 何せ向こうはカッコからして軍人だったからね」

「相手が軍人だとわかっておきながら私を助けたの?」

「可愛い子は放っておけないタチでね」

「な!?!」

リーナはまたも真っ赤になった。

「ともかくどうするの? 相手がスターズってことはそう簡単に逃げられないよ。むしろよく日本にまで逃げられたね。 どうやったの?」

「逃亡は前から考えていたことだから、ボストンから飛行機に乗って日本にきたわよ。誰にもバレないように。」

「……………それ……………マジで言ってるの……………」

「?!?! 勿論よ。」

「バカかお前は!!」

「ちよっ!いきなり何!」

「それじゃあ見つけてくださいって言うてるようなもんだ!! お前が脱走したことなどその日のうちに分かる決まってるだろ! 当然軍としてお前がどこに逃げたのか調べるはずだ! 飛行機なんて乗ったら航空記録を調べて一発でバレるだろうが! 逃げるんなら調べられないように巧妙するのが普通だろう! それをなんで堂々と飛行機に乗って日本に来んだよ! お前本当にスターズの軍人か!」

「はっ!」

「今気づいたみたいな顔すんな!」

そうだった。リーナは確かポンコツだった。それは前から分かっていたことだったがまさかここまで酷いもんだとは思わなかった。本当に近いうちスターズの総隊長になるはずだったやつなのかこいつ? スターズ本当に大丈夫か? こんなポンコツを隊長にしなきゃいけないぐらい人材不足なのか?

「はっつ…:もういい。この分じゃまともに逃亡ルートも出来てなさそうだな。…:」

ウチに来るか?」

「え?」

「さっきも言ったが九島家の援助を受けるつもりだろうが、一番にマークされている。

俺の家は東京にあるからな、マークされていないはずだ。九島家は奈良だから逆に行けば見つかりにくいだろう。」

「でもそれだとアナタに危険が！」

「今更だ。スターズの人間に手を出したんだ。遅かれ早かれ狙われるさ。それに向こうから襲ってきたら叩き潰してやる。」

「……………」

「なら、お前をメイドとして雇う。どちらにしても住むための金が必要だろう。それならどうだ？」

「……………まあ、それなら……………」

「OK！じゃあ改めて俺は真田和樹。和樹でいい。」

「わかったわ、カズキ。私はアンジェリーナ・クドウ・シールズ。リーナでいいわ。」

こうしてリーナはウチのメイドとして家に住むことになった。

数日後

「…ところでリーナ。俺は別に普通でいいんだが…」
「何言ってるのよ！私アナタのメイドなのよ。ならそれなりの格好しなきゃいけないわ。」

「それなりの格好が何でメイド服なんだよ！」

「私があなただからよ！」

第二の刺客？

8月に入り明日から九校戦が始まる。と言つても俺は中学2年だから関係のない話だが、九校戦は俺にとつて魔法の勉強になる。

俺はリーナと一緒に九校戦の会場に行った。九校戦は十日間あるが俺は新人戦のある五日間ホテルに宿泊する予定だ。九校戦の間 ホテルは予約でいっぱいなので十日間ホテルに宿泊できる場所はほぼない。それに俺の目的は 新人戦だったので特にこれで良かった。今年一年ということは俺が高校に入るときは3年、つまり原作に出てきた十師族の七草真由美と十文字克人、そして、渡辺摩利が出てくる。興味があつた。

新人戦は4日目から始まる。三日間のこれまでの成績ではどうやら僅差で1校がリードしているようだ。新人戦の結果次第では三高に優勝を奪われることになるだろう。

新人戦一日目女子スピードシューティング

「高は七草真由美が出てきた。試合が始まると有効エリアに入った瞬間クレールを一個ずつ打ち抜いてる。それを百発外すことなく全て当てパーフェクト。」

「流石だな。」

「今のドライアイスの亜音速弾よね?」

隣に座っているリーナが聞いてきた。

「そうだな。だけど注目すべきはあの精度だ。知覚系魔法を併用し情報処理しながら百発百中の命中率。」

「知覚系魔法?」

「遠隔視系の『マルチスコープ』だ。あらゆるアングルから実体物を捉える非常にレアなスキルだ。」

「なるほど、確かに肉眼であの射撃は無理ね。」

そんな会話をしていたら:

『詳しいんですね?』

席を一つ離れたところから女の人の声が聞こえた。そちらを見たら驚いた。

「あつ、すいません。いきなり声をかけて、私光井ほのかって言います。」

原作ヒロインの一人光井ほのかがいた。

「あつ、いえ、別に気にしてません。俺は真田和樹っていいいます。此方は工藤リーナ。」

「よろしく。」

あの事件があつたためにリーナには、工藤リーナという名前を名乗らせている。勿論戸籍を作つて。どうやってかは聞かないでくれ。

「えっ?! 真田和樹さん?」

「?! 俺のこゝと知つてるの?」

あれ? 俺つてほのかと会つたことあつたつけ?

「はい。話したことはないですけど同じ学校ですから。いつも入試トップでいつも私の名前の隣にあるから覚えちゃつたんです。」

俺は試験の結果は、いつもほぼ満点だ。生前は高校3年生だつたから、中学1、2年の試験など、俺にとっては簡単だつた。

ていうか俺つてほのかと同じ学校だつたんだ。てことは…

「ほのか、次はバトルボードの会場に行こう?」

ほのかの隣に座っている女の子がほのかにそう言つてきた。

「あつ、うん。待つて零。」

そう。ほのかの親友でもうひとりの原作ヒロイン北山雫だ。

「あの…よかつたら一緒に観に行きませんか?」

ほのかが俺にそう聞いてきた。ほのかつてこういうことを自分から言つてくるよ

うな性格だったっけ…

「ええ、いいですよ。俺達も女子バトルボードを見に行く予定でしたから」

「そうなんですか。じゃあいきましましょう。」

「わかった。行くぞ、リーナ。」

「ええ。」

新人戦女子バトルボード

「次に出てくる一高の渡辺摩利って選手が　なんか注目されている選手らしいよ。」

「そうなんですか?」

「ほのか、昨日私が説明したこと忘れたの?」

雫の後ろからドス黒いオーラが出てきた。

「そんなことないよ。ちゃんと覚えているよ。」

雫の目がほのかにロックオンしてしまった。助けてやるか…

「ところで光井さん、そろそろそちらの人を紹介してもらってもいいですか?」

「あつ、はい、すいません。こちらは北山雫。私の親友です。」

「よろしく。雫でいいよ。」

「よろしく。真田和樹だ。俺も和樹でいい。」

「私は工藤リーナ。リーナでいいわ。」

「あつ、あの、私もほのかでいいです。」

ほのかが何故か頬を赤らめながら言ってきた。俺ってほのかにフラグ立てたっけ、何でそんな表情されてんだ？ まあかわいいからいいけど…

「ところでクドウってあの九島？」

「……違うわ。私は工場の工って書いて藤の花で工藤よ。」

今はまだリーナが九島家の親戚だっことはバレたくないのボカした。

「ここにいてるってことは和樹って魔法師？」

「まあね。ちなみにリーナもな。」

雫が聞いてきたので俺は答えた。

「得意魔法ってなんですか？」

ほのか聞いてきた。

「私は放出系魔法が得意よ。」

「俺は何だろ……発散系だな…二人は？」

「私は振動系。」

「私は閃光魔法が得意です。」

そんな会話をしているとき選手が入場してきた。

バトルボードの試合が始まる日　いきなり　一高の渡辺摩利が独走状態。

「スゴいな。硬化魔法と　移動魔法　のマルチキャストか？　いや、加速魔法も併用している」

「3種類のマルチキャスト？新人戦のレベルじゃないわね。」

よく言う。　お前だつてあれぐらいはできるだろう。俺はリーナに対してそんなことを思っていた。

「うん。とても勉強になる。」

渡辺摩利は余裕で1位でゴールした。

午後になり、スピードシューティング新人戦決勝。七草真由美はパーフェクトで決勝にまで残っていた。準々決勝からは対戦型になるのだが、関係なくパーフェクトを出していた。

決勝になっても戦法をかえず予選と同じ戦い方をする。普通対戦型になると戦い方を変えてくるのが一般的なのだが彼女は違う。

試合が始まって暫くして相手のクレイが射線を塞いでいたが、お構い無く下から当たった。

「今下から当てなかった!?!」

「知覚魔法『マルチスコープ』なら死角はない。それに彼女は全方位から撃てる。なぜなら作り出すのは弾丸ではなく銃座だからな。」

「……スゴい……」

ほのかが驚いたので俺が解説した。雫も驚いていた。

「スポーツ競技だからまだいいけど、もしここが戦場で殺傷力を最大にしたら…」

「!!!」

「物陰に隠れていようが関係ない。 たった一人でも戦争を勝利に導く切り札となる。それが日本最強の魔法師集団十師族だ。高校生では相手にならない。」

七草真由美は決勝もパーフェクトでスピードシューティング優勝を決めた。

「ああ、今日は楽しかった。」

「うん。最つつ高だった!!」

「さて、これからどうするの？ 私たちは 九校戦の間は ホテルに泊まる予定なんだけ

ど…」

「 私たちも 九校戦 が終わるまでは ホテルに泊まる。」

「 どのホテル? 」

「 ーホテル 」

「 俺たちと一緒に。 じゃあ 九校戦 が終わるまでは俺たちと一緒に行動しないか? 」

「 いいんですか! 」

ほのかが鬼気迫る感じで俺に聞いてきた。

「 あ、ああ。 とりあえずホテルまで一緒に行かないか? 」

「 そんな!? 和樹さん、雫のいる前で一緒にホテルへだなんて… 」

「 ……ほのかはいつたい何を想像しているんだ? 」

「 ……こういうときは放つところ 」

「 ……そうね… 」

俺たちはホテルに行く途中近くの公園に 来ていた。今は夕方5時だが夏なので 陽はまだ高い。なのに人っ子一人いない。

「……………」

リーナも気づいたのか辺りを警戒し出した。

「リーナ？」

「どうかしたの？」

雫とほのかが俺とリーナの雰囲気が変わったことで聞いてきた。そんなとき……

「げっへっへっへっ、旨そうなやつらだ。」

突然不吉なことを聞こえたので俺たちはそつちを向くとそこには確か遊白に出てきた剛鬼がいた。

「(おおい、こいつもこの世界にいるのかよ……)」

「……………何……………」

「……………角が……………生えてる……………」

「……………人間じゃ……………ない……………」

俺はある程度冷静だが、三人は初めて妖怪を見たのだろう。激しく動揺していた。特にほのかは顔を青ざめていた。

剛鬼は突然変身し出した。体が赤くなり角がでかくなりキバが生えたうえに巨大化

した。

「……………あ……………あ……………」

「……………」

三人は最早足が震えて声も出せないようだ。

「さて、まずはお前から死んでもらう。」

近くの巨大な大木を片手で持ち俺に攻撃してきた。

「!?和樹!!」

リーナが三人の中でいち早く早く正気に戻り俺に叫んだ。だが俺にとって剛鬼は既に敵ではない。剛鬼の持っていた大木を俺は魔法で破壊した。

一条家秘伝の魔法『爆裂』

俺は転生して四年で身に付けたのだ。

俺はその爆裂を今度は剛鬼に放った。外側は鋼のような体でも内部までは鋼ではない。

剛鬼は一発で爆散して命を落とした。

「……………」

ほのかと雫は現状を認識することができず放心している。

「お〜い。雫、ほのか。」

「はっ!!」

俺の声で二人は反応し…

「…ねえ、今の魔法一条家の『爆裂』だよね…」

「…どうして和樹さんが使えるんですか？」

「必死になって覚えたから。」

「いや、その認識はおかしい。」

「もしかして、和樹さんって一条家の人？」

「いや、全く。さっきも言ったがあれは必死になって覚えた。それだけだ。」

「二人とも魔法の詮索はルール違反よ。」

リーナに言われ渋々この場は終わったが内心納得はしなかった雫であった。

次の日俺達は予定通り 九校戦 を見にきていた。あつという間に日が過ぎ、九校戦は終わった。第一高校の優勝だ。

俺たちはしずくが車で送って行くといっているのでそれに甘えて車の中にいる。

「和樹。」

「何?」

「この間のあの男は何?」

「アイツは吸魂鬼。子供の魂を好む妖怪だ。」

「『妖怪!!』」

三人は俺が言ったことに酷く驚いている。

「アイツが人間に見えたか?」

「いや、確かにそうなんだけど…」

「いきなり妖怪って言われても…」

「すぐには納得できない。」

「だろうな。」

「でも妖怪つてのは実在する。皆知らないだけで。」

「和樹は前にも妖怪に襲われたことがあるの?」

リーナが俺に質問してきた。

「まあな。アイツよりヤバかったぜ。見た目は今日のやつの方がヤバイけど。」

「……………」

3人は再び沈黙した。今日の相手よりやばい。今日のやつだって片手で大木をへし折るようなやつだ。そんな奴よりやばい奴と戦って普通に生きている。

「…………でもなんで？」

「俺は妖怪に何故か狙われてるんだ。理由は知らないけど。」

本当は知っているけど 俺は違う世界から転移した人間だというのはちよつと気が引けた。

「…………だから和樹はいつも鍛練して強くなるうとしてるの？」

リーナが聞いてきた。

「まあな。それに個人的に戦闘狂だから強くなるってわかると止めらんなくなるんだよな。」

俺がそんなことを上機嫌で言うとは

「…和樹！私を強くして！」

リーナが突然そんなこと言ってきた。

「どうしたんだ？突然…」

「今日出てきた相手に私は身動き一つ出来なかった。和樹と一緒にいる以上私は無関係どころか足手まといにしかならない。だから和樹と肩を並べるくらいになるまで強くなりたいたい!」

「リーナ……」

「私も強くなりたい!」

「!? 雫? ほのか?」

リーナはともかく二人が言ってくるのには驚いた。

「私は和樹に助けてもらった。もうあのときのようになんただ見ているだけなんて嫌だ!」
「私も和樹さんの力になりたいです!」

「……………わかった。三人とも明日から俺がみっちり鍛えてやる。夏休み中はバンバン鍛えてやるから覚悟しろ。勿論学校ある日も放課後はみっちり特訓だ!」

「望むところよ!」

「はい!」

「ん!」

こうして三人は次の日から和樹の厳しい鍛練を受けて、原作より遥かに強くなって原作に介入することになるのだった。

それから二年の月日が流れ、俺たちは高校一年。ついに原作が始まる。

クエスト『第二の刺客?』をクリア。経験値と魔法ポイントが加算します。

ステータス

真田和樹 15歳 高校一年

レベル45

体力 311 / 311

サイオン 478 (574)

力 170 (204)

敏捷 200 (240)

頑強 155

器用 215 (258)

魔法力 255 (306)

魔法技能 308 (370)

スキル

全智の眼 飛天御剣流 (奥義) 秘剣・焰霊 (ほむらだま) 秘剣・火産霊神 (カグツ

チ)

魔法ポイント

加速 75

加重 80

移動 65

振動 55

収束 80

発散 100

吸収 45

放出 90

無 100

系統外 60

知覚 100

魔法

自己加速術式 領域干渉 情報強化 硬化魔法 圧縮空気弾 高温（ハイディグリー） 反射障壁（リフレクター） 対物障壁 エア・ブリット 偏倚解放 ダブル・バウンド ドライ・ブリザード 干渉装甲 ムスペルス Heim 爆裂 穴（ホール）
 仮装行列（パレード） 裂蹴紫炎弾 術式解体（グラム・デモリッション） ???
 ???

戦略級魔法

???
 ヘビィ・メタル・バースト

飛天御剣流

龍追閃 龍翔閃 龍巻閃 飛龍閃 土龍閃 龍巢閃 双龍閃 火巢閃 追火閃 火
 翔閃 火巻閃 九頭龍閃 天翔龍閃

ステータス

工藤リーナ（アンジェリーナ・クドウ・シールズ） 高校一年
15歳

レベル40

体力 220 / 220

サイオン 308 (375)

力 79 (95)

敏捷 132 (162)

頑強 69

器用 133 (160)

魔法力 141 (169)

魔法技能 189 (227)

魔法ポイント

加速 65

加重 50

移動 80

振動 50

収束 50

発散 45

吸収 55

放出 100

無 60

系統外 75

知覚 45

魔法

自己加速術式

ベクトル反転術式

仮装行列

(パレード)

ダンシングブレイズ

分

子デイバイダー

ムスペルスヘイム

対物障壁

???

戦略級魔法

ヘビィ・メタル・バースト

ステータス

北山雫 高校一年 15歳

レベル23

体力 145 / 145

サイオン 205 (246)

力 38 (46)

敏捷 70 (84)

頑強 25

器用 87 (104)

魔法力 103 (124)

魔法技能 90 (108)

魔法ポイント

加速 45

加重 50

移動 60

振動 85

収束 80

発散 50

吸収 45

放出 55

無 30

系統外 60

知覚 40

魔法

情報強化 共振破壊 能動空中機雷(アクティブ・エア・マイン) フォノン・メー

ザー インフェルノ ???

ステータス

光井ほのか 高校一年 15歳

レベル 22

体力	155 / 155
サイオン	181 (217)
力	44 (53)
敏捷	80 (96)
頑強	30
器用	96 (115)
魔法力	97 (116)
魔法技能	103 (124)
魔法ポイント	
加速	60
加重	55
移動	55
振動	85
収束	65
発散	40
吸収	45

魔法	放出	60
閃光魔法	無	45
幻影魔法	系統外	75
光学迷彩	知覚	70
邪眼(イビルアイ)		
???		

入学編

一高入学

国立魔法大学付属第一高等学校。毎年 国立魔法大学に最も多くの卒業生を出している エリート校である。一学年の定員は200人。そのうちの魔法力の高い100人は1科生として 残りの100人を2科生とする。

今日から俺とリーナ、そして、雫とほのかも第一高校の一科生として入学することになる。

「おーい！リーナ、まだか！」

「……………」

「リーナ！」

「……………」

「開けるぞ！」

「……………」

「何度呼びかけても返事がないので俺はリーナの部屋に入った。するとリーナは鏡を見ながら身だしなみチェックしている。それだけならいいが、自分の制服姿を見てポーズを決めているところを見て俺は軽く引いていた。」

「……何やってるの?」

「はっ!!何でもありません!!」

「フフっ、やっぱりそういうところが俺は好きなんだよな、リーナは……」

「ななな何を言ってるの!?!」

「完璧そうに見えて実はポンコツなところが可愛い。」

「……なんか誉められてる気がしないんだけど……」

リーナは頬を赤らめながら頬を膨らませてきた。うん。可愛い。

「じゃあ行くか。」

「ええ。」

二人は手を繋ぎながら家を出た。

リーナと出会って約二年が過ぎた。俺とリーナは付き合っている。最初は俺とリーナの関係は主従関係だったのだが、接しているうちにドジばかりやるのに、完璧にこなそうとしてするリーナの姿を見て可愛いと思えてきた。

リーナは頑張って強くなるために努力して、実際この世界の誰も和樹に勝てないんじゃないのか思えるくらい強くなった。そして、スターズの追っ手から自分を守ってくれて、いつか守ってもらはんじゃなくて、和樹の隣に立てるような女になりたい、そう思ったから自分が和樹を好きになっただけのことだに気づいた。

俺とリーナは仲良く一高の門をくぐり入学式の会場に向かった。

「入学式の会場ってどっち？」

「情報端末でわかるだろ？こっちだ。」

リーナが会場の場所がわからないと言ってきたので俺がリーナの手を引いて誘導する。

「新入生ですね？ 会場に向かった方がいいですよ。」

上級生と思われる少女が立っていた。

「はい、今行きます。」

「ありがとうございます。」

そう言った後俺は彼女を見ると知ってる顔だった。

「失礼ですけど、もしかして七草先輩ですか？」

「ええ、私のこと知ってるの？」

「友人達と九校戦を観に行つたとき印象に残ってましたから。」

それもあるが原作を見ていた俺が七草真由美を知らないはずがない。

「そう。何だか照れるわね。」

「エルフィンスナイパーとか妖精姫って言われているんですよ。」

「……出来ればその名前を言うのは止めてほしいんだけどね」

「そうですか？可愛い七草先輩には合ってると思うんですが。」

「ちよつ、可愛いって！」

「？変なこと言いました？」

「ううん、何でもないよ!!（まさか、無意識で言ったの？）」

「……………」

七草先輩は目の前で両手を広げ横に振りながら頬を赤らめていた。リーナは横で眼を細めながら俺をみているが、いつもの事なので俺は気にしなかった。

「申し遅れました。自分は真田和樹といいます。」

「私は工藤リーナです。」

「え!?!あなた達が真田くんと工藤さん!?!」

七草先輩が驚いた。まあ無理もないか。理由は…

「魔法実技歴代一位二位。それも魔法速度、魔法強度どちらも歴代一位二位真田君と工藤さん。そして、魔法理論も真田君は平均95点で二位。工藤さんは四位。歴代総合一位で入学してきた真田君!?!」

「…ええ、まあ…」

「え!?!」

俺が答えるがリーナは何か驚いているようだ。そんなことを気にせず七草先輩は語り続けた。

「でもなんで総代を断っちゃったの?」

「……人前で話すの苦手なんで……」

「……そう……。工藤さんも同率二位で今日の答辞は二人でする予定だったのを断られたって聞いたけどどうして?」

「和樹に負けたからです。」

リーナは負けず嫌いなので俺に負けておきながら総代をやるのはリーナのプライド

が許せなかったのだ。

「…そう…」

「先輩、そろそろ。」

「そうね。また今度話しましょう。」

そう言つて先輩は去つた。

「俺たちも行くか。」

「ええ。」

講堂についた俺達はどの席に座るか見ていると前席一科生、後席二科生と綺麗に別れていた。

「実に下らない。」

「和樹、どうする?」

「入学早々目立ってバカを相手にしたくない。前の席に座る。」

俺がそう言い俺達は前の四人座れる席に座った。

暫くすると俺が待っていた二人が来た。

「…あの…お隣空いてますか。」

「空いてるからいいよ。ほのか。」

「和樹さん!」

「おはよう、和樹。」

「おはよう、雫。」

俺が二つ席を取つといていたのは この二人を待っていたのだ。

「和樹がわざわざわざ二つ席用意してくれたのよ。」

「そうなんですか? ありがとうございます、和樹さん!」

「ありがとうございます、和樹。」

「二人で来るって予想はついてたからな。どうせなら四人で座った方がいいだろ。」

「そういう気配りが出来るところが和樹はいいわよね。」

「そうか?」

「そうです。」

「うん。」

リーナの言葉に二人は肯定した。そんな会話をしていたら入学式が始まった。

入学式は無事終わり、新入生全員にして一昔前の学生証と同じ ID カードを交付される。

新入生はこの段階で自分がどのクラスに入るのかはつきりする。自分と親しい人と同じクラスになれるのか、いつの時代も気になるのだ。俺達は ID カードをもらい自分達のクラスを確認した。

「和樹さんは何組ですか？」

「俺はB組だな。三人は？」

「私もB組よ。」

「私はA組。」

「私はA組です。」

俺とリーナはB組、雫とほのかはA組だった。二人は少し落ち込んでいた。

「クラスが違っても 休み時間や放課後一緒にいられるだろ。」

「そうですね！」

「休み時間の度に会いに行く。」

大袈裟などとは思ったが口には出さない。いつものことだから。それに俺も二人が休み時間の度に会いに来てくれたら嬉しいからだ。

断っておくがこれは浮気ではない。実は俺はリーナだけではなくほのかと雫とも付き合っているのだ。でもこれはいけないというわけではない。この世界において魔法師は貴重な存在のため魔法師は一夫多妻なのだ。

「それでこれからどうする？」

「勿論、今から家でトレーニングだ。」

「……………和樹……………それしかないの……………」

「……………和樹さん……………たまには息抜きとかしませんか……………」

「……………和樹……………脳筋……………」

なんか3人に冷めた目で見られてしまった。無理も無い。前世の俺だったらそんな人間を見たら軽く引いてしまう。これの世界に来てから毎日鍛練を積み、これは日課というより趣味だ。

そんなこんなで俺達はいつも通り俺の家に帰宅し、地下室の訓練場で鍛練に励んでいた。

翌日俺とリーナは一高に行こうとしたが外で雫とほのかが待っていた。どうやら一緒に車で行くこうとしてくれていたらしい。

俺達は雫の車で学校に行き雫とほのかはA組に俺とリーナはB組の教室に入っただけだった。

俺は教室に入り自分の席に座ったら、自分の受講登録をするため自分の端末にIDを

セットし、インフォメーションのチェックを始めた。規則、イベント、案内、一学期のカリキュラムまで、キーボードオンリーで受講登録を一気に打ち込んだ。リーナはそれを見てやっぱリスゴいなあとと思った。リーナ以外から視線を感じたのでそちらに目を向けると一人の男子生徒と目が合った

「あつ!?ゴメンね。キーボードオンリーで入力する人なんて初めて見たからちよつと見入っちゃってた。」

「慣れればこつちの方が早いんだ。」

「そうなんだ。あつ、十三束鋼。鋼って呼んで。」

「俺は真田和樹。和樹でいいよ。」

「私は工藤リーナ。リーナでいいわ。」

「よろしく。和樹、工藤さん。」

「それにしても射程距離（レンジ）ゼロと一緒のクラスになるとは思わなかったよ。」

「遠距離はあまり得意じゃないんだよ。」

鋼は目を附せながら言ってきた。

「自分の欠点と言える部分を最大限に活かし自分の武器に変えた。その努力は誇るべきであつて謙遜するべきじゃない。」

「そうね。普通なら諦めるところをアナタは無し遂げたのよ。胸を張っていいと思

うわ。」

二人にそんなことを言われた綱は…

「ありがとう、そこまで言われると少しくすぐりたいね。」

「オリエンテーションも終わったし、二人はどこ行くの？」

「俺は工房に行こうかと。」

「和樹が行くなら私も。」

「へえ、僕も工房に行く予定だから一緒に行かない？」

「別に構わないが闘技場じゃなくていいのか？」

「そつちも後で行くよ。」

そんな会話をしていたら後ろから話しかけられた。

「ねえ、私も一緒に行つていい？」

3人が振り向くとそこには小柄で赤毛の少女がこつちを見ていた。

「いいよ。ところで君は？」

「私は明智英美。エイミイって呼んで。」

彼女は笑顔でそう言ってきた。

「俺は真田和樹。和樹でいいよ、エイミイ。」

「私は工藤リーナ。リーナでいいわ、エイミイ。」

「僕は十三束鋼。よろしく、明智さん。」

「エイミイ」

「え？」

「エイミイって呼んでって言ったじゃん。」

「明智さんじゃダメかな？」

「エイミイ」

「えつと…」

鋼が俺を見てきた。

「エイミイ。慣れるまでは明智さんでいいんじゃないかな。リーナも工藤さんって言われてるし、とりあえずってことで…」

「むくわかった。でもいつか必ず呼んでもらうから。」

その後俺達は工房へ向かった。

昼休み

工房見学が終わり俺とリーナ、鋼とエイミイは一緒に食堂で昼食をとっていた。途中から雫とほのかが加わってきた。四人はすぐ仲良くなつた。

「ところで雫、ほのか、クラスの人と仲良くなれそうか？」

「無理！」

俺はその言葉を聞き少し驚いた。雫はともかくほのかの口から出てくるとは思わなかったからだ。

「どうして？」

リーナも気になつたのか聞いた。

「司波深雪さんって総代の人なら仲良くなれたんですけど……」

「他の人たちは選民意識が強すぎる。テストの成績が良かっただけで自分たちは選ばれた存在であると信じて疑わない考えだからウンザリ。深雪にお近づきになりたいからって言い寄る男達を見ると関わりたくないとさえ思った。」

「……うわあ……」

二人の特に雫はかなりストレスが貯まっているようだ。無理もない。話を聞いてい

るだけで俺も関わりたくないと思ってしまうほどだ。そんな会話をしていると…

『君達、席を譲ってくれないか？』

「何だ？」

突然 不愉快な言葉が聞こえたのでそちらの方に目を向けた。

『雑草（ウィード）は花札（ブルーム）のただのスペアに過ぎない。花札（ブルーム）である俺達が席を譲れと言われれば君達はブルームである俺達の言うことをただ聞いていればいいんだ。』

俺はそんな言葉を言っている彼を見てゴミを見るような目で睨んでいた。

「あの人達だよ。」

ほのかが彼らが先程話していたクラスメートだと教えてくれた。なるほど確かに

あんな奴らじゃ友達だと思われたくないな。

「なるほど、確かにあんなのとは一緒にいたくないな。」

「そうね。あの総代の子もかわいそうに。立場を気にして強く言えないでいるのね。」

「嫌がってるのが分からないのかな？」

「無理じゃない？ ああいう人たちは大体自分の都合のいいようにしか考えられないから。」

俺、リーナ、鋼、エイミイの順番でほのかのクラスメートを見てそう述べた。あれは

駄目だ。魔法師以前に人として終わってるわ。あいつらどういいう教育を受けて生きてきたんだろうな。おそらく魔法師としての教育しか受けてないんじゃないの。人としての教育を受けているんだっただらすがにああはならないよな。そんなことを考えていたら。

『あつ!?!光井さんに北山さん!?!』

例のゴミがほのかと雫を見かけ声をかけてきた。二人はかなりうんざりしていた。

「聞いてくれよ二人とも。司波さんが僕達じゃなくウィードと一緒に同席すると言っているんだ。僕達はウィードと一緒にいると司波さんのためにはならないと言ってるんだ。だがこのウィードの奴等が立場を理解せず邪魔してくるんだ。」

その言葉を聞きほのかは、少し困り気味で雫は呆れていた。

「君たち、今昼休み中だ食事時の時ぐらい静かにしてくれないか。」

俺はこの手のタイプが大っ嫌いなのでつい口を出してしまった。

「なんだお前は?これはA組の問題だ。口を挟まないでもらえないか。」

「A組の問題なら他所でやれ。ここはお前たちだけじゃない。上級生や他のクラスメートもいっぱいいるんだ。しかもこれだけ騒いでA組の問題などとバカを言うのは止めろ。迷惑だ。」

「何!?!」

彼の逆鱗に触れたのか、彼は俺の肩を掴もうとした。だが触れようとしたが捉えられなかった。

「!?消えた!!」

俺は背後に回り込み右手を人差し指だけ伸ばしピストルのように構えた。

「迷惑だと言ったんだ。これ以上騒ぎが大きくなれば学校側だって容赦しないぞ。お前は入学早々問題を起こしたいのか。」

俺がそう言う顔と顔を蒼白にしながら他の奴等連れて去っていった。

「ハア……なんなんだあいつ!」

「気にしないほうがいいわ。和樹が気にするほどの価値がないわよ」

「ありがとう、和樹。」

「和樹さん、すいませんでした。」

「謝るなよ、ほのか。俺がアイツに頭にきて勝手にやったことだ。」

「それでもです。」

「去る前のあの人の顔見た? 私はスッキリしたわ。」

「うん。」

「それはよかった。」

「……………」

「二人とも、どうかしたか？」

さつきから黙っている鋼とエイミィに声をかけた。

「…和樹…さつきどうやって背後に回ったの？」

「…うん…僕にも微かにしか見えなかった。」

「どうやってって、普通に正面から回り込んだだけだけど？」

「…魔法は使ってないってこと？」

「魔法の痕跡なかっただろ？ それにこんな所で魔法を使ったりしないよ。」

「……………」

「二人ともどうしたんだ？」

「和樹、これが世間一般の反応よ。」

「確かに、私たちは最近見慣れちゃったから、そこまで驚かないけど、初めは、何が起きたのか分からなかったよね。」

「和樹に常識は通用しない。」

「酷い言われようだな。」

でも俺は非常識って言われるのが割と気に入っていることなので、内心嬉しかったりもする。普通ならできないと言われていることができるというのは意外に、高揚感ができるものではないだろうか。

『お食事のところすみません。』

俺は昼食の続きを始めようとご飯を口に入れようとした瞬間誰かの声が聞こえた。今度はなんだ? と思いきちらを見ると新入生総代だった司波深雪がいた。

「何?」

「先程は場を鎮めてくれてありがとうございます。」

「ああ、別にいいよ。俺達も鬱陶しいって思ってたから。」

「……それで……あの……私も一緒にしてよろしいでしょうか?」

「ん? さっきの二科生の人達は?」

「それが……先程のことで気分を悪くしたのか……行ってしまわれて……」

「なるほどね、俺はいいけど皆は?」

「私はいいわよ。」

「僕も。」

「私も。」

「一緒に食べよ。深雪。」

「うん。」

「だつてさ。」

「ありがとうございます。」

皆の同意を得られたので深雪はほのかの隣に座った。

「初めまして、私司波深雪と申します。」

「俺は真田和樹だ。よろしく。」

「私は工藤リーナよ。リーナって呼んでね。」

「私、明智英美。エイミイって呼んで。」

「僕は十三束鋼。鋼でいいです。」

「よろしくお願いします。リーナ、エイミイ、真田さん、鋼さん。」

一通り自己紹介が済ませ、昼食も食べ終わった後、俺達は十文字先輩のフアランクスが見たいたため闘技場に向かっている。

「そういうえばリーナと真田さんはどうして新入生総代を断ったのですか?」

「え!?!」

司波さんの突然のカミングアウトで鋼とエイミイは驚いた。雫とほのかは前もって知っていたため驚かなかった。寧ろこの二人は俺が誰かに負ける方がおかしいと思っ
ているくらいだ。

「…司波さん。それって七草先輩から聞いたの?」

「はい、そうです。」

やっぱりな。あの人絶対口軽いから…

「え!? え!? じゃあ本当に?」

「二人が同率入試一位だったの?」

エイミーが何がなんだか分からないといった感じ混乱していたため、鋼が代わりに聞いてきた。

「いや、俺が入試一位でリーナは司波さんと同率二位だったんだ。」

「……そうだったんだ……」

「それで、何故断ったのですか?」

「単純に大勢の前で何かを喋るってことが苦手なんだ。間違ひなく俺がやってたらドジってるよ。実際中学の卒業生代表の答辞をやらされた時緊張しまくって失敗しなしかハラハラしてたからね。」

「……本当ですか?」

司波さんが俺の目の前に来て顔を近づけて言う。それもお互いの鼻がぶつかりそうになるくらいに。ほのかは「あわわわわわ」と赤面し、雫は「深雪意外と大胆」とか言ってるし、エイミーは「あとちよつと、あとちよつと」とか言って何かを期待しているように言ってるし、鋼は顔を赤らめながら明後日の方を向いてるし、リーナは目を細めて俺を睨んでくるし、周りの連中は興味津々といった感じ顔を赤らめながら見ている。

「本当だ………それと顔近い………」

「あ、すいません。」

気づいた深雪は少し赤らめてすぐに離れた。

「嘘ではないようですね。でもリーナは何故答辞をやらなかったの？」

「和樹に負けたのに答辞何てやりたくないわ。」

「そうなの…。」

「本当は 授業受けるのが面倒なので テストで手を抜いて二科生で入学しようと思つてたんだけど、そんなことをしたら二度と口を聞かないってリーナと雫に言われたから しょうがなく一科生として入学したけど俺がその代わり答辞はやらないってことで納得してもらった。」

本当はそれも納得していない二人だけ俺がそういうこと苦手だとわかっていたため許したのだ。

「……………変わってるね……………」

「…………… そんな人いるんだね……………」

鋼とエイミイは変な人を見るように俺を見て言ってきた。

そんな会話をしていると…

「ちよつといいかしら。」

声がしたのでそちらの方を向くと七草先輩と 見た感じイケメン系女子がいた。

「七草先輩と確か渡辺先輩？どうかしたんですか？」

「ええ、実は真田君と工藤さんに話があつて 今日放課後生徒会室に 来てもらえな
いかしら？」

「まあ少しでしたらいいですよ。」

「私もいいです。」

「じゃあまた後で。」

その一言で二人は去っていった。

「何かやったの？」

エイミイが少し砕けた感じで聞いてきた。

「そんなわけないだろ。おそらく 生徒会か風紀委員のどちらかに入つて欲しいと
かそういう話だろ。」

「私たちが本来の入試主席、次席だから。」

「だったら何でここに司波さんがいるのに誘わなかったんだ？」

「「「「確かに……」」」」

「まあいい、とにかく放課後生徒会室によるから、雫とほのかは先に帰つててよ。」

「うん、わかった。」

「はい。」

だが、
今日のトラブルはこれだけでは終わらなかった。

放課後

「失礼します。」

俺とリーナは 生徒会室に呼ばれたのでやって来た。

「ようこそ生徒会室へ。さっ、遠慮しないで入って。」

生徒会室に入るとそこには 七草会長と渡辺委員長、あと二人かわいい系と美人系の女の人がいた。七草会長が席を促してくれたのでその席に座った。そういえばさつき七草会長と渡辺委員長のステータスを確認しなかったな。

ステータス

七草真由美 17歳 高校3年

レベル37

吸収	発散	収束	振動	移動	加重	加速	魔法ポイント	魔法力	魔法技能	器用	頑強	敏捷	力	サイオン	体力
60	70	80	70	75	60	80		143	166	89	17	35	30	255	73 / 73

放出 60

無 65

系統外 60

知覚 80

魔法

ドライ・ブリザード ダブル・バウンド マルチ・スコープ 魔弾の射手 ドライ・

ミーティア

ステータス

渡辺摩利 17歳 高校3年

発散	収束	振動	移動	加重	加速	魔法ポイント	魔法力	器用	頑強	敏捷	力	サイオン	体力	レベル
40	80	55	75	80	70		111	91	33	101	50	205	129 / 129	32

吸収 50

放出 30

無 35

系統外 35

知覚 30

魔法

M I Dフィールド 自己加速術式 硬化魔法 慣性中和魔法

なるほど、二人は対照的だな、遠距離型の七草会長と近距離型の渡辺委員長つていうところか。しかし、魔法科高校なだけあって、魔法ポイントは高いな。特に七草会長は苦手分野がないといったところだ。流石は『万能』の七草だな。

「まずは紹介しますね。手前から会計の市原鈴音。通称リンちゃん。」

「…私のことをそう呼ぶのは会長だけです。」

「うん。この人にリンちゃんはないですね。」

「うう…とにかく書記の中条あずさ。通称あーちゃん。」

「会長、下級生の前で『あーちゃん』は止めてください。私にも立場というのがあ
るんですから。」

「うん、確かにこの人はあーちゃんだ。」

「ほら…後輩にまで言われちゃったじゃないですか。」

「まあ、それだけ親しまれているって事ですよ。」

「親しまれすぎです！」

「まあまあ、あーちゃん落ち着いて」

七草会長があーちゃんを鎮めるがあーちゃん呼ばわりされてるので少し不服のよう
だ。さて、二人のステータスは…

ステータス

市原鈴音 17歳 高校3年

レベル 25

体力 88/88

サイオン 159

力 34

敏捷 39

頑強 20

器用 77

魔法力 89

魔法技能 151

魔法ポイント

加速 50

加重 45

ステータス

魔法	知覚	無	放出	吸収	発散	収束	振動	移動
人体直接干渉魔法	40	40	40	40	40	40	40	40
		系統外						
		85						

あーちゃん 16歳? 高校2年?

レベル 21

体力 47 / 47

サイオン 128

力 20

敏捷 13

頑強 8

器用 33

魔法力 77

魔法技能 82

魔法ポイント

加速 45

加重 40

移動 40

振動 35

収束 40

発散 40

吸収 40

放出 35

無 40

系統外 90

知覚 35

魔法
梓弓

優秀な二人でも戦闘力が高くないとステータスも低いといったところなのかな？
でも正直驚いたのはあーちゃんの名前の欄があーちゃんになっていて、年齢と学年に？
が付いているところだ。ステータス欄でこの現象がでるとは……………そして、このス

テータスで学年主席とは………謎だ………あーちゃん、恐るべし

「それで俺とリーナを何故ここに連れてきたのですか？」

「そうね、では本題に入らせていただきます。当校は生徒の自治を重視しており生徒会は学内で大きな権限を与えられています。生徒会は伝統的に生徒会長に権限が集められています。生徒会長は選挙で選ばれますが生徒会役員は会長が選任します。

各委員会の委員長も一部を除いて会長に任命権があります。」

「私の勤めている風紀委員会がその例外の一つだ。生徒会、部活連、教職員会、この3者がそれぞれ3名ずつ計9名を風紀委員として選ぶ。風紀委員長はその9名の風紀委員内の選挙で決まる。」

「つまり摩利はある意味で私と同格の権限を持っているんです。毎年新生首席には生徒会に勧誘するのが通例となっています。本来の主席は真田くんなのですが断られたので今年の新生総代として司波深雪さんを生徒会に入れようと思います。ですが魔法実技歴代1、2位の真田くんと工藤さんをそのままにするのはということになります。お二人に風紀委員に入ってもらいたいです。」

そう言われ俺とリーナは 渡辺委員長から 風紀の腕章を渡され俺とリーナ、七草会長と渡辺委員長の四人で校門へ向かった。

校門に着くと、 新入生の一科生と二科生が 言い争っていた。

『いいかい？ この魔法科高校は実力主義なんだ。 その実力において君たちはブルームの僕たちに劣っている。 つまり存在自体が劣っているということだよ。 身の程をわきまえたらどうだ。』

一科生の先頭に 立っていたのは 昼休みに 俺に突っかかっていた 男だった。 その男が二科生達を見下す発言をしていた。

「 どうしてああも馬鹿なのかね。 自分も大した実力を持ってないのに 選ばれた人間気取りか… 」

「 そうなの？ 」

「ああ。あの程度の実力だったらリーナ一人で簡単に片付けられるよ。」

一科生達のステータスを見たが、どいつもこいつも平均で30〜40程度。あの先頭に立っている森崎、もうモブ崎でいいや。モブ崎は平均50といったところだ。あの程度のモブならわざわざステータスを細かく書く必要はないな。『書くって何のこと？』何か突っ込まれたような気がするがそれは置いて…

「同じ新入生なのに、今の時点でどれだけ優れてるって言うんですか!!」

「!?…不味いなこれは…」

過激な発言が聞こえたので俺は不味いと思いつつCADを取り出した。

『ウイードとブルームを同列に語るな。その他思い知らせてやろうか? 二科生…風

情がああああ!!』

モブ崎がCADを取り出し、魔法を放とうとした。俺はその瞬間魔法を放った。

対抗魔法『術式解体(グラム・デモリッション)』

モブ崎が放とうとした魔法をグラム・デモリッションで相殺した。

『魔法式が…!!』

「そこまでだ!! 魔法による対人攻撃は校則違反以前に犯罪だぞ!!」

俺のその言葉に全員がこちらに気づいた。

「お前は昼間の!!また邪魔するのかわ!!これはA組の問題だ!! 関係ない奴は引っ込ん

でろ!!」

「……お前……これが見えないのか？」

俺がそう言い自分の腕章を見せる。

「……お前……風紀委員……」

「状況が理解できたな。ということでお前は風紀委員室に連行する。」

「抵抗しない方がいいわよ。すでに起動式は展開済みです。抵抗すれば即座に魔法を

発動させます。」

「な!?!何で俺だけ!?!」

「魔法による対人攻撃は校則違反以前に犯罪だ。そして風紀委員が取り締まるのは

魔法の不適正使用だ。そして、魔法を使おうとしたのはお前だけ」

「使つてないんだからいいだろうが!!」

「はあ……確かに使つてはいなかった。だがそれは俺が止めたからだ。止めて

いなかったら一体どうなっていた。最悪殺人が起きていたところなんだぞ。魔法

を使う者として最悪の事態を考えるのは当然だ。そんな甘い考えをしている時点で

お前は魔法を使う資格はない。委員長、あとはお願いします。」

モブ崎はあとからやって来た渡辺委員長に渡し連行されていった。俺はその時渡辺

先輩に一つお願いをした後、俺はリーナの腕章と一緒に返しておいた。

「お前達も解散しろ。もうこんなことはないようにしろよ。」

俺がそう言うのとA組の連中は渋々解散していった。

「和樹さん！リーナ！」

「ほのか、雫。ついでに鋼とエイミイも。」

「誰がついでよ！」

「僕たちの扱いひどくない？」

「冗談だ。一度言ってみたかったんだ。」

「酷い。」

鋼たちに対する俺の対応は何気に鬼畜だった。

「あの…お話し中すみません。」

声が聞こえたので振り向くとそこには司波さんと二科生の面々が揃っていた。

「ああ、司波さんも大丈夫だった？ 人気者は大変だね？ まあ、司波さんの場合 日常茶

飯時つばいけど…」

「いえ、そんなことは…」

司波さんは少し顔を赤らめながら答えると…

「先程はすまなかった。礼を言う。」

司波さんの隣にいた男が声をかけてきた。

「いやいや、俺は自分の仕事をしただけさ。」

「そう言ってくれると助かる。俺は司波達也だ。」

「司波達也？もしかして司波さんとは兄妹？」

知ってはいたが初対面で知っているのも何かおかしな話なのでとぼけてみた。

「ああ。」

「ということば双子？」

「よく聞かれるが、俺が4月生まれで妹が3月生まれだから同じ学年なんだ。」

「そっか、俺は真田和樹だ。和樹でいい。」

「俺も達也でいい。」

「オーケー、達也。」

「あのみ」

達也との会話のタイミングを見計らってまたも俺に声をかけてきた眼鏡をかけた女性の人がいる。

「さつきはありがとうございます。おかげで助かりました。私は柴田美月といいます。」

「いいよ。さつき達也にも言ったけど俺は自分の仕事をしただけさ。」

「ありがとうございます。」

達也達と一緒に行った他の三人も声をかけてきた。

「さつきはすまねえな。ついカツとなっちまって。西条レオンハルトだ。レオって呼んでくれ。」

「ありがとね、真田くん。私は千葉エリカ。エリカって呼んで。」

「僕は吉田幹比古。幹比古って呼んでくれ。」

「別に幹でもいいわよ。」

「僕の名前は幹比古だ！」

「よろしく、レオ、エリカ、幹比古。お前たちも自己紹介したら？」

俺は後ろにいる五人に声をかけた。

「そうね。私は工藤リーナ。リーナでいいわ。」

「僕は十三束鋼。鋼って呼んで。」

「私は明智英美。エイミイって呼んでね。」

「私は北山雫。よろしく」

「私は光井ほのかです！よろしくお願いします。」

とりあえずこの場にいる全員が自己紹介したので、駅までみんな一緒に帰ることになった。

「ねえ和樹君。」

「何？」

エリカが声をかけてきたので返事をした。

「さっき一科生の魔法を消した魔法って何？」

「グラム・デモリツションだな和樹。」

「正解だ。よくわかったな達也。」

「俺も使えるからな。」

「え？達也も？」

「達也も？つてことは鋼も？」

「うん。使えるよ。」

「達也、それってどんな魔法なんだ？」

周りを見ればレオだけじゃなくみんな興味津々のようだ。

「圧縮したサイオンの塊を直接ぶつけてそこに付加された起動式や魔法式を吹き飛ば

してしまう対抗魔法だ。」

「僕の場合は 飛ばしてぶつけることができなから接触型だね。」

「へえ、そんなことできるのか。三人ともスゲーな。」

「おっと、どうやら電車が来たようだ。俺とリーナはこれに乗って帰るよ。じゃあ明日。」

「じゃあね皆、また明日。」

「なあ、真由美。」

「どうしたの？ 摩利」

「和樹君の風紀委員は入りは確定だな。」

「そうね。まさか、グラム・デモリッションが使えるなんてね。でも、工藤さんはどうするの？」

「問題ないだろ。あの場で私より速く起動式を展開していたんだからな。ただ、実力を見たいから明日模擬戦をやってもらう」

「わかったわ。」

風紀委員

翌日

昼休み

俺とリーナ、そして、司波兄妹が生徒会室に来ていた。

「失礼します。一年 B 組真田和樹です。」

「同じく、工藤リーナです。」

「一年 A 組の司波深雪です。」

「一年 E 組司波達也です。」

「ようこそ生徒会室へ。さっ、遠慮しないで入って。」

「失礼します。」

深雪は礼儀作法のお手本のようなお辞儀をした。

「えくと……ご丁寧にどうも……」

生徒会室に入るその先輩達は すっかりその雰囲気にも飲まれてしまっていた。

「ランチはダイニングサーバーがあるので好きなメニューを選んでね。お話はお昼を食べながらにしましょう。」

お昼を食べながら 七草会長は生徒会のメンバーを紹介していった。俺とリーナは 昨日のうちに自己紹介をされたのでスルーして持参したお弁当を食べていた

「あ…渡辺先輩、そのお弁当はご自分でお作りになられたのですか？」

司波さんが渡辺先輩がお弁当を持参してきたので聞いていた。

「そうだが…意外か？」

「いえ、少しも。 普段から料理をしているかどうかはその手を見ればわかりますから。」

達也がそう答えると渡辺先輩は 頬を赤く染め両手を隠した。

「そうだお兄様、 私たちも明日からお弁当にしましょうか？」

「深雪のお弁当はとても魅力的だけど、二人になれる場所がね…」

「兄妹というより恋人同士の会話ですね。」

司波兄妹の会話に市原先輩が答えた。

「そうですか？ まあ確かに血の繋がりがなければ恋人にしたいと考えたことはありませんが…」

それを聞いた深雪を含めた女性陣が顔を赤く染めた。

全く…このシスコン兄貴が…

「もちろん冗談ですよ。ところで和樹。何か失礼なことを考えてないか？」

「何のことだ俺はただ達也がシスコンだなど思っただけだ。」

「それ十分失礼よね。」

俺の言葉にリーナが突っ込んできた。

「?シスコンの何が悪いんだ?兄が妹のことを想っているのは当たり前だろ?」

「…そんな、お兄様が私のことを想っていることが当たり前なんて……」
//////

俺の言葉を聞いて深雪は天にも昇るような幸せな表情をしながら身悶えている。俺達はそんな深雪を見て何とも言えなかった。

「……………そろそろ本題に入ってもいいかしら。」

場の空気を変えるため、七草会長は声をかけてきた。昨日俺とリーナに話した内容を達也たちに説明した。

「生徒会長は任期中役員を自由に任命できません。司波深雪さん、私はあなたの生徒会入会を希望します。引き受けていただけますか?」

「失礼ですが、その真田と工藤さんは入試首席と次席と聞きましたが生徒会に入らないのですか?」

「彼らは風紀委員に入ることになった。」

七草会長が深雪に生徒会に入るように言った後に達也が疑問に思ったことを聞くと

渡辺委員長が説明してくれた。

深雪は達也に目線を向けると達也が頷いた。その後深雪は何故か 思いつめた表情をして口を開いた。

「会長は兄の入試成績をご存知ですか？ 有能な人材を生徒会に迎え入れるのなら私よりも兄の方がふさわしいと思います。」

「おいつ、深……」

「デスクワークに実技は関係ないと思います。むしろ知識や判断力の方が重要なはずです。私を生徒会に加えていただけるといってお話は大変光栄です。喜んでお引き受けしたいと思います。ですが…… 兄も一緒に生徒会に入るわけにはいきませんでしょうか？」

「残念ながらそれはできません。生徒会役員は第一科の生徒から選ばれます。これは不文律ではなく規則です。この規則は生徒会長に与えられた任命権に課せられる唯一の制限事項として生徒会が現在のものとなった時に定められたものでこれを覆すためには全校生徒の参加する生徒総会で制度の改定が決議される必要があります。決議に必要な票数は在校生徒の2/3以上ですから一科生と二科生がほぼ同数の現場では制度改定は事実上不可能です。」

深雪に対する答えを市原先輩が答えた。深雪が不満そうな顔をしているが 一応納

得したようで謝罪した。

「では深雪さんは書記として今季生徒会に参加していただきます。」

「はい。精一杯務めさせて頂きますのでよろしくお願いします。」

「ちよつといいか?」

深雪が生徒会入りが決定したところで渡辺先輩が声をかけた。

「昨日教職員推薦枠で風紀委員になるはずだった森崎の代わりにその枠に真田が入ることになったから一人代わりに一人いれなければならぬだろ?」

「そつちは今人選中。昨日起きたばかりなのよ。」

「実は昨日真田君に頼まれたことがあるんだが、達也君を風紀委員に入れてはどうだろう。」

「はあ!?!」

渡辺先輩の発言に達也は驚きの声を出した。そして、俺の方を睨み付けてきた。俺は知らないふりをして明後日の方を向いていた。

「さっきの話だが、『生徒会の役員は第一科の生徒から選ばれる』だったよな。つまり、一科の縛りがあるのは『生徒会』メンバーだけ、風紀委員は二科の生徒を選んでも規定違反にはならない。」

「!?!」

渡辺先輩の言葉に司波兄妹は驚愕した。だが、双方の反応は同じでも中身はまるで違っていた。達也は『不味い!』といった心境。深雪は『やった!』といった心境。

「和樹君、摩利、……あなたたち……ナイスよ!! そうよ、風紀委員なら問題ないわ! 生徒会は司波達也君を風紀委員に任命します!」

「はあっ!?!」

普段の達也からは出ない、いや、あり得ない反応。これはレアだな。パシヤリ、と……「ちよつと待つてください! 俺の意思はどうなるんですか! 大体風紀委員が何をする委員なのか 分かっているでしょう! 中条先輩!」

「はうつ、あのつ、えつと、…… 当校の風紀委員会その任務は魔法使用に関する校則違反者の摘発と魔法を使用した騒乱行為の取り締まり……いわば魔法科高校の警察です。」

「風紀委員長確認させてください。」

「なんだ?」

「今の説明ですと風紀委員は喧嘩が起こったらそれを力づくで止めなければならぬということですよ?」

「そうだな。」

「そして魔法が使用された場合それも止めなければいけないと。」

「出来れば使用前に止めさせるのが望ましい。」

「あのですね！ 俺は実技の成績が悪かったから二科生なんです!! 実技で劣るに二科生に二科生の魔法使用を止められると思えますか!？」

「構わんよ。 力比べなら私がいる。それに君なら出来ると真田が言うのでね。」

「はあ？」

達也はワケがわからないといった顔をする。

「とはいえ実力を見ておきたいので放課後私と模擬戦をしてもらおう。…そろそろ昼休みが終わるな。」

「まだ話が終わっていませんが。」

「では続きは放課後にここで。」

「わ…分かりました。」

「和樹。どうということだ？」

「なんのことだ？」

「惚けるな。何故お前が俺の実力を知っている。」

「ということは、和樹の言うとおり実力を隠してることね。」

達也が俺に対して自分の実力を知っていることに対して聞いてきたがそのやり取りでリーナも達也は実力があることがバレてしまった。

「そういうことじゃない。俺は…」

「司波さん。達也は風紀委員に入るのは無理だと思おう？」

「そんなことはありません！お兄様なら必ず活躍できます。」

達也は反論しようとするが今度は俺と司波さんに遮られてしまった。

「なら何も問題ないな。」

「何が問題ないだ。俺の質問に…」

「俺は見ただけでそいつの実力がわかるんだよ。特殊な目をもっているのはお前だけじゃないってことだ。」

「!？」

俺のその言葉を聞き、達也は鋭い目で俺を睨み付けた。いや、司波さんもか……。俺は全く気にしなかったが、
ところでさつき見た二人のステータスなんだが、

ステータス

司波達也 15歳 高校一年

レベル 42

体力 302 / 302

サイオン 495

力 100

敏捷 162

頑強 91

器用 192

魔法力 50

魔法技能 222

スキル

精霊の目（エレメンタルサイト）
体術（最上級）

魔法ポイント

加速 20

加重 20

移動 20

振動 20

収束 20

発散 20

吸収 20

放出 20

無 100

系統外 50

知覚 100

魔法

自己加速術式 自己修復術式 分解 再生 術式解体(グラム・デモリッション) 術

式解散(グラム・デイスパーション) 雲霧散消(ミスト・デイスパージョン)

戦略級魔法

マテリアル・バースト

ステータス

司波深雪 15歳 高校一年

レベル 30

体力	165	165
サイオン	323	
力	50	
敏捷	83	
頑強	33	
器用	101	
魔法力	139	
魔法技能	120	
魔法ポイント		
加速	90	
加重	70	
移動	65	
振動	100	
収束	70	
発散	60	
吸収	50	

放出 45

無 45

系統外 90

知覚 50

魔法

領域干渉 インフェルノ ニブルヘルム コキユートス

以前見たときと比べて達也は思ったより伸びてないな。あのときは俺より格段にレベルが高かった記憶がある。おそらく格下ばかり相手にしていたからだろう。自分と同等もしくはそれ以上の相手以外と戦っても経験値が伸びないことはすでに実証済みだ。

おそらく達也は俺と違って乱童のような人外と戦ったことがほとんどないのだろう。実戦で格下ばかり相手にしてもレベルが上がるのは、おそらく九重八雲のおかげ。

だが、実戦と訓練では経験値がまるで違う。そのせいで伸び悩んだのだろうな。

逆に司波さんはレベルが大分上がっている。これは達也のおかげだろう。沖縄に行く前は司波さんは達也とあまりいい関係じゃなかった分、一緒に鍛練をしたことがなかったはずだ。

だが、沖縄の件で達也とは良い関係を築くことになり達也の言うことを聞き大分腕をあげたとみた。

それでも、リーナより弱い。

原作では二人はライバルといわれるくらい力は均衡していたはずだ。リーナは俺に出会ったことで人外と戦う場面が多くなり経験値が増えたのだろう。

スターズにいたときより経験が多いって、俺、どんだけトラブルが堪えないんだろう

：

そんなことを考えながら俺達は各自の教室に戻っていった。

模擬戦①

「失礼します。」

放課後になり俺とリーナ、司波兄妹が生徒会室に来た。するとそこには昼休みにはいなかった副会長の服部先輩がいた。明確な敵意を持った視線が達也に向けられていた。その服部がこちらにやって来た。

「副会長の服部刑部です。真田和樹君、工藤リーナさん、司波深雪さん、生徒会へようこそ。」

俺たちにわざわざ挨拶をしてきてくれたが達也のことは無視して元いた場所へ戻っていった。感じ悪いとは思ったが俺を含めた三人に挨拶したことからモブ崎とは違い二科生を見下しているのではなく、一科生であることを誇りに思っているであろう。

「よっ、来たな。」

「四人ともご苦労様。」

「どうも。」

渡辺先輩と七草先輩が挨拶をしてくれたので軽く返した。

「それじゃあ真田、工藤さん、達也君、妹さんは生徒会に任せて我々も移動しようか。」

風紀委員の本部はこちらから繋がっている。ちよつと変わった作りだろ。」
何故俺だけ呼び捨てで……？別にいいけど……

「渡辺先輩待つてください。」

声が出た方を振り向くと服部先輩がいた。

「なんだ？ 服部刑部少丞範蔵副会長。」

「フルネームはやめてください!! 服部刑部です！」

「刑部は官職名だろ？お前の家の。」

「今は官職なんてありません。」

「じゃあ服部半蔵君。」

「歴史上の人物と一緒にされたくないんです！」

「まあまあ摩利、はんどー君にも色々譲れないものがあるのでしよう。」

するとはんどー先輩は黙った。どうやら七草先輩には呼ばれてもいらしい。

「ともかく……渡辺先輩 そのの1年生を風紀委員に入りするのは私は反対します。」

過去 過去ウィードが風紀委員に任命された例はありません。」

「それは禁止用語だぞ！」

「今更取り繕つても仕方ないでしょう。それとも全校生徒の1/3を摘発するつもりですか。」

「ハア、何故二科生が風紀委員に入ってはいけないのですか？ 校則では二科生が生徒会に入ってはならないとありますが、風紀委員に入ってはいけないという規則はないはずですよ。」

俺は服部先輩の言葉に馬鹿かと思っただけで、口を出してしまった。

「ウイードは実力が劣っている。そんなことで取り締まるのは不可能だ。」

「副会長、実力って何かしら。」

リーナも服部先輩の言葉に思うところがあったようなので聞いてきた。

「それは魔法力だ。そして発動速度、干渉力と威力だ」

俺とリーナは揃って深いため息吐いてしまいそれを聞いた服部先輩は機嫌が悪くなっていた。

「本当にそう思っているんですか？」

「何？」

「魔法がどんなに強くなったって当たらなければ意味がない。小学生でも分かりますよ。大事なのは使い方です。」

「何だ?!」

「たとえどんなすごい大魔法を使ったとしても、使い方を工夫した小魔法に劣ります。つまり、いかに発動速度が速くてもその場にあった魔法を使わなければ負けるとい

うことです。」

「くつ、会長、私はこの二科生を風紀委員入りは反対です！魔法力に乏しい二科生に風紀委員は無理です！」

「待ってください!! 兄の実技評価が芳しくないのは評価方法が兄の力と合っていないだけです。実戦ならば兄は誰にも負けません!!」

「…司波さん、僕たちはいずれ魔法師となる一科生…常に冷静を心掛けなさい。身轟肩に目を曇らせてはいけませんよ。」

「お言葉ですが副会長お兄様の本当の力をもつてすれば…」

「深雪!!」

熱くなった司波さんを達也が止めた。

「服部副会長俺と模擬戦しませんか？」

達也が言うのと少しの間静かになった。

「思いうがるなよ、補欠の分際で!!」

「ふっ…」

「何がおかしい!!」

「魔法師は冷静を心がけるのでしよう?」

先ほど言った自分の言葉を言われたせいで服部先輩は押し黙った。

「別に風紀委員になりたいわけじゃありませんが、妹の目が曇っていないと証明する為ならばやむを得ません。」

「いいだろう。身の程を教えてやろう。」

「では生徒会権限により二人の模擬戦を正式に許可します。時間はこれより30分後双方にCADの使用を許可します」

七草先輩と渡辺先輩も二人の模擬戦を認めた。

「それと真田だったな、お前も俺と戦え。お前の生意気な態度を俺が叩き直してやる。」

「は？ 何言ってるんですか？ いやですよ。あなたの機嫌取りのために使うなんてこつちのメリットもまるでないじゃないですか。」

「何だと!!」

「真田、悪いが お前の実力を直にみるためにも服部と戦ってもらおう。」

「だから嫌ですって。大体こんな弱い人と戦っても俺の実力を計るなんて無理ですよ。」

「な!?!」

俺の一声でその場が静まった。この場で俺の言葉に同意したのはおそらくリーナだけだろう。因みに服部先輩のステータスは…

ステータス

服部半蔵 高校二年 16歳

レベル 24

力 48

敏捷 44

頑強 45

器用 70

魔法力 82

魔法技能 88

魔法ポイント

加速	6	5
加重	4	0
移動	7	0
振動	4	0
収束	8	0
発散	5	5
吸収	4	5
放出	4	0
無	4	5
系統外	4	0
知覚	3	5

魔法

ドレイ・ブリザード
 ド・ストーム）
 這い寄る雷蛇（スリザリン・サンダース）
 砂塵流（リニア・サ

…だから……。確かに悪くはないんですけど特別凄くもないって感じなんですよね
…

「思い上がるなよ、一年の分際で!!」

「魔法師は冷静を心がけるのでしよう?」

服部先輩は達也と同じことを俺にも言われかなり頭に血が登っているがここは我慢
した。

「まあ達也に勝てたら相手になりますよ。おそらく10秒も立ってられないでしょうが
…」

「(ギリツ) いいだろう、俺をそこまで馬鹿にしたことを後悔させてやる。」

「因みに10秒以内で倒されたら、今後はんぞー先輩つて呼びますから」

「な!?!」

「あれ? 自信ないんですか?」

「…いいだろう。」

それから俺達は 30分後に第3演習室にて模擬戦をすることになった。

30分後、第3演習室で達也と服部先輩の模擬戦が始まろうとしていた。審判は渡辺先輩だ。そして、何故か十文字先輩もここに来ていた。

「大丈夫なの？ はんぞー君はあれでも第一高校で五本の指に入る実力者よ。試合に関して言えば入学以来1年間負け知らずだし…」

「関係ありませんよ。それに戦った相手は全員一科生ではありませんでしたか？」

「ええ、そうだと思うけど…」

「なら余計に心配ないわね。」

七草先輩が 心配になつて俺に声をかけてきたが 俺は全く心配していない。俺だけじゃなくリーナも心配してないことに七草先輩は理解出来なかった。

「時間だ。ルールを説明する。相手を死に至らしめる術式ならびに回復不能な障害を負わせる術式は禁止。武器の使用は禁止。素手による攻撃は許可する。勝敗は一方が負けを認めるか審判が続行不能と判断した場合に決する。ルール違反は私が力づくで勝利するから覚悟しろ。」

渡辺先輩がルールを説明した。

「準備はいいか？」

達也と服部先輩は互いに頷いた。

渡辺先輩は右手を上げ

「始め!!」

一気に振り下ろした。

その瞬間服部先輩はCADを操作し魔法を発動させようとするが、その一瞬で達也が服部先輩の間合いに入った。

「(速い!! 直ちに座標を修正し) 司波を!!」

だが達也は突然目の前からいなくなっていた。

「消えた!?!」

達也は背後に回り、魔法を発動。服部先輩はそれを受け倒れた。

辺りは一瞬の静寂に満たされていた。

「(はっ) 勝者、司波達也!!」

それに対して生徒会メンバーは全員が驚いていた。深雪は達也が勝つことを疑って
おらず「さすがお兄様!」といわんばかりの顔をしている。

俺とリーナは達也が勝つと思っていたので苦笑いだ。

十文字先輩は相変わらず威風堂々と腕を組み何を考えているのか分からん。
「待て。あの高速移動は自己加速術式を予め展開していたのか?」

渡辺先輩が達也のあの高速移動の動きが 気になり 聞いてきた。

「魔法ではありません。 真正正銘身体的な技術です。」

「兄は忍術使い九重八雲先生の弟子なんです。」

「あの九重八雲の!?!」

「ではあの攻撃魔法も忍術ですか? 私にはサイオンの波動そのものを放つたように
見えましたか」

「正解です。 振動の基礎単一系統魔法で作ったサイオン波です。」

「でもそれだけであのほんぞー君が倒れるなんて」

「酔ったんですよ」

「酔った?」

「魔法師は一般人には見えないサイオンを　光や音と同じように知覚します。しかし予期せぬサイオン波にさらされた魔法師は揺さぶられたように錯覚し船酔いのような状態になるんです。」

「信じられない… 私たち魔法師は普段からサイオン波に慣れています。そんな魔法師が倒れるほど強力な波動なんて…」

「波の合成ですね」

七草先輩の疑問に市原先輩が答えた。

「振動数の異なるサイオン波を3連続で繰り返し出し、その波がちょうど服部君の位置でぶつかるように調整し三角波のような強い波動を作り出したんでしょう。」

「お見事です。市原先輩」

「ですがあの短時間で3回の振動魔法。その処理速度で実技評価が低いのはおかしいですね。」

「あのう、そのCADは『シルバー・ホーン』じゃありませんか?」

「シルバー・ホーン? あれの謎の天才魔工師、トーラス・シルバーの?」

「そうですね!!フォア・リーブス・テクノロジー所屬、本名、姿、プロフィール全てが謎に包まれた奇跡のCADエンジニア。世界で初の『ループ・キャスト・システム』を

開発した　天才プログラマー。シルバー・ホーンというのはフルカスタマイズされた

特化型CADで『ループ・キャスト』に最適化されているんですよ！」

市原先輩の疑問に今度はあくちゃん先輩が答えた。

「でもおかしいですね。ループ・キャストは『全く同じ魔法連続発動する』ためのシステム、『波の合成』に必要な振動数の異なる複数の波動は作れないはず。振動数を変数化しておけば可能ですが、座標・強度・魔法の持続時間に加えて四つも変数化するなんて…まさか……それを実行していたのですか？」

「…学校では評価されない項目ですからね。」

「…なるほどな。」

声をした方を振り向くとそこには服部先輩が目を覚ましていた。

『魔法発動速度』『魔法式の規模』『対象物の情報を書き換える強度』学校の評価はこの三つで決まる。司波さんが言っていたのはこういうことか。」

「はんぞー君 大丈夫ですか？」

「大丈夫です！」

七草先輩に心配され素早く姿勢を正し立ち上がった。

「司波さん、先ほどは御贖罪などと言って失礼なことを言った。許してほしい。」

「私の方こそ生意気を申しました。お許してください。」

互いに頭を下げ謝罪した。

「さて、これで今日からはんぞー先輩と呼ばせていただきます。よろしいですね？」
「う!?そ、それは…」

「はんぞー君？」

「くっ!?いいだろう、好きにしろ」

俺の言葉でかなり嫌そうな顔をしていたが七草先輩に促され渋々了承した。

「さて、次は俺の番だな。真田、準備しろ。俺と戦ってもらおう。」

「はい？」

達也の件が終わったが何故か十文字先輩が俺との勝負を申し込んできた。

模擬戦②

十文字先輩突然俺に勝負を挑んできた。

「突然なんですか?」

「歴代一位の実技成績だけでなく服部を弱いと断言できるだけ自分の実力に自信があると聞いてきたのでな、俺ならばお前の相手をして問題ないんじゃないかと渡辺に言われてな。」

そこで俺はふと渡辺先輩に視線を向けると苦笑いをされた。

「…まあいいでしょう。個人的には達也がよかったです。」

正直俺の相手出来るのはこの学校では達也とリーナぐらいだろう。十文字先輩ではやろうと思えば簡単にケリがついてしまうが、魔法の鍛練に丁度いい。実際十文字先輩のステータスは……

ステータス

十文字克人 高校三年 17歳

レベル 38

力 105

敏捷 67

頑強 108

器用 81

魔法力 155

魔法技能 149

魔法ポイント

加速 55

加重 60

移動 80

振動 70

収束 60

発散 50

吸収 50

放出 50

無 50

系統外 50

知覚 30

魔法

フアランクス

反射障壁

対物障壁

完全にパワータイプであり防御型だな。それに魔法ポイントが七草先輩に近くない

か？おそらくフアランクスを使うために四系統八種すべての系統が必要だからだろう。それはそれとして俺は十文字先輩と模擬戦することになった。

俺は自分のC A Dを身につけ、俺を待っている十文字先輩のいるところに向かった。

「ん？C A Dは？」

「これですが？」

「眼鏡型のC A Dか。随分変わってるな」

そう、俺のC A Dは眼鏡型なのだ。

「それではルールを説明する」

説明内容は先ほど達也との模擬戦の時と同じだ。

「よし、二人ともいいな。始め！」

始まりと同時に俺は偏倚解放を放った。だが、十文字先輩のフアランクスに防がれ

た。俺はその後、圧縮空気弾を連続発動させたがビックともしなかった。ならば…

「どうした？それで終わりか？ならばこちらから行くぞ！」

十文字先輩がそう言い俺目掛けてタツクルしてきた。勿論フアランクスを発動させながら。おそらくみんなこれで決着がつくと思っっているだろう。だが…

「ぐっ!？」

『『なっ!?!』』』

その場にいたリーナ以外のメンバーが驚愕した。何故なら十文字先輩のフアランクスが消えてしまい、逆に十文字先輩が突き飛ばされてしまったのだ。

実際は俺が作った障壁魔法のせいでフアランクスに使われていたサイオンが俺のサイオンに変換し吸収され、そのせいで十文字先輩は生身で俺の障壁魔法に突っ込んでしまったのだ。

俺の最大の防壁魔法『煉破反障壁（れんぱはんしょうへき）』

あらゆる魔法を自分のサイオンに変換し自分に吸収してしまう魔法。

俺はこの世界に来たとき一番に思ったこと、それは達也のミスト・デイスパージョンやマテリアル・バーストをどうやって防ぐか。あのチートお兄様と対峙すれば消されかねないからだ。味方であれば心強いが危険と感じれば間違いなく消していく。情け容赦なく。そう言う男だ。司波達也は。

だからまず身を守ることを一番に考えた。親しくなる人を極力避けた。人質にされかねないからだ。リーナや雫たちを強くしていったのも自己防衛のためだ。

最初の三年間は強くなることを考えながらも達也の魔法を防ぐ方法を考えたが全く思い付かなかった。

だが、そんなときに現れたのが沖繩の時に出てきた乱童だ。そして、俺は裂蹴紫炎弾を覚えたことで、俺は他にも幽遊白書の技を覚えることが出来るのではないかと考えた。そこで思い付いたのがいかなる技をも防いだ幽遊白書最強キャラの一角『黄泉』の煉破反障壁だ。これがあれば達也の魔法も防げると考えたからだ。実際俺はこの魔法でリーナのヘビィ・メタル・バーストを防いだことがある。

とにかく俺はその魔法を使い十文字先輩の攻撃を防いだ。そこで十文字先輩は立ち上がったが、俺はすかさず手刀を打ち十文字先輩は咄嗟に右手で受けた。だが、それが悪手だった。空いた脇腹に左ボディ、手を持ち替え小手返し、後頭部に手刀を打ち同時に膝蹴り、そして投げる、さらに足で完全に右手の間接を押さえ、右こぶしを十文字先輩の顔の脇に一撃。

またも辺りが静かになった。

「はっ、勝者真田和樹。」

渡辺先輩にそう言われ俺は十文字先輩の拘束を解いた。

「ま、待て。…十文字の魔法を打ち消したあの魔法は何だ？ただの障壁魔法には見えなかったが…」

「正解です。分類的には障壁魔法ですがあれは俺のオリジナルです。」

「どういう原理か聞いてもいいか？」

「摩利。魔法の詮索はルール違反よ。」

「構いません。知られたところで対処法なんてありませんから」

俺がそう言ったことで七草先輩は黙った。本心では聞きたいのだろう。

「そうですね…：：：簡単に言えばいかなる魔法でも全て自分のサイオンに変換して吸収する魔法です。実際この魔法を使って破った魔法は今までありません。ただ十文字先輩のフアランクスとは違いマシンガンなどの質量兵器を防ぐことは出来ません。あく

「までも防げるのは魔法だけです。」

「…魔法師にとつては天敵のような魔法だな。」

「まあそうですね。それで、これからどうするんですか？」

「あ、ああ、最後に私と工藤の模擬戦を行う。」

「…いきなりですね。」

「私はこれでも自分で見ないと納得しない夕子なのでな」

「いやいや、あなたはどっからどう見ても 自分で見ないと納得しないでしよう。」

「…分かりました。私はいつでもいいですよ。」

「そうか。十文字、悪いが審判をしてくれないか？」

「分かった。ルールは先ほどと同じだ。三度目だから 説明する必要はないな？」

「リーナと渡辺先輩は互いに領いた。」

「では始め！」

リーナと渡辺先輩は同時に動いた。互いにCADを操作した。リーナは自己加速術式で移動。渡辺先輩の基礎単一系移動魔法をかわした。渡辺先輩はリーナと同じ自己加速術式でリーナを追いリーナを完全に捉えた。

だが、そこにリーナの実体はなかった。

『『はっ!?!』』

「(あれは! 仮想行列(パレード)?)」

「!?!? あっ!?!」

リーナは『パレード』を使い自分と同じ実体を作り出した。そして自分は光学迷彩の魔法で姿を消した。そして、リーナは自分の魔法で翻弄されている渡辺先輩の動きを先回りし、背後から無系統の『共鳴』、生体波動とサイオン波の共振で渡辺先輩の意識を刈り取った。

「勝者、工藤リーナ!」

「凄かったなリーナ。流石だ。」

「ありがとう、和樹。」

みんなの前で俺とリーナは抱き締めあった。

その場にいる達也と十文字以外は顔を真っ赤にし、あくちゃん先輩は「はわわわっ」と

狼狽えていた。

俺としてはこのままキスまでしたいところだがこの場では自重した。

暫くして俺達は離れた。そのタイミングを待っていたのか達也が声をかけてきた。

「リーナ、今のは『パレード』ではないのか？」

「そうよ。」

達也の質問にリーナはあっさり肯定した。

だが、『仮想行列（パレード）』は九島家の秘術。何故それをリーナが思うだろうが、

リーナの名字は工藤。

「何故リーナが？」

「勿論私が『九島』だからよ。」

『『えっ!?!』』

それを聞いた俺以外のその場のメンバーは驚愕した。

「工藤は九島家の人間だったのか。」

十文字先輩が聞いてきた。

「はい。本家の人間ではありませんが。」

「そうか」

「この事は内密にお願いします」

「分かった」

これで俺達の風紀委員入りが決まった。

渡辺先輩が目を覚まし俺達は風紀委員会本部に来た。すると机の上が汚く、CADが乱雑していた。

「ようこそ風紀委員会本部。少し散らかってるが適当にかけてくれ」

「…… ここ片付けてもいいですか？ 魔工技士志望としてはCADが放置されているのはちょっと……」

達也があまりの汚さに整理を願い出た。

「俺も手伝う」

「私も」

俺とリーナも便乗した。

「魔工技師？ あれだけの対人戦闘スキルがあるのにか？」

「俺の才能じゃこの国の魔法師としては上位のランクは取れませんから。」

「……すまない……」

「いえ……」

数分が経ち大分きれいになってきた。俺達三人は整理をしているが渡辺先輩はしていない。何故なら渡辺先輩が手伝った途端逆に汚くなっていったからだ。

「そのままでもいい、聞いてくれ。君をスカウトした理由だが主に二科生に対するイメージ対策だ。」

「イメージ対策はむしろ逆効果じゃないですか？」

「何故？」

「同じ二科生の風紀委員だとしても俺は1年生。2、3年生はどちらにしても面白くない」

「だが1年生は大歓迎だろ」

「一科の1年生にはその倍の反感を買いますね」

「例えば1ーAのモブ崎だろ？」

「あのストーカーね」

達也の言葉に俺はつい反応してしまった。リーナとしてもあのモブ崎には正直鬱陶しいと思っっているのだろう。

「森崎か…」

「彼も本当は風紀委員に入る予定だったのですよね」

「ああ、だが昨日の1件で取り消しにさせてもらった」

「そしてその代わりが俺って訳ですか…」

達也がため息吐きつつ言ってきた。その時誰かが入ってきた。

「おはようっす！アネさん、いらしてたんですかい」

「おはようございます。委員長、逮捕者ありませんでした。」

おそらく上級生の風紀委員だろう。渡辺委員長をアネさんと呼んだ先輩は渡辺委員長に叩かれた。

「アネさんと呼ぶな！お前の頭は飾りか！」

「そんなポンポン叩かないでくださいよ」

「ったく！」

「フーツ……ところで委員長、そいつらは新入りですかい？」

「二年B組真田和樹と工藤リーナ、それと一年E組司波達也。今日から風紀委員に入る」ことになった。」

渡辺委員長が順番に紹介してくれた。

「へく……紋なしですかい……」

「辰巳先輩。その表現は禁止用語に抵触する恐れがあります。この場合二科生と呼ぶべきでは……」

二人は達也を見てそう言ってきた。

「お前達そんなことを言っているだと足をすくわれるぞ。ここだけの話、私や十文字それと服部が足をすくわれたばかりだ」

「はっ!?!」

「そいつらが……アネさんと十文字、服部に勝ったんですかい!?!」

「アネさんと呼ぶな! ったく……ああ、私は工藤に、十文字は真田に、服部は司波に正式な試合であつさり負けた。」

「あつさり!!」

「そいつは頼もしい」

「逸材ですね、委員長」

渡辺委員長の言葉に疑うことなく信じる二人。普通の一科生ならそんなのまぐれに決まつてるとも言つたりするものなのだが……

「意外だろ? この学校はブルームだウィードだと妙につまらない肩書きで優越感に浸り

劣等感に溺れる奴ばかりだ。正直ウンザリしていたんだよ。幸い真由美も十文字も私
がこんな性格だつて知ってるからな。部活連と生徒会枠はそういう意識が少ない奴を
選んでもらっている。優越感が0つて訳にはいかないがキチンと実力の評価が出来る
奴らだ。ここは君達にとつても居心地が悪くない場所だと思う」

「3―Cの辰巳鋼太郎だ。よろしくな、真田、工藤、司波。腕の立つ奴は大歓迎だ。」

「2―Bの沢木碧だ。君達を歓迎するよ。真田君、工藤さん、司波君。」

二人は握手を求めて手を出して来たので俺達はそれに答えた。

「1―Bの工藤リーナです。」

「1―Eの司波達也です。こちらこそよろしくお願いします」

4人が握手をした。だが何故かリーナと辰巳先輩の握手が微妙に長い気がした。

「1―Bの真田和樹です。よろしくお願いします」

俺がそう言い沢木先輩と握手をした後、辰巳先輩とも握手をした。その時俺は辰巳先
輩の手をおもいつき握りつぶした。

「いつてーって、ギブギブキブ」

辰巳先輩が何か言っているが、俺は構わず続けた。

「辰巳先輩。リーナに手を出したらただじゃすまさないですよ」

俺が殺気を放ちながら言う

「わ、わかった！わかったから、いててててほ骨が！」

辰巳先輩の了承を得たことで俺は手を放した。

「あくいつつ…潰れるところだったぜ」

潰れるかとおもったではなく、潰れるところだったというところが俺の握力の凄まじさを解ってもらえると思う。

「はっはっは、辰巳、コイツと工藤は婚約者だそれなのにあんなに長く握手をすればコイツも機嫌悪くなるさ」

「婚約者!!」

「そういうことです」

その後、風紀委員ではリーナに手を出せば俺に半殺しにされるといふことが広まり、後にそれが学園全体に広まることになろうとはこの時の俺には知る由もなかった。

部活勧誘期間

放課後の生徒会室では……

「まさか工藤さんが九島家の人だったなんて……」

「名字が工藤だったことからあの九島家の人間の可能性は考えていたが、わざわざ隠していた家名をわざわざ話したのは何か理由があるのかもしれない」

七草会長と十文字会頭が話していた。

「理由？」

「そこまではわからん。だが問題は真田の方だ」

「彼も十師族の血を引いているかもしれないってこと？」

「可能性は考えられる。だが問題はそこではなく魔法の方だ」

「……確かに……魔法を無力化する魔法なんて魔法師にとって天敵のような魔法だわ」

「魔法である以上アンテナイトによるキャスト・ジャミングで無効化はできるだろうが、魔法師同士の勝負となると勝ち目はないだろうな」

「……彼……大丈夫かしら……」

「九島家の人間と婚約している以上大丈夫だが、工藤は自分が九島家の人間であること

を伏せているからな、公に出来ない以上危険がないとは言いきれない」
「ホント、何で隠しているのかしら」

それから暫く経ったある日の放課後、風紀委員本部

「さて、今年もまたあの馬鹿騒ぎの一週間がやってきた。クラブ活動新入部員勧誘期間だ。いや：新入生獲得合戦と言うべきかな？ 原因は魔法科高校ならではのクラブと九校戦だ。九校戦の結果は、学校全体の評価に反映されるのはもちろん活躍した生徒とそのクラブは学校側から優遇される。というわけで有力な新人の獲得は最重要課題であり各部門のトラブルは多発する。しかも勧誘期間中はデモンストレーションのようにCAD携行許可が出ているから余計に厄介だ。ヒートアップしたクラブ同士、影で殴り合いどころか魔法の打ち合いになることもある。学校の将来の九校

戦の為か、多少のルール破りは黙認状態。学内は無法地帯化してしまう。この状態を沈められるのは我々風紀委員だけだ。今日から一週間フル稼働してもらおう！今年
は幸い新人の補充も間に合った。紹介しよう、1—Bの真田和樹と工藤リーナ、1—E
の司波達也だ。」

俺達は渡辺委員長に紹介されて立ち上がった。

「委員長、役に立つんですか？」

達也の隣にいる先輩が言ってきた。主に達也に対しての発言だろう。

渡辺委員長がため息を吐き…

「三人とも腕前は見た。私の目が不安なら自分で確かめてみるか？」

「や、やめておきます…」

「他には？」

『『『……………』』』

「ないなら直ちに出勤!!」

『『『はい!!』』』

渡辺委員長の号令と共に全員が一斉に立ち上がり返事をし自分の仕事に取りかかった。

「真田と工藤、司波は残れ。渡すものがある。」

そう言われ俺達は残り、全員がいなくなった後渡辺委員長が何かを渡してきた。

「まずはこれを渡しておこう。風紀の腕章とビデオレコーダーだ。巡回の時は常にその二つを身につけておくこと。レコーダーは胸ポケットへ、違反行為を見つけたらすぐスイッチを入れる。また風紀委員はCAD携行を許可されている。だが不正使用は厳罰だからな」

「質問があります」

「許可する」

「CADは 委員会の備品を使用しても良いでしょうか？」

「かまわないが理由は？」

「あれは旧式ですがエキスパート仕様の高級品ですよ」

「そ、そうなのか？」

「ええ。ではこの二機をお借りします」

「二機？本当に面白いな…君は」

その後渡辺委員長と別れ、三人だけとなった。

「さて、これからどうする？」

俺がまず声をかけた。

「俺は約束があるからこれで…」

達也はそう言いさっさと行ってしまった。

「リーナは？」

「私も別行動にするわ」

「そうか。じゃあまたな」

俺は今適当にブラブラしながら巡回をしようとしていたが、外に出た瞬間新生が部活勧誘に追われて賑わっていた。前世ではここまで部活の勧誘をしているのは見たことなかったからちよつと目が点になってしまった。

『バイアスロン部だ！』

『とられた！』

俺が若干ボーとしていたら早くもトラブル発生。どうやらバイアスロン部が新入生を無理矢理連れていったようだ。

俺は急いで追いかけた。俺は縮地を使い簡単に追い付いた。俺の縮地は障害物がなければ時速90〜100km出せる。(自分でも思うけど本当に人間か：?)更に自己加速術式を使い人の目には完全に認識出来ない速さになり簡単に追い付いた。それどころか通りすぎた。

捕まった二人の新入生をちゃんと確保しながら…

その事に気づかない先輩たちはそのままいつてしまった。後からその事に気づいてメチャメチャ慌てることになるが…

「あれ？ 私たち…」

「何で？」

「フーッ、大丈夫ですか？ ってほのかと雫！」

「和樹（さん）！」

連れ去られた新入生はほのかと雫だったことに今気づいた。

「二人だったのか」

「うん」

「あの、ありがとう」

「一応仕事だから」

「そういうえば風紀委員になったんだよね」

「リーナと一緒にじゃないの？」

「ああ、今日は別行動を取ってる」

「……………」

「その沈黙は何」

「だって一緒に風紀委員の仕事をしちゃいけないなんてことはないんでしょ？ それ

なのに二人が一緒にいないなんて…」

「意外」

「まあたまにはな…それじゃ俺は『こちら第二小体育館、逮捕者1名負傷していますので念のため担架を』とスマン。ちよつと仕事が出来た。それじゃ」

イヤホンから声が聞こえ、今いる場所が 第二小体育館の前だった為急いで現場に向かった。

「雫、これからどうする?」

「とりあえず予定通りいろんな部活を見て回る」

「じゃあ行こう」

俺は第二小体育館に着いた。ホントすぐ近くというか連絡を受けて10秒ほどしか経たない場所だった。そこには達也が一人の 剣術部員を取り抑えていた。

『 どうして桐原だけなんだよ! 剣道部の壬生も同罪だろうが!!』

『魔法の不適正使用のため』と申し上げましたが』

これは一波乱ありそうだな

俺はそう思い近くに落ちてあつた竹刀を持った。

『ふざけんなあ!!』

一人の剣術部員が達也に襲い掛かったため、俺はその場に乱入し達也に襲い掛かった剣術部員を一撃で沈めた。

『おい、誰だアイツ…』

『アイツも風紀委員か?』

「こちら第二小体育館、再度報告。逮捕者一名追加します。担架をもう一台追加お願いします」

『『『ざけんなっ!!』』』

俺が乱入したことで黙ってられなくなった剣術部員たちは全員で俺と達也に襲い掛かってきた。俺は竹刀で迎え撃った。

剣術部員たちは拳で殴りかかってきた。最初の一人の右ストレートを掻い潜り『龍巻閃』で背中を打ち、二人目と三人目は同時に襲い掛かり俺は二人の間の真ん中を通りその間に突きの二連撃で倒し、四人目は三人を一瞬で倒した俺に一瞬硬直し襲い掛かろうとしたがその一瞬の隙をついて一撃で沈め、五人目と六人目は魔法を使おうとしたらし

いが打ち消され俺が一瞬で二人に近づき一撃を与え倒した。

「(さっきの魔法妨害はキャスト・ ज्याミング。ということは達也か。帰るときにでも問
い質すか。魔法がキャンセルされるなんて摩訶不思議なことがあったのに何も聞か
ないのはかえって怪しまれそうだしな。) ここは俺が受け持つから達也は本部に事情説明
よろしく。」

「……わかった」

その後、俺も一応当事者ということ本部へ行き報告を済ませた。といつても俺の場
合風紀委員である達也を殴りかかりいったため撃退し、それに逆上した剣術部員を鎮圧
しただけで事の顛末は知らないということであつさり終わった。

ちようど外も暗くなり 俺と達也は 一緒に帰ることになった。すると校門でリ
ーナや司波さん、達也のクラスメート達が待っていた。

帰りに俺達は喫茶店によっていた。達也の奢りで。俺は何故かハブられた。

「お前は待つていた訳じゃないからな」

というこもらしい。気に入らないため俺はちよつと意地悪をし

「達也、俺の前でリーナにケーキを奢って好感度を上げようとするとはな」

俺は達也に言った。俺の考えでは恐らく…

「お兄様……？ 一体どういうことかしら……う？」

「魔法!？」

「深雪って事象干渉力がよっぽど強いよね」

深雪の魔法が暴走して辺りが寒くなってきたことで千葉さんが驚き、リーナも少し感心している。俺はこうなると思っていたので、俺とリーナの回りだけ暖かくした。

「落ち着け深雪！ 和樹の冗談だ！」

「そういうことにしてやる」

深雪もだんだん落ち着いてきて魔法の暴走を止めた。

「ところで桐原って二年、高周波ブレードを使ったんだろ？ よく怪我しなかったな」

「あれは有効範囲が狭い魔法だ。よく切れる刀と対処は変わらないさ」

「そ、それって真剣の対処は簡単って言うてますが…」

「大丈夫よ美月、お兄様なら心配いらぬわ」

「確かに達也君の体術は達人クラスだけど、桐原先輩も超高校級の剣術使いなのよ？」

「それでもおにいさまに勝てるものなどいるはずがないもの」

「少しも躊躇しないのね」

「単に体術が優れているというだけじゃなくて、魔法の無効化はお兄様の十八番なの。エリカ、お兄様が飛び出した直後乗り物酔いみたいな感覚になったでしょう？」

「そういえば」

「それ、お兄様の仕業よ。お兄様、キャスト・ジャミングをお使いになられたでしょう？」

「「キャスト・ジャミング!」」「」

俺は知っていたから驚きはしなかったが他の四人はそうではない。

「深雪にはかなわないな」

「お兄様のことなら何でもお見通しですよ」

すると二人の間にピンクい雰囲気がさらけ出していた。

「それを兄弟の会話じゃないぜ!!」

「そうか（かしら）？」

レオは ツツコミを入れたが二人の 答えにがつくり

「このラブラブ兄妹に突っ込み入れようっていうのは大間違いなものよ」

「その言われようが著しく不本意なんだが」

「いいじゃありませんか。私とお兄様が強い兄弟愛で結ばれているのは事実です」

深雪は達也の胸に寄り添い更にピンクい雰囲気が増した。エリカもレオと同様がっくり

「……」

「こういう時は何も言わないのが一番だな」

リーナは頬を赤く染め俺と一緒に知らないフリをしている。

「深雪、悪ノリもほどほどにな。冗談だって分かっているのも約1名いるようだし」

「えっ!?!冗談?」

美月は赤くなり狼狽えている。

「そーいやキャスト・ジャミングがどうこうって…」

「キャスト・ジャミングは魔法式がエイドスに働きかけるのを妨害する魔法、分類的には『無系統魔法』の一種だ。現代魔法は見かけ上の性質ではなく作用面から分類している。

『加速、加重』『収束、発散』『移動、振動』『吸収、放出』の四系統八種類。この

四系統八種類に属さない例外もあり大きく三つに分類されている。その一つが無系統魔法。キャスト・ジャミングは無意味なサイオン波を大量に散布することで魔法式

がエイドスに働きかけるプロセスを阻害する技術。ただしキャスト・ジャミングを使うには四系統八種類 全ての魔法を妨害できる特別なサイオンノイズが必要となる」

「アンティナイトね」

「そうだ」

「達也さんアンティナイトを持ってるんですか？」

「持っていないよ」

「アンティナイトは軍事物資だ。いくらなんでも民間人が持つてゐるはずがない」

「えっ?でも…」

「…ここからはオフレコで頼みたいんだが、正確には俺が使つたのはキャスト・ジャミングじゃなくて その理論を応用した『特定魔法のジャミング』なんだ」

「そんな魔法あつたか？」

「ないと…思います」

「信じられない話だけど… 一介の高校生達也君が新しい魔法を理論的に編み出したって…?」

「なるほどな…」

「和樹?何か分かつたの？」

「まあね。 簡単にいうと二つのCADを同時に使うとサイオン波の 干渉で魔法が発

動しないことは知ってるよな？ その干渉波を利用したんじゃないのか？」

「正解だ、和樹。一方のCADで妨害したい魔法の起動式、もう一方のCADでその逆方向の起動式を展開する。その際に発生するサイオンの干渉波をキャスト・ジャミングと 同じ様に相手に放つんだ。相反する二つの魔法、その起動式同士で発生するサイオン干渉波を『無系統魔法』として放つ。すると元々発動するはずだった2種の魔法と同類の魔法発動がある程度妨害できる。つまり今回は『振動魔法のジャミング』を使用したというわけだ。」

一瞬その場が沈黙した。

「すげえじゃん。何でオフレコなんだ？ 特許取ったら儲かりそうな技術じゃねえか」

「一つはこの技術が未完成だということ。相手は魔法を使いにくくなるだけなのに比べこつちは完全に使えなくなる。それ以上に問題なのはアンテナイトなしで魔法を妨害できる仕組みそのものだ。今や国防や治安でも魔法は必要不可欠、もし高い魔法力やアンテナイトを必要としない魔法無効化技術が広まったら社会基盤が揺らぎかねない。世の中には魔法を差別の元凶だと決めつけて排斥運動をしている過激派もいる。対抗手段が見つけれられない限りはあのキャストジャミング・もどきは公表できない」

レオの疑問に達也は答える。

「なるほどな。でも達也、それって達也は相手が使う魔法の起動式が分かるってことだろ？ そうでなかったら魔法発動する前に防ぐことなんて出来ないはずだ」

桐原先輩のときは『高周波ブレード』を発動してから防いだ。だが俺を狙った剣術部員は魔法を発動する前だった。つまり何の魔法か起動式を読めないと分からないってことだ。

「実技は苦手だが分析は得意なんだ」

「へ〜…」

俺の質問に達也は答えた。

「そういえば和樹君、剣術部員を一瞬で倒したけどどこか道場でも通ってたの？」

「…いや自己流だよ」

「うそっ!?! あれが!?!」

「俺は魔法より剣の方が得意だ」

「……剣術部員を全員竹刀で倒すなんてかなりの腕よ。ねえ今度よかったら私とも手合わせしてくれない？」

エリカが俺が剣術部員を一瞬で倒したことで俺の強さに火が点いてしまったようだ。

「かまわないよ」

その会話を最後に俺達は店を出て解散しようとしたが…

「和樹、この後空いてないか？」

達也が俺に声をかけてきた。

「悪いが俺達はこれから用事がある」

「用事が終わるまで待っている」

「終わるのでもいい22時頃だぞ」

「……いったい何の用事でそんな時間になるんですか？」

明日も平日だというのにそんな時間までいったい何をやっているのか達也の隣で聞いていた深雪が聞いてきた。

「なんなら来るか？」

「いいのか？」

「別にかまわん」

こうして俺とリーナは司波兄妹と一緒に帰ることになった。

L e r v e c o u l e u r

俺とリーナと司波兄妹は一緒に帰り目的地に着いた。そこには……スイーツショップがあった。

「……スイーツショップ？」

「……お前の用事ってここか？」

だがなぜスイーツショップで22時までいなければならないのかが二人には分からなかったがすぐにその疑問は解けた。

「あっ！和樹さんにリーナ！つと達也さんと深雪？」

ほのかが店から出てきたのだ。それも明らかに店員と思われる作業服と名刺を下げた。

「ほのか？あなたこんなところで何をやっているの？」

深雪はほのかに聞いてきた。

「私、ここでアルバイトしてるの」

「もしかして和樹とリーナもここでバイトしているのか？」

達也が今度は俺とリーナに聞いてきた。

「そうよ。私はね」

「私は？」

深雪がその言葉の意味がわからず首を傾げる。

「ここは俺の店だ」

「……………は？」

俺の言葉に二人は一瞬意味が分からないといった顔をしている。

「あ！二人とも遅いよ。もうすぐカフェオープンの日だよ。」

そこにはほのかと同じカッコをした雫が現れた。

「悪い。今から準備するから」

「待ってて」

そう言い俺とリーナは裏口から入った。

達也と深雪は店から出てきた雫に気づき…

「雫、もしかしてあなたも？」

「うん。ここでバイトしている。ところで何で二人がここに？」

「和樹に出来ないかと誘われたんだ」

「そう。もうすぐカフェもオープンするからよかつたらどうぞ」

「そうするか？」

「はい、お兄様」

さつきも喫茶店でケーキ食べてたはずの二人だが友人の店と聞いて興味をもち店の中で待った。

10分ほど経ち店がオープンになった。俺とリーナも作業服に着替え早速仕事に入った。リーナは接客、俺はスイーツ作り。店は17時にオープンだが、カフェは19時からだ。17時〜19時までは俺の都合上カフェはオープン出来ず持ち帰りしか出来ない。ケーキは朝4時に起きて、学校に行く前に作っておく。17時〜19時までは他の店員と雫とほのかに頼んである。19時〜21時までカフェがオープンし、作るケーキすべて俺が作る。他にはいない。

何故俺が出来るかだが、俺がこの世界に来る前まで俺は製菓学校である、聖（せんと）マリー学園の学生だった。しかも世界ケーキグランプリという大会で優勝した経歴もあり、パリにある本校へ留学もしている。一年間ショップの経験もあるため経営者としても問題ない。

そんな経験があるとは知るはずもない達也達のところへリーナがやって来た。

「お待たせ二人とも！ゴメンね、オープン前に注文を受けるわけにいかなかったから」「いや気にしてない。それより何で和樹は店を出しているんだ？」

「だって和樹の夢は魔法師になることじゃなくパティシエになることだもん」

その言葉を聞いて達也と深雪は意味が分からなかった。

「では何故一高に来たのですか？」

当然の疑問を深雪はリーナに聞いてきた。

「本人曰く実戦経験を積みたいからだそうだよ」

二人はますます分からなくなつた。パティシエを目指すのに実戦経験？魔法師を目指してもいけないのに？何かと戦うことを想定しているのか？？いくら考えても答えが出てこない。

「それで注文は？二人は今日が初めてよね。初めてのお客様にはケーキ一品無料って決まってるから好きなの選んでもいいわよ」

「えっ？」

「……………」

深雪は思わず声を出したが達也はあくまで平静を保っている。

「いいのですか？」

「それがこの店の決まりなの。和樹曰く『損して得しろ』らしいわよ」

「なるほど、では遠慮なく頂こう」

「ええ、それでご注文は？」

「そうだな、何かおすすめはあるか？」

「なら、これとこれなんかどう？」

リーナが勧めたのはハート型の赤と白のスイーツとケーキの上に丸い何かが乗っかっているスイーツだ。

「じゃあこの二つを頼む。それでいいか、深雪？」

「はい、お兄様」

「飲み物はどうする？」

「俺はコーヒー」

「私は紅茶を」

「かしこまりました」

それを最後にリーナは去っていった。

注文を終えた達也達は周りを見てみると既に店は満員となり店の外まで列が出来ていた。

「お兄様、すごい混んでますね」

「ああ、まさかここまで混むとは、人気のある店だったんだな」

それから5分ほど経ちリーナが来た。

「お待たせしました。春限定のスイーツ、苺ハートケーキとシユクル・シトロン・ノエルです」

深雪の前に紅茶とハート型のスイーツ二つ、達也の前にコーヒーと飴細工の乗っかっているタルトを出した。

「見た目はいい感じだな」

「二つもセツトなのね」

「達也、上に乗っている飴細工を割ってから食べてね」

そう言いリーナは去っていった。

「リーナ達忙しそうですね」

「無理もない。あれだけ列が並んでいけば休む暇もないのだろう。俺達も食べたら出た方がいいかもしれないな」

「はい、お兄様」

早速まずは深雪が赤いハート型のケーキを食べた。

「…美味しい。中はアイスとチョコプレートが入ってるのね。」

「そっちの白いのはどうだ？」

達也に言われた深雪は白いハート型のケーキを食べようと一口サイズに切ると中から温かいイチゴソースが出てきた。

「!?これも美味しいです、お兄様！」

「なるほど、ならこっちも期待できそうだな」

達也が自分の前にあるケーキをまずリーナに言われた通り飴細工を割るとソースが出てきた。

「!?美味しい」

「本当ですか、お兄様！」

「ああ、レモンシャーベットと温かいソースが混ざっていい味が出ている」

「お兄様、私にも味見させてもらえませんか？」

「いいよ」

二人はお互いのものを交換し食べてみたところ

「!?美味しいです」

「ああ、本当だ。人気店になるのも領けるな」

二人はその後お互いのケーキを食べさせ合いながらケーキを食べた。

「美味しかったですね、お兄様」

「ああ」

「気に入ってもらえてなによりだわ」

そこで達也達の前にリーナがやって来た。

「ああ、人気店になるのも領ける。それにしてもどこでこれだけの腕を？」

「和樹はフランスの製菓学校に行つてたときがあるそうよ。」

「フランスの製菓学校？なるほどだから店の名前やケーキ名にフランス語が混ざつてるんだな」

そう、この店の名前は『Le reve couleur (ル・レーブ・クルール)』。フランス語で書かれていて日本語で夢色という意味だ。メニューにも一部フランス語のケーキも混ざっている。

「リーナ、これのレシピを教えて」

「深雪、さすがにそれは失礼だろ。和樹だつて商売なんだから」

「そうね。悪いけどそれはできないわ」

「…そうですよね。申し訳ありません」

「いいのよ。それだけ気に入ってくれたってことよね」

「ああ、じゃあ俺達はこの辺で」

「もう帰るの？」

「これだけ店が混んでいたら長居するのは迷惑だろ？」

「そうね、ゴメンなさい」

「リーナが謝ることじゃない」

それを最後に達也達は会計をして店を出た。

それから約二時間後、21時になり店は閉店した。それまでお客さんが途絶えることはなかった。

「皆、今日もおつかれさま」

『『おつかれさま!!!』』

「あー今日も疲れた〜」

「お疲れ様」

「つていうか客が多すぎ。店の外まで溢れるってどういうこと!」

「それだけ人気があるってことだよ」

「でも和樹の作るケーキは絶品」

「それはわかるけどさ…」

リーナが休みなく動き続けたことで疲れて愚痴っていた。そこにほのかが励ますも
たいした効果はなく、雫は俺のケーキを誉めてくれた。

「皆お疲れ。これでも食べて元気を出してくれ」

俺が用意したのは試作品のケーキだ。

「試作品として作ってみたんだ。とりあえず食べてみてくれ」

俺がそういうと3人は食べてくれた。

「何これ!?バターがいっぱい入ってるのにあっさりしてる!」

「生地もサクサクしていて美味しいよ!」

「……………」

「ナッツ入りのアパレル。中にチョコとチーズを入れてあるんだ。」

リーナとほのかが俺の作ったケーキを絶賛してくれている。雫は何も言っていないがクールな雫が笑顔でケーキを食べてくれていることから美味いと解釈した。

「うん。これならいけるわ!」

「流石和樹」

「スゴいです、和樹さん!」

「サンキュー」

その後俺達は一時間程明日の準備をしてから家に帰った。

その頃司波邸では

「……………」

「お兄様」

「深雪…」

「何を考えているのですか？」

「ああ、和樹のことだな」

「真田さんですか？」

「リーナは『実践経験を積みみたいから』と言っていた。パティシエを目指すやつが何故そんなことをするのか、まるで何者かに狙われているかのように感じる」

「何者かにつて…」

「深雪を越える成績で入学しているんだ。十師族が目をつけていても不思議じゃないが、アイツはリーナと婚約している、既に九島家の後ろ楯がある以上気にすることじゃないはずだ」

「…確かに…」

「つまり和樹は十師族以外の何者かに狙われている可能性がある」

「それはいつたい……」

「恐らく大亜連合だろう」

「!?」

「俺の見立てでは和樹は『焔の抜刀齋』だ」

「!?……真田さんが……焔の……抜刀……齋……?」

焔の抜刀齋

三年前沖繩で起きた大亜連合が攻めてきた時たった一人で100人近い人間を斬り殺した男の異名だ。ライフルの暴発で死んだ人間、斬られた人間の切り口に焼け跡が残っていたことから付けられた。

「まだわからんが一瞬で剣術部員を倒した和樹の剣術、あれは自己流で覚えられるモノではない。誰かに教えてもらえなければ覚えられないほど精密だ。それも形骸化する前の人を斬るための剣術、まさに殺人剣ともいえるべき古流剣術だ」

「まさか!？」

「エリカの家、『千葉家』も実戦剣術と言われているが所詮剣道の領域内での話だ。だが、和樹の剣術は一对一ではなく一对多を念頭においた剣術だ」

「では…」

「おそらく和樹は実戦経験は豊富なのは勿論、何者かと、いや違うな、組織と戦っていて身に付けたものだとおもっている。」

「……」

「明日辺り師匠に調べてもらった方がいいだろう…」

「……………和樹さん……………」ボソツ

それを最後に和樹の話は終わったが、何故か深雪は頬を赤らめて和樹の名を呼んだことに達也は気づかなかった。

勧誘

クラブ活動新入部員勧誘期間二日目以降俺は達也と行動することになった。達也が誤爆と見せかけて魔法の攻撃をされたのだ。偶々俺はその場にいたのでその相手を取り押さえた。それから毎日達也が狙われているのだ。明らかに嫌がらせだと分かることを……。

そのため、俺はよく達也行動をともし一週間が過ぎ 新入部員勧誘期間も終わった。

ちなみに、検挙数は俺と達也が一位、二位だった。まあ当然と言えば当然だ。達也が毎回仕組まれて 狙われている以上 トラブルに巻き込まれないはずがない。何度か相手を捕まえようとするととき邪魔する奴らがいたがそれを振り切って俺が捕まえていた。妨害を受けたといっても俺の動きについてこれるわけがない。犯人とグルになつて悪さをしている奴らの話などいちいち聞く必要もない。だから達也にその場を任せて俺は捕まえていった。

それが一週間続いて疲れたが、頭にくる奴らを捕まえて中には停学を受けた者もいたので『ザマア』とか思っていたりもする。

それから数日後の放課後、いつも通り風紀委員本部へ行こうとすると…

「真田くん」

声をする方を振り向くとそこには剣道部の壬生先輩がいた。

「はじめましてって言った方がいいかな？」

「そうですね。はじめまして、剣道部の壬生先輩ですよね？」

「2年の壬生紗耶香です。この前はありがとう。助けてもらったのに黙って帰ってごめんなさい。あの時のお礼も含めてお話ししたいことがあるんだけど。今から少し付き合ってもらえないかな？」

「いいですよ」

そして俺は壬生先輩と一緒にカフェに行った。

「単刀直入に言います。真田くん、剣道部に入りませんか？」

「お断りします」

壬生先輩の言葉に俺は即答で返した。

「理由を聞かせてもらってもいい？」

「むしろこちらが聞きたいです。壬生先輩なら分かっていることでしょう？ 俺の

剣は剣道によるものではなく剣術です。剣術部ならわかりますが何故剣道部へ？」

「……魔法科高校では魔法の成績が最優先、そう納得して入学したけどそれだけで

全部決められるのはおかしいと思わない？ 授業で差別されるのは仕方ない。でも

高校生活ってそれだけじゃないはずよ。クラブ活動まで魔法の腕が優先なんて間

違ってる。魔法がうまく使えないからって私の全てを否定させはしないわ」

確かに魔法競技系のクラブは学校からバックアップされているが、それは魔法科高校の宣伝のためだから当然だ。「優遇されていない」と「冷遇されている」ことの区別がついていないのか？

「だからあたしたちは非魔法競技系クラブで部活連とは違う組織を作ろうとしているの。そして私たちの考えを学校に伝えるつもり。そのためにもあなたに協力をお

願いたい！」

「それなら俺より達也の方がいいんじゃないやありませんか？アイツは壬生先輩と同じ二科生なら勧誘しやすいでしょう」

「実は司波くん先に話したんだけど断られちゃって、他に誰かこの話を聞いてくれそうな人を紹介してもらったんだけど司波くんも真田くんを指名してきたのよ」

あの野郎、俺を巻き込みやがって… こうなったらあの野郎にも ちよつと痛い目を見てもらおうか…

「壬生先輩、先輩は考えを学校に主張して何をしたいのですか？」

「えっ？…そ…それは…」

「…自分の考えがまとまったらまた話を聞かせてください。俺の返事はその後で

…」

「…わかったわ…」

深夜

「リーナ、ちよつといいか？」

「和樹？どうしたの？」

「実は頼みがあるんだ。……………ということでしょうか」

「……………和樹……………それは……………」

翌日の昼休みの生徒会室ではいつものメンバーで昼食をしている。

「ところで真田くん。昨日2年の壬生を言葉責めにしたんだって？」

「そんな事実はありませんよ」

「 そうなのかな？ 婚約者がいる身としてはあまり多くの女性と一緒に2人きりになるのはどうかと思うが？」

「 俺と婚約しているのはリーナだけじゃありませんので気にしなくても大丈夫ですよ」

「「「なっ！／＼／＼／＼／＼／」」」

俺の言葉を聞き七草先輩や司波さん、あーちゃん先輩が頬を赤らめてしまった。

「……君がいろんな女に手を出していたとはな……」

「 人聞きの悪いこと言わないでください。女なら誰でもいいってわけじゃないんですからね」

「 ほう、例えば真由美が告白してきたらどうするんだ？」

「 ちよ、ちよつと摩利！」

「 もちろん付き合いますよ」

「!?:／／／／／／／／」

「ただ結婚してなると少々考えますね」

「えっ？」

「俺は政略結婚だけはしないって決めてるんです。どんな惚れた相手でも家の柵を俺によこす相手はゴメンですね」

「しかし君は九島家のリーナと関係をもっているではないか」

「私は嫁になりますし、もし本家の人間が和樹に何か命令をしてきたら家とは縁を切るって言っていますから」

「…和樹君、あなたそれだと危ないわよ…」

それを聞いて生徒会室にいるリーナ以外は皆絶句していた。優れた魔法師は命を狙われるモノだ。それゆえ、十師族の後ろ楯があれば安全になるにも関わらずそれを拒んだのだ。なぜそんなことをするのか理解できなかつた。

「問題ありません。例え全てのナンバーズが敵になつたとしても俺は負けませんから」

「……………」

またもリーナ以外が絶句した。いかに和樹がどんな魔法も吸収する防御魔法が使えるといつても全てのナンバーズに勝てるという自信が理解できない。

だがリーナだけはそれを理解していた。何故ならリーナは今まで和樹がこの世界には存在しない妖怪共を次々と倒してきていたからだ。中でも二年前雫とほのかに初めて会つた日、九校戦の会場の近くに現れた剛鬼という妖怪は当時の私は震えが来るほど怯えていた。『勝てない』スターズ部隊の副隊長であり戦略級魔法が使える私が。だが和樹はそんな相手を瞬殺した。そしてあとから聞いたが剛鬼より強い妖怪と幾度も戦つたことがあると和樹は言った。その事を聞いた私は和樹に勝てる人間はこの世に

存在しないと確信している。

「まあそれはともかく、どうやら風紀委員は相当反感を買っているようですね」

「どういうことだ？」

俺は昨日壬生先輩から聞いたことを話した。

「……………ということです」

『……………』

俺の話聞きその場にいる人は黙ってしまったが…

「……………和樹……………」

「なんだ達也？」

「お前はそれを聞いてどう感じた？」

達也が俺に声をかけてきた。

「そうだな……………強いて言うならば何かが噛み合っていないように感じたな」

「噛み合っていないってどういうこと？」

俺の言葉に七草先輩が首を傾けて聞いてきた。

「俺にもしっかりとわかっているわけではないので説明は難しいのですが、魔法の成績が悪いからと言って剣の腕まで貶されるのは我慢できないということでしょう。行動に出るといふ動機は理解できます。ただ、肝心なところが抜けているような気が

しました」

「肝心な部分？」

「壬生先輩は非魔法系の部活動に協力を募って団結し学校に自分達の思いを訴えると言っていました。魔法の成績のせいで他の部分の不当に貶められていて学校側に伝える。そこはいいとしましょう。でも学校側に伝えた後何をするのかという肝心なところがまるで考えてなかつたように感じます」

「なるほどな」

「…それで和樹はどうするの？」

リーナが俺に聞いてきた。

「今は俺の質問の返事を聞いてからだが、問題はバックにいる連中がどう出てくるかだな。おそらく近いうちに動きがあるだろう」

「バックね……。どうやら忙しくなりそうね」

「そういうことだ。ほのかや雫にも一応伝えておけよ」

「了解よ」

「こつちから手を打つのもありだがそれをすれば向こうにも警戒される。やはり臨機応変に動くべきだな」

「でも十文字会頭とかには話しておいたほうがいいんじゃない？」

「まだ起きるとは限らないんだ。今話すことでもないだろう」

「でも今ここに七草会長と渡辺委員長がいるのよ。この場でここまで話しちゃったんだし」

そう。リーナの言う通り今の会話はこの場にいる全員に聞こえていたためほとんど俺とリーナの話についていけないでいた。

「……………悪いんだが……………一体お前たちは何の話をしていたんだ？」

渡辺先輩の言葉に七草先輩たちがウンウンと頷いていた。

「もちろん今後のことを話していたんですよ」

「それはわかっているんだが話の流れについてこれない。何よりクドウが今私と真由美がこの場にいるんだからと言ったな？詳しく聞かせてくれないか？」

俺は一つため息を吐いた。

「さつきも言いましたがバックにいる連中がどう動いてくるかを話していたんです。」

「バックにいる連中？」

「反魔法国際政治団体「ブランシユ」ですよ」

「な…何故それを!?情報規制されているのに!?ってクドウか…」

「達也も多分知ってますよ」

俺の言葉に達也が一瞬眼を細めた。

「はい。俺も知ってます。部活勧誘期間中何度か『エガリテ』をつけている生徒を見かけましたから」

『なっ!?!』

つまり校内に『ブランシユ』の手か延びているということだ。

「規制がかかっているようが噂の出処を全て塞ぐなんて無理でしょう。こういうことはむしろ明らかにしておくべきだと思います。この件に関する政府のやり方は拙劣です」

俺がそう言うとは

「…そうね… 魔法を敵視する集団があるのは事実なのにその集団を隠し正面から対決することを避けて…いえ…」

逃げてしまっているわ」

七草先輩は顔を俯いた。

「会長の立場なら仕方ないことでしょう。ここは国立の機関でその国が規制をかけて隠しているんですから」

「…… 慰めてくれているの?」

「でっでも会長、 追詰めたのも真田君ですよね…」

「自分で追い込んで自分でフォローするとは凄腕のジゴロだね。 真由美もすっかり

籠絡されているようだしな」

「まっ摩利！ 変なこと言わないで」

「なんなら本当に恋人になりますか？ 俺はいつでも OK ですよ」

「おっ！ 聞いたか真由美！ いつでもお前のことを受け入れてくれるらしいぞ！」

「ししし知らないわよ!! // // // // // // // // // //」

七草先輩は顔全体が真っ赤になって俯いてしまった。

「和樹、いい加減にしなさいよ……」

リーナは俺を睨み付けている。

「まあまあ、俺にとつて一番はリーナなのはよくわかってるだろう？」

俺はリーナを自分の胸に抱きながらそう言った。

「……………もう // // // // // // // // // //」

リーナは顔を真っ赤にしながら受け入れていた。この場にいる達也以外も顔を真っ赤にしていた。

「こういうのをバカップルというのだろうか」

達也がそんなことを呟いた。

「達也、俺にそんなこと言っていないのか？」

「…… どういう意味だ……」

俺の言葉に達也は目を細めてそんなことを言ってきた。俺はみんなの前で ある映像を見せた。

それは夜、深雪が寝ているとき達也が夜這いをかけてきて深雪の寝ているベッドの中に入り深雪の上に股がり寝ている深雪の顔に顔を近づけて……そこで映像が消えた。

それを見た生徒会メンバーは全員顔を真っ赤にし顔を俯かせていた。

「……………お兄様?……………私の……………寝ているときになんな何をしているのでしょうか?」

深雪は顔が沸騰しているのではないかというほど真っ赤になり達也に尋ねた。そして、段々周りが寒くなってきた。

「ちよつと待って深雪!落ち着け!これは…」

「何が落ち着けですか!?!私が寝ている隙に一体何をしているんですか!?!しかも和樹さん見られるなんてどう責任とってくれるんですか!?!」

「いや……だからこれは…」

実は昨日壬生先輩との件を俺に押し付けられたのでちよつと憂さ晴らしがしたくりーナに頼んで『仮想行列(パレード)』を使い、俺は達也に、リーナは深雪に変装して

二人のベッドシーンを撮ったのだ。

その後俺とリーナは静かにその場を去った。深雪が最後に俺がどうのこうのといっていたような気がするがまあいい。俺達のいなくなった生徒会室ではどのような惨殺劇があつたのかはご想像にお任せします。

占拠

「それで答えは出ましたか？」

翌日、今俺は壬生先輩とカフェに来ていた。昨日の今日で答えが出るって言うのはちよつと早いんじゃないかと思つたが……

「……前に達也君にも同じことを言われたの。昨日よく考えたんだけどやっぱり私たちの考えは変わらないわ。学校側に待遇改善を要求したいと思う。」

「改善と言うと具体的に何を改めて欲しいんですか？」

「それは全般的に……」

「例えば授業ですか？それともクラブ活動？しかし剣道部と剣術部のスペースは同じ割り当てのほうですが？それとも予算ですか？確かに魔法競技型には多く割り当てられています。ここは魔法科高校です。魔法競技系の部活動はデモンストレーションも兼ねていますので、予算を多くするのは当然だと思いますが？」

野球やサッカーの優秀な生徒を特待生として入学させることは名門校なら当たり前のことだ。そして、上手くなるために遠征をして強豪校と練習試合等をする。だがそれには多くのお金がかかる。学校側がその予算を出すのは当たり前だ。

「…貴方も実技の成績だけで私たちを見ているのね…」

「… どうでしょうか。 少なくとも俺は壬生先輩のことを蔑んだりしませんよ」

「え？」

「あくまで俺の主観ですが、魔法の才能がないことに耐えられないのなら他の生き方を見つけるべきだと思つてます。魔法を学ぶ者が魔法による差別を否定するのは魔法から離れられないからじゃないかと俺は思います。魔法から離れたくはない。

でも一人前に見られないことには耐えられない。だから魔法による評価を否定する。壬生先輩は確かに魔法の実技は低いのでしょうか。ですが以前桐原先輩との戦いを見せてもらいましたが剣の腕は相当なものです。それを評価できないのはただの馬鹿です。」

「真田くん…」

「それともう少し壬生先輩は周りを見た方がいいですよ」

「えつと…それってどういう…」

「俺だつてトップでこの学校に入学しましたが、全ての人に評価されているわけではありません。というより万人に受け入れられる人なんていないと思います。数人でいいんです。俺も一昨年まで俺を見てくれた人は一人もいなかった。まあ俺の場合俺から近づかなかつたということもありますが…ですがそのような有象無象の輩

以上に俺のことを評価して認めてくれる人の方が大事です。壬生先輩あなたには本当にあなただを認めてくれる人いなかったんですか？俺にとつて一科生は『ブルーム』と優越感に浸り、二科生は『ウイード』と自分を劣等感に蔑むのは自分自身なんです。」それを最後に俺は席を立ちカフェから去っていった。壬生先輩はその言葉を聞き頭が真っ白になり呆然としていた。

それから一週間が経った放課後
「和樹は今日も風紀委員？」

十三束が俺に聞いてきた。

「いや、今日は非番だから店に行く」

「店？」

「スイーツショップを経営してるんだ」

「え？」

俺の言葉に十三束とエイミイが反応した。

「和樹ってスイーツシヨップやってるの!？」

「ああ」

「スゴい!!ねえねえじゃあ今から皆で行かない!？」

エイミイが少し興奮気味に言ってきた。

「いいよ。じゃあ『全校生徒の皆さん!我々は 学内の差別撤廃を目指す有志同盟です。

我々は生徒会と部活で引退し対等な立場における交渉を要求します』……すまない、

さっきの話はまた今度ということだ……」

「……そうだね……」

俺の言葉に十三束は納得したようで苦笑いしながら答えた。俺とリーナはどうせ

呼ばれるだろうと思ひ放送室へ向かった。

放送室の前には既に風紀委員のメンバーと市原先輩、十文字会頭が来ていた。暫くし

て司波兄妹もやってきた。

「全員揃ったな。状況を説明する。本人はどういうのマスターキーを盗み扉を封

鎖、中に立てこもっておりこちらからは開けられない」

「明らかに犯罪行為じゃないですか……」

「その通りです。だから私たちもこれ以上彼らを暴発させないよう慎重に対応すべきでしょう」

「いや、多少強引でも短時間の解決を目指すべきだ」

「… 十文字会頭はどうお考えなのですか？」

達也が聞くと

「俺は彼らの要求する交渉に応じても良いと思っっている」

「ではこのまま待機しておくべきだと？」

「それについては決断しかねている。不法行為を放置してはおけんが性急な解決を要するほどではない」

「…和樹、お前壬生先輩のナンバーを知らないか？」

俺は達也の言葉に一つため息を吐き、携帯を取り出した。

「壬生先輩ですか？ 放送しているんですか？ そうですか、それで本題に入りたいんですが、十文字会頭は交渉に応じるとおっしゃっています生徒会はまだ未確認ですが…」

市原先輩を見たら頷いていたので

「いえ、生徒会も同様です。ということで交渉について打ち合わせを今すぐしたいんですが？ ええ、学校側の横槍が入らないうちに、先輩の自由は保証します。だ

から扉を開けてもらえませんか?……わかりました。では…
携帯を切りすぐ出てくることを話した。

「今のは壬生紗耶香か?」

「ええ」

渡辺先輩の言葉に俺がそう答えると

「委員長、今すぐ中の奴らを拘束するための体制を整えるべきだと思います」
達也がそう言ってきたので

「待て、さつき真田が自由を保障すると発言していただろう」

渡辺先輩が言ってきたので

「渡辺先輩、俺が自由を保障したのは壬生先輩だけです。それに俺は風紀委員を代表して話しているとは一言も言っていないよ」

俺の言葉を聞き俺と達也以外は開いた口が塞がらないようだ。

「お兄様も和樹さんも悪い人ですね」

「いまさらだろ?」

「そうか?」

「はい。でも壬生先輩のナンバーをわざわざ端末に保存されていらした件、後ほど詳しくお話を伺わせてくださいいね?」

深雪はにこやかにしているが目が笑っていない。端から見れば恐ろしいだろう。だが……

「何故？」

「恋人であるリーナさんがいるのに壬生先輩とも親密になるのはよくありませんよ」

「それは俺とリーナの問題であって司波さんに詳しく話さなきゃいけない理由になつてないと思うけど？」

「……………」

司波さんは表情を変えず無言のまま俺を見ている。

「それとも、俺は司波さんの許しがないと女子と仲良くしてはいけないのか？だとしたら俺はエリカや美月とも縁を切らないといけないな。司波さんから許しをもらつてないからな」

「……………」

和樹はそんな司波さんをモノともせず言い返した。周りも司波さんに冷たい言葉をかけてる和樹に少し戸惑い気味のようにみえる。

そうすると放送室の鍵が開いた。

その事に気づいた十文字会頭は渡辺先輩に声をかけた。

「渡辺！」

十文字会頭の声に渡辺先輩も気づいた。

「今だ！総員突入!!」

「風紀委員だ、おとなしくしろ!!」

「CADの不正使用で逮捕する!!」

「委員長、違反生徒4名拘束完了しました!」

「よし!」

渡辺先輩の言葉を聞き、風紀委員は素早く動き全員を拘束した。

「真田くん!!どういふことなのこれ! 私たちを騙したのね!」

壬生先輩が血相を変えて俺に言い寄ってきた。

「真田はお前を騙してなどいない。お前たちの言い分は聞こう。交渉にも応じる。だが、要求を聞き入れることとお前たちのとった手段を認めることは別の問題だ」

十文字会頭の言葉に壬生先輩は後ずさった。

「それはその通りなんだけど、彼らを離してあげてもらえないかしら」

「七草会長!」

そこに七草会長がやってきた。

「だが真由美!」

「ごめんね摩利、言いたいことは理解しているつもりよ。でも、学校側は今回の件

を生徒会に委ねるそうです」

「何!?!」

「壬生さん、私たち生徒会はあなたたち有志同盟の主張をこれから聞こうと思うんだけどついてくる気はある?」

「私たちは逃げる気はありません!」

「じゃあ決まりね。それじゃあみんなお先に失礼するわね」

そう言つて七草会長は壬生先輩と共に放送室からいなくなつた。

翌日

今後の交渉人についての話し合いの結果あることが決まつた。それは、生徒会と有志同盟の公開討論会。日時は立てこもりから二日後、つまり明日。有志同盟はそれを承諾し生徒会から討論会に参加するのは七草会長一人ということだつた。

学校では同盟の勧誘を積極的にやっている生徒が大勢いた。俺とリーナ、雫、ほ

のかは一科生だから勧誘は受けなかった。

その日の夜九重神社では、達也と深雪は師匠である九重八雲に会いに来ていた。達也は八雲に頼んで一高にいる司甲について聞きに来た。彼の義兄は『ブランシュ』の日本支部のリーダーを務めている。表向きだけじゃなく裏の仕事を仕切ってる本物のリーダーだ。他にも色々聞いたが特に警戒するような内容がなかった。

「それと師匠実はもう一人 真田和樹について何かわかりましたか？」
達也は以前和樹のことを師匠に頼み調べてもらった。

「彼については特にわからなかったよ。」

「わからない？ 師匠がですか？」

「彼は小学四年から中学に上がるまでまともに魔法が使えなかったらしい。」

「使えなかった？」

深雪を抜いて入試主席になれるの？

「ただ、中学に入ってからからどんどん魔法の上達が上がってきて、あの九島家の令嬢と出会ってから才能が開花したってところかな？」

「（ということとは和樹は才能が秀でていたのではなく努力を怠らないで今の力を手にいれたということか……）」

「ただ、気になるのは毎年夏休みになると県外に旅行に行って、中学一年の時にいったのが沖繩なんだ」

「沖繩!? ってことは」

「うん、ちょうど大亜連合が攻めてきた時期と一緒だね」

それを聞き達也と深雪は驚いた。

「しかし、その頃は大した魔法は使えなかったはずですよね？」

深雪はそういうが

「確かあのとき焰の抜刀齋が使ったと推測する魔法はマシンガンの弾の温度を上げて暴発させる魔法だけだった。後は刀で斬られた痕に火傷の痕があったことくらいだ。」

斬られた痕に火傷の痕があつたのは何故かわからないが、弾の温度を上げて暴発させることはそう難しくないはずだ。…師匠、小学四年からと言いましたがそれ以前はどうだったのですか？」

「それが全くと行って出てこなかったんだよ」

「和樹は海外に行つてたことがあると言つていましたが」

「それについてももちろん調べたよ。でも何処を調べても出向記録がなくてね」

「……もしかしたら九島家が記録を消したのではないのでしょうか？」

「（…それが一番可能性が高いが何のために…）」

結局和樹の十歳以前のことはわからなかったが、達也は八雲の話聞いて和樹が焰の抜刀齋だという可能性が高くなった。

「…お兄様…」

「深雪？」

「…私は和樹さんに嫌われているのでしょうか…」

深雪は俯き悲しそうな声色で達也に告げた。

「確かに何故かはわからないが和樹は深雪に少し冷たいように見える。まるでわざと嫌われようとしているようにも見える。だが何のために…」

「お兄様…私…私…私…」

「深雪…俺には和樹の考えはわからない。だが、もし和樹が焰の抜刀齋だとしたら深雪を嫌っているなんてことはない。もしそうならあのとき命を助けようとしないだろう」

「…お兄様…」

襲撃

討論会当日、生徒会・学内の差別撤廃を目的とした有志同盟による公開討論会が講堂で行われようとしている。行動には全校生徒の半数くらいが集まった。会場は一科生と二科生がほぼ半々。同盟メンバーと判明している生徒が10名前後参加していたが、その中に放送室占拠メンバーはいない。

「壬生先輩がいない。実力行使の舞台が別に控えているのかもしれない」
「そうね」

俺の言葉にリーナが同意した。

そのことを話しているうちに、討論会は始まった。だが、具体的な案を考えていない感情論で話している同盟側が七草会長に勝てるわけがなかった。言うなれば同盟側は無謀な夢を語る子供と、現実を認識してそのうえで夢を掲げる大人ともいえる討論会になってしまっている。

おはよう討論会は会長の演説となってしまうような結果になってしまい七草会長の満場一致の拍手で終了した。

その時轟音が響き渡り校舎が震え上がった。

それと共に同盟メンバーと判明していた生徒が動きだし、警戒していた風紀委員は全員即座に捕縛した。その直後

「いけない！ みんな窓から離れて！ 外から何かが…」

七草会長が言ってきた。すると、窓からガス弾が落ちてきた。

「煙を吸い込まないように！」

服部副会長が魔法でガス弾の煙を一ヶ所に集め、割れた窓ガラスからガス弾ごと外に出した。

そして、ガスマスクとマシンガンを持ったテロリストが講堂へ入ってきた。

「好きにさせるか！」

渡辺先輩の魔法、M I Dフィールド。ガスマスク内部の狭い空間を窒素で満たし敵を無力化した。

「委員長、先ほどの爆発があったと思われる実技棟の様子を見てきます」

「お兄様、お供します」

達也と深雪がそう言ってきた。

「俺とリーナは図書館を見てきます」

「4人とも気をつけろよ！」

渡辺先輩にそう言われ、俺とリーナは図書館、達也と深雪は実技棟へ向かった。

少し時が遡り、討論会が始まった同時刻。バイアスロン部に入ったほのかと雫は演習林で練習していた。

「討論会どうなったかな」

「気になる？」

「うん… 私達行かなくて良かったかな」

「他人の愚痴になって付き合うだけ無駄だよ」

ほのかは討論会のことをきいているが、雫は毒舌を吐いて切り捨てた。そんな会話をしていると爆発音が聞こえた。

「えっ!?!」

「何の音!?!」

「何あれ！実技棟から煙が上がってる!?!」

「皆むやみに動いちやダメ！ 今端末で情報を調べるから待機！」

『はい！』

部長がそう言い調べると

「……!? ……おおおお落ち着いて聞いてね？ 当校は今武装テロリストに襲われているわ
！」

『！』

「… まじですか部長?!」

「こんなこと冗談で言わないわよ！ 護身のために一時的に部活用CADの使用が許
可されています。 でもあくまで身を守るためだからね」

その時…ナイフを持ったテロリストが襲ってきた。

『キヤアアア!!』

部員がそれを見て悲鳴を上げるが…ナイフが突然爆発した。

「ぐあああああああ!!」

『!?』

テロリストはナイフが突然爆発したことで両手が血塗れになり指すらまともに動か
せない状況になった。

部員達が何が起きたのか分からず辺りを見ると、雫がテロリストに向けて手を上げて

いるすがたがあった。どうやら雫が何かをしたらしいが何をしたのかは誰にも分からなかった。魔法を使ったのは何となく分かるのだが、魔法式が展開されなかったのだ。

「…北山さん…今のは…」

「部長、今はこれからのことです。どうしますか？」

部長は今の雫の魔法について聞きたかったが今はそれどころではなかった。

「十文字先輩はどうしてますか？」

ほのかが部長に聞いてきた。

「あつ…えつと…」

「幸いここから事務室が近いのでそこに行くのもいいかもしれません。自分のCADも取りに行った方がいいと思いますし」

「…そうね。とりあえず事務室に行くことにしましょう」

俺とリーナが図書館に着くと既にテロリストと生徒達で乱戦状態になっていた。

「リーナ、おそらく奴らの狙いは 魔法大学が所蔵する秘密文献を盗み出そうとして
いるんだ」

「じゃあ特別閲覧式ね。じゃあ急がなくちゃ!」

そうして俺とリーナは外にいる連中を無視して中に入ってしまった。俺とリーナの動きは縮地で動いているため誰も俺たちを捉えることが出来ず気づいた時には図書館内に入っていた。

図書館内に入り特別閲覧室に向かっていると 階段の登り口に二人 待ち伏せしていた人がいた。

『!?!』

俺達は縮地で瞬時に近づき相手が反撃する前に、俺は相手の鳩尾に膝蹴りをし、リーナは相手の顎に掌底を撃ち込み鎮圧。そのまま階段を登っていった。すると今度は階段を登りきった所に二人いた。

「! 誰だ!!」

一人が階段から下りようとしてきたがリーナの魔法で階段から滑り落とした。もう

一人は魔法を放とうとしてきたが、俺のグラム・デモリツションで魔法を無効化し、さっきの男から奪っておいた木刀で相手の胸を叩き鎮圧。

ここまで俺とリーナは足を止めず敵を鎮圧。特別閲覧室に向かっている。

俺たちの特別閲覧室に侵入するとそこには壬生先輩とテロリストと思われる三人の男がいた。俺たちが来るのがあまりにも早かったため 最先端資料をアクセスしている時間がなかったようだ。

「お前たちの企みもここまでだ」

俺はCADを向け相手に宣告した。

「生かしてはおけん！」

テロリストの一人が銃を向け引き金を引いた。すると銃が暴発した。

「ぐああああああ!!」

『!?!』

「無駄だ。お前達の持っている銃はもう使い物にならない」

「……」

「壬生先輩、これが現実です」

「え……?」

「誰もが等しく優遇される平等な世界など存在しません。あるとすれば等しく冷遇

される世界、耳障りの良い嘘の中にしか存在しません。あなたは利用されただけです」

「どうして……なんでこうなるの!?! 差別をなくしようと……平等を目指したのが間違っていたというの!?! 差別は確かにあるじゃない! それともあなたも本当は二科生をウイードだとバカにしてるんじゃないの!?! 才能がない人を見下しているんでしよう!?!」

「……和樹が才能だけでここまでできたと思っっているの……」

「!?!」

壬生先輩言葉にリーナは怒りを滲ませながら言ってきた。

「言っておくけど、和樹は6年前までまともに魔法が使えなかったのよ。それこそ魔法科高校に間違いなく入れないくらいに」

「え!?!」

壬生先輩は驚いたようだ。当然だ。今年の本当の入試主席は深雪ではなく俺なのだ。そんな俺が六年前までまともに魔法が使えなかったなど誰が想像できるだろうか。

「和樹はそれこそ六年前から寝る間も惜しんで魔法が使えるように毎日魔法の鍛練を欠かさなかった。その年頃の子供なら友人と遊んだりするのが普通でしょう。でも和樹は私に会うまで友人を作らず魔法の鍛練を毎日未だに欠かしたことはないわ。あなたの言う才能何て言うのも確かに必要なのかもしれぬ。でも一番大事なのは努力。そ

れを私は和樹に教えてもらったわ。お陰で和樹と出会う前より格段に強くなったって
いう自信もつけた。二科生だから何て言う劣等感に蝕んでいる貴女には一生かかつて
もたどりつくことはできないわ」

「……」

「何より貴女をちゃんと見てくれている人を二年の一科生に一人だけいることを私は
知っている」

「!?」

「入学したばかりの私が気づいているのに何故貴女は気づいていないのですか？それは
一番劣等生と……ウイードと蔑んでいるのは貴女自身だからです」

「……」

「壬生！アンティナイトの指輪を使え!!」

壬生先輩はアンティナイトを使い魔法を使えなくされた。

「撤退だ!!」

テロリストたちが煙幕で姿を眩まし逃げようとするが俺とリーナはテロリスト二人
を拘束した。

「壬生先輩は逃がしてよかったの?」

「大丈夫だ。おそらくそろそろ達也達もこつちに来る頃だ。おそらく鉢合わせになる。

逃げることなんて出来ないさ」

俺がそう言った後携帯をとりだしある人に電話をした。

「誰にかけたの？」

「ほのかだよ。ちよつと気になることがあってね」

その会話を最後に俺達は鎮圧したテロリスト達を縛っていると達也と深雪がやって来た。

「和樹」

「達也か、壬生先輩は？」

「エリカに任せてきた」

「そうか、じゃあこっちも手伝ってくれ。」

俺がそう言うのと達也も縛るのを手伝ってくれて、一通り終わり俺達が外に出ようとすると、階段を下りたところで壬生先輩が倒れていた。どうやらエリカが勝ったようだ。

俺達は壬生先輩から話を聞くため保健室に集まった。保健室にいるのは、俺、リーナ、達也、深雪、レオ、エリカ、七草会長、渡辺先輩、十文字会頭それと俺が呼び出したほかと雫だ。窓の外にも聞き耳をたてている人がいる。

「入学してすぐ司先輩に声をかけられたんです。もうその時には剣道部には先輩の同調者が何人かいました。」

「そんなに前から?」

「はい、魔法訓練サークルの中でも思想教育が行われていて…それが魔法差別撤廃の有志同盟という形で結束し、その背後には反魔法団体のブランチユがいたんです。」

「予想通りですね、お兄様」

「本命すぎて面白くないけどな」

「なぜこんな事に手を貸してしまったのか、今にして思えばあたしは『剣道小町』なんて呼ばれていい気になってたんだと思います。だから技術部の騒動の時に渡辺先輩の見事な魔法剣技を見て手合わせのお願いをすげなく断られたのがショックで…あたしが二科生だから 相手にしてもらえないんだと思ったらやらせなくなっただけで

…」

「それは違う。あの時私はこう言ったんだ『すまないが私の腕では到底お前の相手は勤まらない。お前の腕に見合う相手と稽古してくれ』と、純粹に劍の道を収めたお前の劍技に敵うわけがない。そりゃあ魔法を絡めれば私の方が上かもしれないが……」

「え……っじゃあ……あたしの誤解だったんですか……？　なんだ私バカみたい……勝手に先輩のことを誤解して恨んで……逆恨みで1年間を無駄にして……」

渡辺先輩が当時言っていたことを壬生先輩に改めて言うのと壬生先輩は涙を流しながら今までやって来たことに酷く後悔していた。

「……少し変じゃない？」

「何が変なんだ？　クドウ」

渡辺先輩がリーナに聞いてきた。

「いくら思い込みが強いと言ってもここまでの認識の違いが起きるものなのかしら」

「その通りだ。ほのか、頼む」

「はい、和樹さん」

俺の言葉にほのかが返事をした。ほのかには俺が前もって説明したことから何をすめるのかをちゃんと分かってくれていた。

「真田、彼女に何を……」

「まあ見ていてください」

俺がそう言いその場の全員がほのかに注目した。

「壬生先輩少しジツとしていて下さい」

ほのかがそう言うのと壬生先輩の顔を掴み額をくっ付けあった。少しするとほのかは離れた。

「どうだった。」

「間違いありません。壬生先輩は記憶をすり替えられています」

『なっ!?!』

「おそらく光波振動系魔法『邪眼（イビル・アイ）』。催眠効果を持つ光信号を相手の網膜に投射する魔法です。映像機器でも再現可能な単なる催眠術です」

「……真田は気づいていたのか?」

「壬生先輩の記憶違いが不自然なほど 激しい。聞き間違いの直後は動揺しているからあんな極端な思い込みをすることもあるだろうけど、普通は時間経過とともに冷静になっていくものだ。催眠の強い支配下に置かれていた結果だろう。ほのかも得意な魔法ですからもしかしたらと…」

「そ、そんな……」

壬生先輩はさらにショックで落ち込んでしまった。周りも壬生先輩に同情して静か

になった。

「さて、そろそろ行くか」

「ええ」

「?ちよつと待て、何処に行くつもりだ!」

「もちろん潰しに行くんですよ。ブランシユを…」

渡辺先輩の言葉に俺がそう返答すると

「!?危険だ! 学生の分を超えている!」

「私も反対よ!警察に任せるべきだわ!」

「そして壬生先輩を強盗未遂で家裁送りにするんですか?」

「でも壬生先輩は!」

「洗脳されたことと、テロ片棒を担いだことは別問題と捉えるでしょう。警察は。少な

くとも逮捕歴はできてしまう。」

「確かに警察の介入は好ましくない。しかし相手はテロリストだ。当校の生徒に

我々は命をかけるとは言えん」

「当然です。俺とリーナだけで充分です」

「悪いが真田、俺も行かせてもらおう」

「達也?」

「お兄様、私もお供します」

「あたしも行くわ」

「俺もだ」

「真田君、あたしのためだったらやめて。あたしは平気よ。罰を受けるだけのことをしたんだから」

「壬生先輩のためではありません。自分の生活空間がテロの標的になったんです。

俺はもう当事者ですよ。リーナや雫、ほのかまで被害に遭ったんだ。奴らを許すという選択肢は俺には存在しない。俺の日常を壊そうとするやつは全て排除する。撃つていいのは撃たれる覚悟のある奴だけだ」

『『『……………』』』』

「しかしどうやってブランシユの拠点を突き止めればいいのでしょうか？」

「分からないなら知っている人に聞けばいい」

俺は達也に相槌を打ちそれに気付いた達也はドアの方に歩きだし一気にドアを開けた。するとそこにはカウンセセラーの小野先生がいた。

「小野先生!？」

「…九重先生の弟子から隠れとおせようなんてやつぱり甘かったか」

「隠れているつもりもなかったでしょう。あんまり嘘ばかりついているとそのう

ち自分の本心さえもわからなくなりますよ」

「気をつけておくわ」

そして、小野先生はブランシユのアジトを教えてくれた。

「ここはバイオ燃料の廃工場だな」

「車で移動の方がいいだろう」

「ならば車は俺が用意する」

「えっ？十文字君も行くの？」

「十師族に名を連ねる十文字家の者として当然だ」

「なら私も……」

「七草、お前はダメだ」

「真由美、この状況で生徒会長が不在になるのはまずい」

「……了解よ。でもそれだったら摩利もダメよ。残党がまだ校内に隠れているかもし

れないもの。風紀委員長に抜けられたら困るわ」

「真田すぐ行くのか？このままでは夜間戦闘になりかねないが」

「そんなに時間はかけません。日が沈む前に終わらせませす。それと外で聞いている

桐原先輩。先輩も行くんでしょう？」

俺は窓を開けそこにいた桐原先輩に問う。

「ああ、行かせてもらおう」

「何故ですか？」

「一高生としてこんなこと見過ごせないからだ」

「理由はそんなことではないでしょう。命をかけるには軽すぎます。もう一度聞きます。何故ですか？」

「……」

桐原先輩はチラッと壬生先輩を見た。

「先輩、男を見せる時ですよ」

「……俺は中学時代の壬生の剣が好きだった。人を斬るための剣ではなく、純粹に技を競い合う壬生の剣は綺麗だった。でもあいつの剣は人を斬る剣に変わってしまった。」

「それが剣道部の演武に乱入した理由ですね」

「……俺は変わったあいつが許せなかった。剣道部にあいつの剣を変えちまった奴がいるはずだ。そしてその背後で壬生を利用した奴が俺は許せない！」

俺は辺りを見回すと達也以外皆顔を少し赤く染め（ほのかは真っ赤っか）微笑ましい顔をしていた。

「……クドウさんの言う通りだった。私を見てくれている人がこんなに身近にいたなん

て……それなのに私は……」

壬生先輩は桐原先輩の言葉に感銘を受けた。その事にまたも後悔の念が強くなった。「いいだろう。男をかけるには十分な理由だ」

俺が何かを言う前に十文字会頭が許可を出した。

こうして俺、リーナ、達也、深雪、レオ、エリカ、十文字会頭、桐原先輩はブランシユのアジトがある廃工場へ向かった。

突入、そして新たな刺客

俺たちは十文字会頭の車でブランシユのアジトへ向かっている。

「真田、お前が指揮を執れ」

「はい。俺とリーナ、達也と深雪が正面から、十文字会頭と桐原先輩は裏口から、レオとエリカは逃げたした奴らを仕留めろ」

十文字会頭に言われたため俺はそう答えた。

「捕まえなくていいの？」

「余計なリスクを背負う必要はない。向こうは俺達を殺しに来るんだ。命乞いは罨だと思え。敵が来たら叩き潰す。それだけだ」

エリカの言葉に答えるとその場で聞いていた桐原先輩とエリカとレオは少し引いていた。

「（これは相当キテるな…無理もない。雫とほのかが殺されかけたんだ。これがリーナだったら一人残らず皆殺しにしてただろうな）」

和樹はリーナを一番溺愛している。そのリーナが狙わなかったことが敵にとって救いだらう。…今のところはだが…

そして、ブランシユのアジトについた。

「レオ、今だ！」

「装甲（パンツァー）ー！！」

レオが車に硬化魔法をかけそのままアジトに突っ込み門を破壊した。

「ハア……ハア……」

「お疲れ、少し休んでろ」

「おう……ハア……ハア……」

「では、さつき言った通りに……」

レオは車全体に硬化魔法をかけたせいで疲れ果てている。俺達は先ほど俺が言った通りに別れアジトへ侵入した。

俺とリーナ、達也と深雪は工場の中を進んでいるが全く敵に出会わない。だがある程度進んだところで俺の全智の眼に引っ掛かった。扉の先にマシンガンを持った大勢の人がいることがわかった。

おそらく達也も気付いただろう。俺と達也は警戒しながら扉を開け進んだ。その先に案の定一人人間が先頭に立ちその背後に何十人も控えていた。

「ようこそ。初めまして真田和樹くん！司波達也くん！そして、そちらのお姫様方は妹の深雪くんと工藤リーナくんかな？」

先頭の男が話をしてきた。

「お前がリーダーか？」

「いかにも僕がブランシユの日本支部リーダー司一だ」

俺の質問に司は答えた。

「そうか。一応投降の勧告をしておく。全員武器を捨てて両手を頭の後ろに組め」

達也は即座にCADを向け司にそう宣告した。

「ふむ、それはCADだね、でも君は魔法が苦手なんじゃなかったのかな？ その自信

の源は何だい？」

司が手を挙げた瞬間後ろでマシンガンを持った人が一斉に構えた。

「司波くん、我々の仲間になりたまえ。弟の甲が知らせてくれたアンテナイトを必要としない君のキャスト・ジャミングは非常に興味深い。今回の作戦は我々もずいぶん時間とコストをかけているんだよ。それを台無しにしてくれたのが実にいまいまく許しがたいが、君が仲間になるなら水に流そうじゃないか」

「やはりそれが狙いか。壬生先輩を使って接触したのも、弟に俺を襲わせたのも、あのキャスト・ジャミングもどきについて探りを入れるためだな？俺がお前に従うとでも

「？」

「ふむ……そうだね。だったらー」

司が突然メガネを上空に投げた。

「司波達也！我が同士になるがいい！」

前髪を上げ眼を見開いて眼が光った。司がほのかの言っていた邪眼（イビル・アイ）を使ったのだ。達也がCADを下げた。

「ハハハハハハ！君はもう我々の仲間だ！では手始めにここまで共に歩んできた君の妹をその手で始末してもらおう！妹さんも最愛の兄上の手にかかるなら本望だろう！！その後そつちの二人も始末してもらおう！！」

司が高笑いしながら達也にそう告げた。

「ハアー、達也猿芝居もそれくらいにしろ。俺はあのバカをさつさと始末したいんだ」

俺が達也にそう言うと

「…それは悪かったな。それではこの辺でそろそろ終わらせるか？」

催眠にかかった振りをしていた達也も俺に同意し改めてCADを構えた。

「なっ!？」

「お前の邪眼（イビル・アイ）は既に調査済みだ。壬生先輩にかけて記憶をすり替えたこともな。分かっているなら対処の使用は簡単だ。眼鏡を大きさに投げることで右手に

『『『ぐあああああああ!!』』』』

前にいる奴らのマシンガンはバラバラになり、背後にいる奴らのマシンガンは暴発し、その爆発でやつらは腕と眼をやられ血も吹き出しバタバタと倒れた。

「!?!」（今のは…ではやはり和樹さんは…）」

「何だこれは!?!武器がバラバラに…。」

「あつちは何で暴発した!?!」

マシンガンを持っていた奴らは混乱し、司が逃げ出した。

「待て!」

達也が司を追ったが、背後から一人達也をナイフで襲ってきた。

「うっ…あっ…ああ…」

体が動かなくなり少しずつ凍っていく、最後には全身凍りついた。

「愚か者」

「程々にな。お前が手を汚す価値もない連中だ」

「はい。お兄様」

「リーナもこつちに残れ。あいつは俺と達也で十分だ」

「ええ。また後でね」

俺と達也は司の後を追った。

和樹と達也が司一の後を追い部屋から出ると、即座に深雪が魔法を発動した。

「何だこの冷氣……」

「かつ体が動かない……」

「お前達は運が悪い。お兄様に手出しをしようなどとさえしなければ少し痛い思いをするだけで済んだものを。私はお兄様ほど慈悲深くはない」

「ま……まさかこの魔法は……」

「へえ、まさか深雪がこの魔法を使えるなんて……」

振動減速系広域魔法『ニブルヘイム』

液体窒素すら発生させる広域冷却魔法。戦術級魔法に分類される。

深雪は恐怖した。自分の冷却魔法を浴びて無事だった者は今だかつていなかったからだ。

「あなた、誰!？」

「俺の名は青龍」

「待て！」

俺と達也は司を追っていて一つの部屋に入っていた俺と達也は部屋の前で立ち止まった。俺は全智の眼を使い誰がいるのかを探った。

「（敵は11人。サブマシンガンが10丁。これで全員だな）」

俺は即座に魔法を使い堂々と部屋に入った。俺が入った瞬間サブマシンガンを持った奴らは引き金を引いた。するとサブマシンガン暴発した。

桐原先輩が『高周波ブレード』を発動し斬りかかった。司の右腕を斬り落とした。

「ぎゃあああああああ!!!」

「その辺にしておけ」

桐原先輩は追撃をしようとしたが十文字会頭に止められた。

「……終わったようだな」

十文字会頭が周りを見てそう言ってきた。その時：

『フッフッフッフ、まだ終わってはいない』

突然、部屋全体にそんな声が聞こえてきたので全員が警戒した。周りを見渡すが誰もいない。

だが、俺は全智の眼を使うと敵がいる壁の方にサイオン弾を撃ち込んだ。突然の俺の

行動に達也をはじめ全員が驚愕したが、そのサイオン弾が何かに弾かれた。

『クッククック、よく俺の居場所がわかったな。誉めてやろう』

壁しかないところから人影が出てきて姿を現した。

それとほぼ同時に達也は誰よりも驚愕していた。『精霊の眼』が効かなかったのだ。
「!? (どういうことだ……?)」

これでは達也の得意な『分解』は使えない。

「お前は？」

俺が聞いた。

「四聖獣リーダーの朱雀だ」

時間が少し遡り、雫とほのかは自宅に帰っている。

「ハァー、今日は色々あつて疲れたね」

「うん」

「でも大丈夫かな？和樹さん達……」

「和樹がやられるところ想像できる」

「……確かに……」

「それで雫はこれからどうする？今日は店が臨時休業にしたって和樹さんが言ってたから、私は和樹さんの家でご飯でも作って待つてようかなって思ってるんだけど？」

「私も行く。今日は和樹に癒されたい」

「私も……」

そんな会話をしながら二人は和樹の家に向かっていた。暫くすると人が全くいなくなっていた。今は夕方まで下校時間だから学生がうろうろしていてもおかしくないはずだ。違和感を感じた二人は近くの公園に行き辺りを警戒した。すると突然何かが雫の方へ飛んできた。

「雫……」

ほのかは雫を抱き横へ飛んだことかわすことができた。今度は避けた方向から細長い岩が地面から出てきて襲ってきた。ほのかは雫を突き飛ばしてその攻撃を腹部に

受けた。

「ぐっ！」

「ほのか！」

「大丈夫……かすただけだから………つ……………」

それでもほのかの腹部は血が出ていても大丈夫には見えなかった。

『ほう、俺が攻撃を受けてその程度とは小娘にしては中々やるな！』

『玄武、何をやっている。今のは確実に仕留められただろう！』

『簡単に殺しては面白くあるまい？これは単なる挨拶代わりだ。お前もそうだろう？』

『……仕方あるまい……』

「!？」

頭に響くような声が雫とほのかに聞こえてきた。

「誰!？」

雫が言うのと先ほど攻撃したと思われる二人が姿を現した。明らかに人間ではなかった。一人は全身岩石の体で出来ている亀のような姿をしていて、もう一人は3メートル近い巨大な虎のような体をしていた。

「俺様は玄武。貴様らを俺様の餌にしてやる」

「俺は白虎。玄武よそっちの小さいのは俺の獲物だ。横取りは許さん！」

四聖獣との戦い① ほのかVS玄武 雫VS白虎

私は雫と和樹さんの家に行く途中、突然周りに人がいなくなり静かすぎたため辺りを警戒しながら近くの公園に寄り現れた人物。いや、3メートルを越えた虎『白虎』。全身が岩で出来ている化け物『玄武』が現れた。

「お前達はここで俺達の餌となるのだ！」

岩石の化け物、玄武がそう言うのと今度は背後から先ほどの細長い岩が私たちに襲ってきた。私たちはなんとか避けたが私と雫は分断され、一対一で戦わなければいけない状況になってしまった。

「雫！」

「おっと、貴様の相手は俺だ！」

雫の元へ行くとした私は玄武が地面から現れ行くことが出来なかった。

「地面から!?それにその尻尾、まさかさつきから地面からの攻撃は!?!」

「フハハハハ！驚いたか！俺は岩と一体となって移動することが出来るのだ！岩を通して尻尾だけの攻撃など朝飯前よ！今度は防げるかな？」

するとまたも玄武は地面へ潜っていった。

暫くするとまたも背後から襲ってきた。私は何とか避けられたけど避けた方向からまた尻尾だけが攻撃してきた。何とかかわせたけどいつの間にか、また玄武はいなくなっていた。また地面に潜ったんだろう。

暫くして今度は前から襲ってきた。私はまたかわせたけど次の尻尾の攻撃で足を掠めてしまった。

「痛っ！」

そしてまた玄武は地面に潜ってしまった。

『フハハハハ！逃げてばかりでは勝てんぞ！』

「……確かにあなたの言う通りですね」

私は腕に付けてあるCADを操作した。

光の鞭『オーラウィップ』

光でできた鞭。弱い妖怪なら触れただけで消滅してしまう。ただし、出している間はサイオンが消費していくので長い時間は使うことができない。ほのかのサイオン量なら最大30〜40分出し続けることができる。

『フハハハハ！どこから来るかわからない敵相手に鞭なんぞが通用するか！』

「そうかもしれない。でも私はここで負けられない!」

『そんな戯れ言いつまで続けられるかな? お前のその豊満な体を次で頂くとしよう!』

辺りは静かになり、少しすると後ろから襲ってきた。私は横へ飛んでかわすとかわした先に尻尾が出てきた。

「そー!」

私は避けた先に尻尾が出てくることを読んでいた。玄武の攻撃は先ほどからだただ挟み撃ちをして攻撃するだけ…。だからそう来るとおもい、鞭をふるった。すると尻尾は簡単に引き裂かれ粉々になった。

「ぐわああああ!!」

玄武は尻尾が失くなったことで苦しむとそこへ私は追撃し胴体、首、手足を切り裂きバラバラにした。

「バ……………バ…力……………な……………」

「…っ……………何とか勝てたね。そうだ雫は!」

私は雫乗元へ行くこうとしたとき近くの岩が揺れているのに気づいた。

「まさか!」

玄武の体が再生していったのだ。

「グハハハハハ！バカめ、俺は不死身だ！」

「!!」

「俺は元に戻るどころか分裂することもできるぞ？このようにな！くらえ爆裂岩衝弾!!」

玄武の体分裂し多くの岩が私に襲ってきた。私は地面に伏せてなんとかかわせたが、あんな攻撃防ぎようがなかった。だが、分裂した時、何か私の勘が働いた。先ほどにはなかった何かが。これは光のエレメンツである私だから分かる何かがあるのかもしれない。

「遊びは終わりだ！死ねえ！」

玄武はそう言いまたも分裂して私に襲いかかった。すると岩の中で赤く光っている岩があった。私はそれを見て玄武の攻撃を真っ正面からすべて受けた。

「自分から的になるとは血迷ったか」

すべての岩が通りすぎ玄武がそう言ってきた。

「ハア……………ハア……………ハア……………あなたの負けです」

「何を言っている。今楽にしてやるからな」

その台詞を言った玄武はほのかを見て驚愕した。

「ん？あれ!?奴が逆さまに!？」

玄武の体が上半身と下半身の位置が逆になっていたのだ。

「な、なんだあ!?……………まさか貴様…………!?」

「これのことですか?」

私は先ほど赤く光っている岩を手にするためわざと攻撃をうけながらも奪っていた。

「あ!?そ、それ!?」

「これがあなたの体を再生する核となる岩ですね。和樹さんから聞いたことがありません。体を再生する相手は必ず再生する為の核が存在することを。わざわざ分裂してくれたので探すのは簡単でした。岩も光っていますからね」

「あ……………あ……………」

「光っているモノを見つけてるのは得意なんです。私、光のエレメンツなので」

「ま…待て!それを傷つけるな!!」

「断ります!!」

私は光っている岩を『オーラウィップ』で真つ二つにした。

「ぐあああああああ!!!」

玄武の体は光り輝き爆発した。すると玄武の体は完全に消滅した。

「痛つ……………ハア……………ハア……………ハア……………無理……………しすぎちゃったかな……………」

ハア……………ハア……………ハア……………」

玄武に勝ったとはいえほのかの体はボロボロ。あちこちに血が出ており服もボロボロになっていた。

「雫は大丈夫かな？」

私はほのかと別れ3メートルはある虎の化け物と対峙している。

「フハハハハ！あの豊満な体をした女頂けないのは少し悔しいが、その貧相な体で我慢してやろう。」

プチッ

「……貧相……？」

「ああそうだ！貴様、自分の体を見たことないのか？俺は最近ウメ食いもんになりつけずイライラしていたんだ。それなのにそんな貧相な体をしている貴様で我慢してやろうとしているんだ。だから貴様はさっさと俺様に食われろ！」

するとあまりのうるさい声で辺りにあつた木がすべて枯れ木のように葉っぱが飛んでいつてしまった。

だがそんなことにも気にせず雫は白虎を睨んでいた。

「………わかった。じゃあすぐに終わらせてあげる……」

「フハハハハ！では逝くぞ！」

白虎は自分の髪の毛を抜きそれに息を吹き掛けると3匹の妖獣になった。

「………孫悟空？」

雫は西遊記の孫悟空を浮かべてしまった。

「さあ、ワシの分身妖獣達よ。その女喰らい尽くせ。ただし、俺様の分はちゃんと取って

おくのだぞ」

ほのかよりも身体能力の低い私は近付かれたら一溜りもない。だから私はすぐにC ADを操作した。すると、3匹の妖獣は動かなくなった。

「何!？」

3匹の妖獣の前足を硬化魔法で動けなくしたのだ。そこで雫はさらに魔法をかけた。

共振破壊

雫の母、紅音が得意とした魔法。

対象物に無段階で振動数を上げていく魔法を直接かけ、固有振動数に一致した時点で出力を上げ破壊する魔法

妖獣の体に直接かけたが効き目がなかった。どうやら共振破壊が効かないようだ。

妖怪達は何故か情報を書き換えることで破壊する魔法系は効かないようなのだ。達也の『分解』、一条の『爆裂』等がそれに当てはまる。

雫は『共振破壊』が効かないことに気づき違う魔法を使った。

フォノン・メーザー

超音波の振動数をあげ量子化して熱線とする高度な振動系魔法だ。

それが直撃し妖獣は苦しみもがきながら溶けていった。残りの二匹にも『フォノン・メーザー』を浴びせ、同じように溶けていった。

「ぬ〜！大人しく妖獣達に殺されておればよいものを。この俺を本気で怒らせおつたな！こうなつたら貴様は跡形もなく消滅させてやるわ!!そもそも貴様のような貧相な体をした小娘程度では腹の足しにもならんからな!!」

そう言うとき白虎は口に妖気を集め、口からサイオン弾のような球を吐き出した。雫は咄嗟のことだったのでその球を避けた。すると背後にあつた建物に当たり跡形もなく消滅した。

「フハハハハ！見たか！俺様の鳴虎衝壊波の威力。触れたものを塵とかす超振動の雄叫びよー！」

雫は建物が消滅したことに一瞬驚いたがすぐに冷静さを取り戻した。

「どうした？驚いて声も出せんか？ならばとつとと死ねえー！」

白虎はまたも鳴虎衝壊波を雫に放った。だが雫は一向に動かなかつた。

「フフフ、観念しおつたか？」

白虎はそう言ったが、雫に当たる直前、爆発した。

「何!?!」

白虎再び鳴虎衝壊波を放った。今度は3発を連続に放った。だがやはり雫の目の前で爆発した。

「バカな!?! 一体どうなっている」

白虎はそんなことを言っていると今度は白虎の左腕が爆発した。

「ぐあああああああ!!!」

今度は右腕が爆発した。

「ぐあああああああ!!! バカな!?! 一体どうなっているんだ!! 貴様! 何をやった!」

「……私が何をやっているかわからないってことはそれだけ私とのサイオン量が違うってこと。それはつまりあなたは私には勝てない」

「ぐぬぬぬ……」

白虎は何も言い返せなかった。あれだけ雫を煽っていた白虎が。しかし無理もない。雫が何をやっているか分からないのだ。CADも操作しているわけではない。白虎の体には触ってもいない。だが何かの魔法を使っていることはわかるがその本体が分からない。いや見えてないのだ。魔法を使うと言うことは魔法式が展開される。それすらないのだから。

「特別に私が何をしているのか教えてあげる。私はあるものを作り出すことができる。それは今あなたの周りに浮いている。あなたには見えていないみたいだけど」

「何だと!?!」

「私はほのかが心配だから終わらせる。最後に私が何を作っているのかあなたにも見えるように具現化してあげる」

すると白虎の周りが所々光だした。すると出てきたのは一つ目したコウモリのような生き物が出てきた。

追跡爆弾（トレースアイ）

生きた生物でできた火燃物体。その名の通りどこまでも追っていく爆弾

「な!?!」

「爆弾」

一斉に白虎に襲いかかった。白虎は防ぐことが出来ず白虎の体は血が飛び散り、肉片が飛び散り、最後にはその場には白虎の原型は何も残っていなかった。

雫はそれを確認しほのかの元へ行こうとした。

「雫！」

するとほのかがこっち近付いてきた。どうやらほのかも玄武を倒してこっちにきたようだ。

「ほのか、すごい怪我」

「大丈夫だよ。これくらい」

ほのかは雫と違って大分ボロボロだった。

「早く和樹の家に行って治療しよう」

雫はほのかの手を取り早歩きで和樹の家へ向かった。

「あつ、ちよつと待ってよ。雫」

雫は、クエスト『雫 vs 白虎』をクリア。経験値と魔法ポイントが加算します。

ステータス

北山雫 高校一年 15歳

レベル27

体力 151 / 151

サイオン 238 (286)

力 40 (48)

敏捷 72 (86)

頑強 25

器用 95 (114)

魔法力 129 (155)

魔法技能 110 (132)

す。ほのかは、クエスト『ほのか vs 玄武』をクリア。経験値と魔法ポイントが加算しま

ステータス

光井ほのか 高校一年 15歳

レベル27

体力 170 / 170

サイオン 207 (248)

力 50 (60)

敏捷 93 (112)

頑強 35

器用 107 (128)

閃光魔法

幻影魔法

光学迷彩

邪眼（イビル・アイ）

光の鞭（オーラウィップ）

四聖獣との戦い② リーナ、深雪VS青龍

「そんな!? 私のニブルヘイムが……」

深雪が自分の魔法がまるで効いていないことに驚愕している。無理もない。少なからず私も驚いた。『ニブルヘイム』は液体窒素さえ発生させる高位冷却魔法。

今までリーナは和樹と一緒に行動することが多いため、今回のようにいろんな妖怪を相手にしたことがあった。でも今までの相手なら十分凍らせることができる魔法だったからだ。でも、目の前の相手は、妖力を放出するだけで防いだ。明らかに今までの相手とは格が違うことが物語っている。

「貴様がアンジェリーナ・クドウ・シールズだな?」

「!? ……どうやら自己紹介は必要なさそうね」

「アンジェリーナ・クドウ・シールズ?」

青龍が私を工藤リーナではなく、私の本名であるアンジェリーナ・クドウ・シールズと呼んできた。この名はスターズの追手から身を隠すために棄てた名だ。しかも日本にきてその名を知っているのは九島家の人間か和樹しか知らないはず。雫やほのかも知らない。その名を目の前の男は知っていることに多少驚いた。

深雪はその名を聞いて『何言ってるの?』みたいな顔をしている。

「おい、その女!」

「!?!」

青龍は深雪に声をかけた。

「死にたくなければさっさと消えるんだな?」

「な!?!」

「聞こえなかったのか? 死にたくなかったらさっさと消えろと言ったんだ!! それとも前はただの自殺志願者だったのか?」

「っ!?!」

青龍の言葉に深雪の何かがキレた。無理もない。私の隣にいて、先ほど『ニブルハイム』を使って攻撃までしたのだ。寧ろ、なにもしていない私が無視されるのならともかく、目立つことをした深雪が無視されたのだ。『お前など眼中にない』: そう言われたかのようなのだ。

元々深雪は達也とは違い沸点が低い。挑発されれば簡単に乗ってくるような性格なのだ。

深雪は再びCADを弄り魔法を発動させた。

「深雪!!」

私は止めようと声をかけるが間に合わない。

深雪の魔法、精神凍結魔法『コキユートス』

沖縄で大亜連合が攻めてきたときシエルターに現れたテロリストを凍らせた肉体だけではなく精神をも凍らせる魔法だ。

だが青龍にはまるで効いてないのだ。

「!?……………なん……………で……………?」

深雪はまたも驚愕した。コキユートスは相手の精神を凍らせる魔法。いくら肉体を鍛えても……………いやそれ以前に液体窒素で凍らない体があるとは思えないが……………とにかく、肉体を鍛えても精神を鍛えることなど不可能だ。なのに青龍はどこと凍らされていないのだ。

「……………せつかくこの俺が忠告してやったというのに無視するとは、覚悟は出来てるだろうな!!」

またも青龍は魔力を放出し、放出した魔力が私たちに当たろうとした時、私も魔力障壁を使って受け流した。

受け流された魔力は後方へいき、壁にぶつかり、壁が崩れ落ちた。これが続くとこの

部屋もいずれ崩れるのではないか？

「……………あ……………」

深雪は酷く怯えているようね。無理もない。初めてみた妖怪がこんな化け物なんて……

「深雪!!呆けてる暇があるなら早くここから離れなさい!!このままだとアナタ確実に死ぬわよ!!」

「……………でも……………リーナは……………?」

「アイツの狙いは私よ!さっきのアイツの会話で気づかなかったの!」

アイツは出てきたとき深雪に死にたくなかったら消えろと言ってきた。つまり深雪は殺す対象ではないということだ。

「……………でも……………」

それでも深雪にとってリーナはクラスでいつも一緒にいて授業でも自分と対等に競り合うだけの力を持っている良きライバルだと思っている。和樹の場合、異性ということもあるうえ、実力差がありすぎるので近い実力のリーナに対して深雪は対抗意識を持っている。

そのため、リーナを置いて自分だけ逃げるといふ選択は深雪にはなかった。

「……………私も残る……………一人で戦わせはしないわ!」

「どうやら深雪の闘志に火がついてしまったらしい。」

「!? 深雪、あなた…!」

「お喋りはその辺にしておらおうか?」

「!?」

リーナは深雪に何か言おうとしたが、青龍に遮られてしまう。

「二人纏めて粉々にしてやる!」

すると青龍の右こぶしに冷気が集まっている。

その隙についてリーナは魔法を放った。

放出系領域魔法 『ムスペルスヘイム』

気体分子をプラズマに分解し高エネルギーの電磁場を作り出す領域魔法

さらに、深雪も魔法を放った。

中規模エリア用振動系魔法『氷炎地獄（インフェルノ）』

二分した対象エリアの一方の空間内全ての振動エネルギー運動エネルギーを検索し、その分をもう一方の空間を加熱するエネルギーへと変換する高難度魔法

「（コキュートスやニブルヘイムが効かない以上、冷却魔法は効かない。ならばその逆ならどう?）」

魔法発動はリーナの方が速かった為青龍はマトモに受けた。だが…

「フツフツ、この程度の熱では俺にとって暖かいと感じる程度だな」

「!?そんな!」

「この化け物!」

深雪は驚愕し、リーナは冷や汗を流しながら悪態をついている。

「死ねえ!魔闘凍霊拳!!」

「深雪!!」

リーナは深雪を抱きしめながらなんとかかわしたが、かわした後が完全に凍りついてる。

「フン、うまく避けたな。貴様らには見えなかっただろうが絶対零度に近い拳を瞬間的

に100発叩き込んだ」

100発!?つまり音速の拳。それも絶対零度に近い冷気で繰り出すなんて…

「今回はうまく避けたが、紛れがいつまで続くかな?」

確かに音速で飛んでくる冷気をかわし続けるなんて絶対に不可能だわ。

「死ねえ!」

またも青龍が同じ技を撃ってきた。

「!!」

考え事をして反応が遅れた私は抱き抱えていた深雪を突き飛ばし深雪とは逆の方向へ飛んだ。だが、そのとき両足を凍らされてしまった。

「リーナ!!」

深雪は悲痛の叫びを木霊した。

「フッフッフ、どうだ?最早観念したか?」

「くっ!」

「だがもう遅い!いくら泣き喚いても、お前の運命は代えられない!暫くそこで見ているのだな?先にこっちの小娘を先に殺してやる」

「っ!?!」

青龍が深雪に視線を移し、深雪は一步後方へ退いた。

「フッフッフ、どうだ？自分を庇ったせいで犠牲になった者を見るのは？奴の命も後数分の命だ。動けなくなつた体で自分が守ろうとした者が死ぬところを見るのはどんな気分であらうな？」

「っ!!」

深雪はかなり頭に血が登り辺り一帯が魔法が暴走し、凍りついていく。だが青龍にとつて氷は力の源。辺りが凍れば凍るほど力を増していく。

「深雪!!」

リーナは深雪に声をかけるが聞こえてないようだ。

深雪は魔法を発動させた。リーナの凍らされている足を溶かそうとしているのだが、絶対零度に近い冷気で凍らされた氷を溶かすことは出来なかつた。

「フッフッフ、無駄だ！絶対零度に近い冷気を溶かすことなどできるものか!?さてすぐに殺すのもつまらん。ジワジワと名振り殺しにしてくれる！死ねえ！」

またも青龍は魔闘凍霊拳を放つた。

リーナと違い深雪は体術を得意としない典型的な魔法師。避けることも防ぐことなどできるはずもなくマトモに受けた。だが、受けたのは両手両足のみ。

「これで逃げられまい。さて、どうやって殺すか……ん？どうやら玄武と白虎は殺られたようだな？」

「?」

青龍はいきなり訳の分からない独り言を話し始めた。

「ちっ、全く役にもたたん愚か者共だ。まあいい、所詮あの二人は前座。俺と朱雀様が入れば済む話だ」

「アナタ! まだ仲間が!」

リーナが青龍に聞くと

「俺の他に朱雀様がいる。今頃はこの先に入った奴らを根絶やしにしている頃だろう」

「お兄様が負けるはずありません!!」

「フツフツ、確か司波達也とかいったな? 確かにこの世界の魔法師で奴に勝てる者は片手で数える程度しかいない。流星はこの国の最強の魔法師集団十師族といったところか?」

「!」

「……十師族……?……達也が……?……ということ……深雪……?……アナタも……?」

「……っ!」

「だが奴の魔法は我らには通用しない。そういう体でできているのだからな!」

「!……そ、そんなはずありません!」

「フン、信じなければそれでいい。どうせお前たちはここで死ぬのだから。すぐにお前

の大好きなお兄様とやらに会わせてやる」

深雪は恐怖に震えていた。確かに身動きがとれなくなり魔法も効かない以上勝ち目はない。

「本当ならもう少し生き長らせようと思っていたが、他の二人が殺られてしまった以上俺が行くしかあるまい。それにしても少しはやるようだな？ お前の仲間の北山雫と光井ほのかという小娘は」

「!?」

「貴様ら殺した後その二人を殺しに行く。真田和樹は朱雀様が入れば問題あるまい。」
「何で雫とほのかを!? それに和樹さんまで!!」

深雪は叫ぶように青龍に言った。

「奴らがこの世界の異物だからだ。そこにいる女も含めてな」

青龍は深雪にリーナに視線を向けてそう答えた。

「さて、お喋りはここまでだ。そろそろ「やっぱりこのままで無理のようね…」…? 何を言っている?」

青龍の言葉を遮るようにリーナが突然そんなことを言ってきた。

「リーナ?」

深雪も困惑していた。どう見ても絶体絶命なのにリーナにはまだ余裕があるのだろ

「あ、熱い…」

深雪とリーナの距離は何メートルも離れている。それなのにの体の熱がここまで届いている。その熱のせいで深雪の両手両足や、深雪の『ニブルヘイム』で凍らされていたブランシユのテロリスト達の氷はすっかり溶けていて全員その場で倒れていた。

二人の間にいる青龍はもつと熱いのだろうが汗一つかいていない。だが、さつきまでの余裕がなくなり、リーナに対して強い警戒心をもっている。

「良からう。遊びは終わりだ。これで今度こそ止めをさしてやる」

「此方も本気で行くわよ!!」

お互い魔力を全力で放出した。リーナ右手に雷が集まってくると同時に、リーナの体が黄色から元の色へ戻っていった。次で全てが決まる。深雪はそう感じていた。深雪は二人から離れリーナの勝利を願うだけだった。

「死ねえ!!」

青龍は今までとは違い全力の凍気を放った。

「はあああああああ!!」

リーナも全力の雷を放った。

最初は両者ともいい勝負をしていたが、すぐ均衡が崩れた。青龍の凍気が徐々に溶けてきていたのだ。

「ぬあ？バカな!!」

青龍はリーナの放った雷に呑み込まれ全身が雷で焼け上がった。

その後は青龍の体はピクリとも動かなくなり死んだということがわかった。

「フーツ、なんとか勝てたわね。」

リーナは外したリストバンドをつけた。

「これがなかったら今頃死んでたわね。和樹に感謝しないとね」

深雪は呆気にとられていた。先ほどまでどんな魔法を繰り出しても何も効かなかった相手を一撃で殺してしまったのだ

そんな深雪の心情を知りつつも

「深雪、私も聞きたいことがあるけど今は後回しよ。アイツの仲間が和樹達の所にいらしいから先を進むわよ」

リーナの言葉に我を取り戻した。

そうだ。さつき青龍は朱雀という者がお兄様達のところに行っている言っていた。しかも様呼びをしていたということとは上司。実力が青龍より上の可能性がある。

「そうね。速く行きましよう!」

深雪はその事を察し、リーナと一緒に急いで和樹達の元へ行こうとしたとき…

ピシヤアアアアーーーーー
ンンンンンンンンンンン
!!!!

ドオオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオ
オオオオオオオオオオオ
!!!!

「!?」

突然雨も降っていないのに雷がこの先の建物の中に降ってきたのだ。

本当は何度か起きていたのだが、青龍との戦い集中していた二人は気づかなかつたのだ。

「お兄様!」

深雪は慌てて達也が通った通路に走っていった。

「深雪!」

リーナも和樹のことが心配なため深雪に続くように走っていった。

リーナは青龍を倒したことで経験値が上がります。

ステータス

工藤リーナ（アンジェリーナ・クドウ・シールズ）

レベル 43

体力 250 / 250

サイオン 311（384）

力 82（98）

敏捷 144（173）

頑強	72	(87)
器用	140	(168)
魔法力	150	(190)
魔法技能	190	(228)
魔法ポイント		
加速	70	
加重	50	
移動	80	
振動	50	
収束	55	
発散	45	
吸収	55	
放出	100	
無	60	
系統外	80	
知覚	45	

魔法

自己加速術式 ベクトル反転術式 仮想行列（パレード）

ダンシング・ブレイズ

分子ディバイダー ムスベルスハイム 対物障壁 ???

戦略級魔法

ヘビィ・メタル・バースト

四聖獣との戦い③ 和樹、達也他 V S 朱雀 前編

今俺達は目の前に突如現れた男に警戒している。相手の名は朱雀。遊白に出てくる四聖獣リーダーの朱雀だ。俺はそれを知り、すかさず朱雀のステータスを確認した。

ステータス

朱雀 ???歳

レベル 55

妖力(サイオン) 386

力 133

敏捷 170

頑強 140

器用 199

技

暗黒雷迅拳 暗黒妖籠陣 暗黒雷光波

俺の方がステータスは全て僅かに上だが、朱雀は7人に増えることを考えるとかなりヤバイ。しかもこの中で朱雀と戦えるステータスをもっているのは達也だけだ。その達也でさえ僅かに下だ。しかも得意魔法であるグラム・デイス・パージョンが効かない相手。こんなところでマテリアル・バーストを使わないと思うが達也の性格上樂觀はでない。そんなことを考えているうちに…

「お前もブランチュの人間か。両手を上げて大人しく投降しろ」

達也がCADを朱雀に向けそんなことを言ってきた。

「ハッハッハッハッ、俺様に投降しろだと。どうやら分かっているようだな。お前がいくら頑張ったところでこの俺に勝てないということが」

朱雀が投降を拒否すると、達也は躊躇うことなくCADを引き魔法を放った。

しかし、朱雀は微動だにしなかった。達也は僅かに目を見開き驚いた。
「クツクツクツ、今何かしたのか？」

達也が魔法を放ったのに何事もなく立っている朱雀を見てこの場にいる全員が朱雀に要警戒体制をとった。

「別に驚くことでもあるまい。この程度の靈気弾、子供のお遊びレベルだろう？」

和樹以外のその場にいる者は何を言ってるんだともいうべき表情をしていた。あの達也でさえ一瞬表情が変わった。

無理もない。先ほど達也が放った魔法は普通の人間がまともにくらえば間違いないを貫通する威力はあったのだ。それをまともにくらつても、まったくダメージを受けていない。

「うおおおおおおオオオオオオオ!!」

桐原先輩が横から斬りかかったのだ。高周波ブレードを使い朱雀に襲いかかり刀を勢よく振り下ろした。だが、朱雀は右手に妖気を纏い片手で受け止めたのだ。いくらなんでも高周波ブレードを片手で受け止められる人間などいるわけがないのだ。

「な!?!」

「バカな!?!」

「!?!」

桐原先輩、十文字先輩、そして達也までも驚愕した。だが俺はさほど驚かなかった。この程度で腕を切り落としていたら儲けものだと思つたからだ。

「お前は邪魔だ!!」

朱雀は斬りかかつてきた桐原先輩の腕を掴み電流を流した。

「ぐああああああああああああああ——————————!!!!」

「桐原!!」

「桐原先輩!!」

「……………あ……………が……………」

朱雀は桐原先輩の腕を離すとそのまま倒れこみ動かなくなった。

「フツ、心配するな。軽く電流を流しただけだ。とはいえ、人間は少しでも高圧電流を流せば死ぬからな。なんとも不甲斐ない生き物よ」

「なんだと…」

「さて、貴様が真田和樹だな?」

「!?!」

「他の者には用はないが、邪魔をするようなら殺す」

朱雀のその言葉に十文字先輩は魔法を放つた。

フアランクス

幾重にも展開され更新し続けられる多様な魔法防壁があらゆる種類の攻撃魔法を弾き返す。十文字家の代名詞と言える魔法

十文字先輩は自分の前にフアランクスを展開した。

「ハッハッハッハッ、それはなんの真似だ！その程度の防壁で俺の攻撃を防げると思っているのか？人間とは悲しいな？今その苦しみから解放してやろう!!」

朱雀は右手を上げると突然朱雀に雷が落ちた。俺達がいた部屋は雷が落ちた為、天井が崩れ部屋が瓦礫の山となった。十文字先輩はフアランクスで防いだ俺と達也は部屋の外へ行き生き埋めにならなかった。よく雷が落ちて建物が崩壊しなくてよかったなと思った。

天井が崩れ落ちて暫くして静かになったため俺と達也が部屋に戻ると十文字先輩が倒れていて十文字先輩の顔を朱雀が踏みつけていた。

「十文字会頭!!」

俺は自己加速術式と縮地を使い朱雀の懐へ飛び込み朱雀の顔面を殴った。

朱雀はよろめき後ろへ下がるとそこへ追撃するように達也も襲いかかった。連続でこぶしを繰り出したまに蹴りも放つが、拳は片手で蹴りは足で受け止めていた。

「くっ!?」(速い!)

朱雀は片手で受け止めていたが下がりがら受け止めていたのでかなりギリギリだったため、途中で窓に飛び込み外へ逃げた。俺と達也も追うとそこにレオとエリカがやってきた。

「達也!和樹!」

「誰コイツ!」

「レオ!エリカ!向こうにいる十文字会頭と桐原先輩を頼む!」

「え!?どういう」

「早くしろ!桐原先輩は瓦礫に埋もれている。急げ!」

おれがそう言うのと二人は急いで俺達が出てきた部屋に向かった。

「なるほど、確かに真田だけではなくどうやらお前も少しはできるようだな?」

朱雀は達也を見ながらそう言ってきた。

「だが、靈気を通っていない拳では俺は倒せん!だがこのままお前の相手をしながらでは真田を倒せんのもまた事実……………よかろう、特と見ろ!そして恐怖しろ!真田和樹!暗黒雷迅拳と双壁を成す、我が闇奥義を!」

朱雀が両手を合わせ妖気を集めると朱雀の体が揺れ動き体が分離していった。

「あれは?」

達也が目を見開き混乱している。こんなに驚いた顔をした達也は初めてだ。

「フツフツフ、この技はこの俺を七つに分ける最高妖術だ。どれが本物か当ててみると言いたいところだが動揺しているお前達にもわかりやすく言つてやろう。七人に全てがこの俺だ！闇奥義、暗黒妖朧陣！」

朱雀が七人になったのだ。

「そつちの二人は司波達也を殺せ。残りは真田和樹を殺すぞ」

達也の顔を見ると汗が流れている。無理もない。たつた一人で桐原先輩や十文字会頭を倒した男が七人になったのだ。正直勝てるかどうかわからない。……………俺も出し惜しみしている場合じゃないかもしれない。

俺はそう思い右側に黒い空間を出した。俺が突然そんな行動をしたので達也と朱雀は此方を見ていた。その黒い空間に手を入れると中から刀が出てきた。

穴（ホール）

距離と距離を縮めることで遠くに行ったり、遠くの物を取ったりする空間魔法

「和樹、その魔法……」

「達也、目の前のことに集中しろ。でない……………死ぬぞ」

「!?」

達也は俺にふと視線を移したせいと隙ができ二人の朱雀に接近を許してしまった。元々極僅かだがスピードもパワーもあちらが上。そんな二人に接近を許してしまえばいかに達也といえど防ぐことができず攻撃を受ける羽目になった。一方的に攻撃を繰り返されては攻撃を受け続けおもいつきり壁まで吹き飛ばされた。並みの人間なら顎の骨が砕けていただろう。だが達也は何事もなく立ち上がり自己加速術式で近づきつつ、相手に加重系の魔法を使いながら足止めし攻撃を繰り返していたがやはり防戦一方。

突如一人が後ろに下がったが、もう一人が達也に攻撃してきてはそちらを対処せざるを得ない。

するとまたも雷が鳴り、後ろに下がった朱雀に雷が落ちた。そちらを見ると、なんと朱雀の右手に雷が集まっていた。雷を受け止めたのだ。

「行くぞ！暗黒雷迅拳!!」

朱雀は右手に雷を纏いながら達也に襲いかかったのだ。

流石にあれを受けるわけにはいかないと思えば後ろへ跳んだがそれを追いかけてきて繰り返してきた。達也はなんとかかわせたがかすったせいで高圧電流が達也に流れてきた。

「ぐあああああああああ—————!!!」

達也は倒れそうになったが膝をついただけですぐに立ち上がった。

「なるほど、いくら攻撃しても回復するその自己修復術式、確かに厄介だ」
「!?」

達也は目を見開き驚いた。そして、すぐ朱雀を睨み付けた。朱雀が達也の秘密を知っていることに警戒を強めたのだ。

「だが、肉体は耐えられても精神はどうかな？ 確かお前は感情の殆どが欠落しているらしいな。だが、痛みが感じないわけではない。いったいどれだけ耐えられるかな？」

「っ!？」

「さあ、一思いに殺してやろう!!」

今度は二つの雷が朱雀に落ち、右手に雷が集まっていた。

「死ねえ!!」

二人の朱雀の暗黒雷迅拳をかわすことはできなかつた。

「ぐあああああああ—————!!!」

二人の内一人が達也の両腕を掴んだ。

「フッフッフツ、どれだけ耐えられるかな？」

朱雀が電流を達也に流した。

飛天御劍流 『九頭龍閃』

神速を最大に発動させ、劍術の基本である9方向の斬撃を連続で繰り出す乱撃術であり突進術でもある。正に飛天御劍流の『動』の奥義と言っても大袈裟ではない。

九頭龍閃をまともに受けた朱雀は至るところを斬られ既に戦闘不能。るる劍のように逆刃刀ならば少しの怪我で終わったかもしれないが、和樹の刀は逆刃刀ではないため一撃受ければ大体は死ぬ。

それは朱雀でも例外ではない。

「貴様、他の五人はどうした!!」

生き残った朱雀が大声で俺に叫んだ。俺は指である一点を指した。そこには五人の朱雀が倒れていた。

時は少し遡り、達也の方に二人の朱雀が襲いかかった頃……

「いかに貴様でも俺を五人も相手することはできない」

「……一つ確認する。お前がここにいるということは他にも仲間がいるな？ 例えば青龍とか……」

「フツフツフツ、流石だな。知っているならば隠していても意味はない。他の三人はお前の女共の始末に向かわせた。今から助けに行っても間に合わんぞ」

「そうか、それなら心配ない」

「何？」

「俺の知ってるあの三人ならリーナ達が負けるはずがないからな」

「フン、威勢がいいな。だが今の状況ではそうも言ってもらえない。特と見よ。二つの奥義の合体技！」

五人の朱雀は離れ弓矢の形をした雷を形成している。

「五獄暗黒雷光波（いつごくあんこくらいこうは）!!」

五人の朱雀は矢のような雷を放った。だが俺は微動だにしなかった。俺は再び穴（ホール）を発動し俺の前に黒い空間を作った。すると朱雀の放った技は穴に吸い込ま

裂蹴紫炎弾を受けた朱雀は最早立つことも全員が生き絶えた。

「思ったより大したことなかったな。さて、達也は「ぐあああああああああああああああー」!!!!」!?マジで?あのチートお兄様が?って感心している場合じゃない」

俺は急いで達也のもとへ走っていった。

そして、今に至る。

「ということだ。最早お前に勝ち目はない。達也との戦闘でかなり妖気も使ったはずだ」

「フッフッフ、それはどうかな?まだ俺の恐ろしさが分かってないようだな?」

の体は炎のように熱くなった。

俺がリストバンドを外している間に、朱雀も暗黒妖朧陣で再び七人になっていたのだ。

「漸く本気になったか。だが靈気が残り僅かなのは変わらん。この戦いもそろそろ決着をつけよう!!」

ここで俺と朱雀の第二ラウンド（最終ラウンド）が始まった。

四聖獣との戦い④ 和樹、達也他 VS 朱雀 後編

「確かにお前には雷光波は通用しない。だが、俺の闇奥義は一つではない！」

七人全員が雷を受け止め右手に雷を受け止めた。

「流石の貴様でも七人の暗黒雷迅拳はかわせまい。」

かすただけでも致命傷になる暗黒雷迅拳。それを七人でやられたら確かに厄介だ。しかも朱雀は敏捷も高い。普通なら絶体絶命だろう。だが…

「「「「死ねえ!!暗黒雷迅拳!!」」」」

七人の朱雀が分担して襲ってきた。

だが俺は冷静に対処していった。

一人目の朱雀に拳を振るわれる前に左腕を斬った。

二人目の朱雀も拳を振るわれる前に胴体を斬り裂いた。

三人目の朱雀は拳を振るわれるがそれを避けそのまま背中を斬った。

四人目の朱雀と五人目の朱雀は同時に襲い掛かって来たため、二人の攻撃を同時にかわし二人の両足を斬り裂いた。

六人目と七人目は、二人が拳を振るわれる前に龍巢閃で斬った。

これを縮地で行っていたため、達也でも捉えることはできなかった。呪霊錠と同じ効果のあるリストバンドを外した和樹の動きを捉えることは朱雀でも無理なのだ。

「…バ……バカな……。まさか……ここまで……力に差が……あったとは……」

「朱雀、悪いがこれ以上お前と遊んでいる暇はない。ここで止めをささせてもらう」

サイオンを高め30個のサイオン弾を作り出した。達也の前で使うつもりはなかったが、もはや達也も無関係とは言えないだろう。それにさっきの戦闘でも使ってるし（達也は見えていなかったことを和樹は知らない）

「今のお前達ではかわせないだろう。裂蹴紫炎弾!!」

30発のサイオン弾を放った。傷つき倒れている七人の朱雀では避けることはできず全員がマトモにくらった。

土煙が晴れると横たわって倒れている朱雀の姿があった。

俺は今度こそ撃ち漏らしがないように朱雀に近づき全員に刀で止めを刺した。

朱雀に止めを刺した俺はリストバンドを嵌め、達也の元へ行った。

「大丈夫か、達也？」

「ああ、特になんともない」

「そうか、あれだけの攻撃を受けて五体満足とは流石だな」

「……和樹、お前……」

「達也、それは後でいいか？今はこの場の後始末だ」

達也は何か言いたそうだがこの場で話すことではないと悟り了承した。

『お兄様！』

俺達が十文字会頭達がどうなったか確認するために先ほどの部屋へ戻ろうとした時、深雪がこの場に現れた。

「深雪……」

「お兄様！お怪我は、お怪我はありませんか!？」

「ああ、大丈夫だ」

達也はそう答えるが、達也の今の格好は、服がボロボロで色々なところに穴が開いている。真つ白だった制服も所々黒く血も夥しく付いている。いつたいどれだけの攻撃を受けたのだろうかとこれでよく無事だったなどと思えないくらいボロボロだった。

「これの何処が大丈夫などと言えるのですか！服がこんなにボロボロじゃないですか！それにこんなに血を出していくらお兄様でもこれだけ傷つー」

「深雪！」

「!!」

「お前が心配してくれているのは分かっている。本当に大丈夫だから」

「…お兄様…」

いつものラブラブ兄妹になっている司波兄妹である。

「…こんな時でも相変わらさね…」

リーナが隣で一人呟いていた。

「いたのかリーナ…」

「いたわよ！」

いや、ホントいつの間にならんだよ…

「まったく、急いできてみればもう終わっていたなんて」

「終わっていたことに何か不満でも？」

「心配させないでよってこと！」

「安心しろ。俺がリーナを置いてどっかに行ったりしないさ」

「和樹：／／／／／／／／／／／／／／／／」

俺はリーナの肩を抱きながらそう答えた。リーナは顔を赤くしながら俺に寄り添った。

「お前らは少しは節度というのを学んだらどうだ？」

達也が深雪を連れて呆れながら言ってきた。

「お前らにだけには言われたくない」

「……和樹、今日時間とれないか？」

「……今日は店を休みにしておいた。聞かれたくないことか？」

「……ああ」

「ならウチにこい。雫とほのかもいるが長い話しになるんだろ？あいつらを長い時間家で待たせるわけにもいかんし、明日の店の下拵えもある。悪いがつき合ってくれ」

「……わかった」

ブランシユとの一件も終わり後は目を覚ました十字字会頭達が後始末をするということでブランシユとの事件はこれで終了し、俺とリーナ、司波兄妹は俺の家に着いた。

「ただいま!」

「お帰りなさい!」

家に入ると雫とほのかが出迎えてくれた。ほのかの体には包帯が至る所に巻かれている。

「…やっぱりそっちにも来たか…」

「そっちにもってことは…」

「ああ、こっちにも来た」

「大丈夫なんですか!?!お怪我は!?!」

「大丈夫だよ、ほのか。それよりほのかの方が怪我してるじゃないか」

「えつと…私は大丈夫です。少し苦戦しましたけど…」

「そつか…ああ、悪い達也、司波さん。とりあえずあがつてくれ」

「ああ、邪魔する」

「お邪魔します」

俺がそう言うのと達也達は家へ上がってきた。

俺達はリビングに入った。

「ほのか、とりあえず紅茶入れてくれ」

「うん、わかった」

ほのかはそう言っただけでキッチンに入っていった。

「ほのかは一応客だよな？」

達也は客に茶を入れてさせるのかと言うようなもの言いをしてきた。

「気にするな。いつものことだ。それにリーナに入れてさせたら、いろんな茶のブレンドが入ってくるからやめた方がいい」

「ちよつと、どういふこと!!」

「そのままの意味だ！ダージリンと玄米茶とその他諸々の混ぜたような茶を淹れるのは世界でもお前ぐらいいなものだ!!そんな茶を二人に飲ませるつもりか!!」

俺の発言に司波兄妹は若干顔を引きつった。

「何を言っているの!?!私は普通の人とは違って、他に類を見ない独自の味付けをしているからこの世のものとは思えない程の味が出せるのよ!」

「この世のものとは思えない程の不味い味なんだよ!!お前が作った料理と飲み物は全部暗黒物質（ダークマター）だ!!」

「そこまで言う!!」

「化学兵器と言われただけマシだと思え!!」

俺とリーナが言い合いが始まった。

「達也、深雪、あれはいつものことだから気にしないで」

「達也さん、深雪、紅茶を淹れましたから一緒に飲みましょう」

雫とほのかは慣れたようにスルーし達也と深雪を案内した。

それから10分程経ち俺とリーナの言い合いは終わった。

「まあ今日のところはこのくらいにしとこう」

「そうね。あまり達也達を待たせるものでもないわ」

俺とリーナがそう言うのと

「充分待たされているのだが…」

「いつもなら30分はやってる。今日はマシな方」

達也が一人呟くと雫が答えた。

「達也、時間も時間だし良かったら食べてくか？」

現在6時半だから時間と言えば時間だ。

「というか俺が腹へった」

「私も！」

俺だけではなくリーナもお腹が空いたようだ。

「言い合ったらお腹が空いたんだね」

「これもいつものこと」

ほのかと雫が司波兄妹に言うのと二人は呆れ顔だった。

「じゃあ達也達が来ていることだし今日は特別に私が作ってあげる」

「だからお前はやらんでいい!!」

「なんでよ!!」

「同じことを何度も言わせるな!!」

「私も俺とリーナの言い合いが始まった。」

「……あの二人はほつといて私が作る」

「あつ、じゃあ私も手伝う」

「私も手伝うわ」

「雫が料理をすると聞いてほのかと深雪も手伝うといいキッチンへ入っていった。」

「ああ、もういい! ったく! いつになったら気づくんのだ……」

「……終わったか?」

「俺が最後に毒付くと達也は一人紅茶を飲んで待つていた。」

「ああ、スマン。待たせたな」

「かまわない」

「俺とリーナは達也の向かいのソファに座った。」

「それで達也、聞きたいことって何だ?」

「……そうだな、下手ごまかしはしないで担当直入に聞く。……お前……焔の抜刀齋だな?」

「……正解だ」

「……やけにあつさり認めるんだな」

「達也なら今学期中に気づくと思つていたからな。早ければ二日以内。遅くても三ヶ月といったところか。だが、参考までに何故分かったか教えてくれ。そうじゃないとつまらん」

「……まあいいだろう。怪しいと思つたのは部活勧誘期間の剣術部の騒動の時だ。お前の剣術は我流と聞くが俺にそうは思えなかった。あれは長年誰かに指導をしてもらった剣術の動き。とても一人で覚えられるはずがない。そして、簡単にあしらった実力。普通なら10人以上の人から襲われれば例え実力があろうが普段通り動くことはできないはずだ。あれはかなり実戦慣れしていなければできない動きだった。そして、今日お前が使つた魔法、俺は沖繩で焰の抜刀齋からあの魔法を使って助けられたことがある」

「……十文字会頭との模擬戦で気づくと思つてただけだね。俺は」

「十文字会頭との模擬戦では警戒対象に入るくらいでその時点では焰の抜刀齋だと気づく要素がなかったからな。だが、その言い方だとまるで俺に気づくように行動しているように聞こえるが?」

「いや、別に達也に気づかせようとは思ってないよ。まあ隠しても達也ならすぐ気づくだろうとは思つていただけだね。」

「……俺のことをよく知ってるようだな?」

達也は目を鋭くして俺を見てくる。

「まあね。達也には話しとこうって思ってたんだけど、普通ならあり得ないって理由だから話してないだけで、どう話そうかなって思ってただけだから。」

「なら話してくれ。話を聞いて判断する」

「そうだな…実は…」

それから俺は達也に話した。俺が実は別の世界から来たこと。俺のいた世界ではこの世界が創作物として存在していたこと。

「…ではお前は俺達のことを出会う前から知っていたということか？」

「ああ、例えば…」

俺は達也の側に近づき耳元で…

「お前達の母親が四葉家当主四葉真夜の姉、深夜だということ。お前が戦略級魔法師大黒竜也だということ。そして、トールラス・シルバーのシルバーだということ。司波さんが四葉家次期当主候補の一人だということ。俺は全部知っている」

その言葉に達也はより一層警戒心が強くなった。

「まあ、俺にとってどうでもいいがな。だがお前にとってはそうでもないだろ？」

「!？」

そう。全部知っているということは達也がどういう性格をしているかを知っている

ということだ。つまり、この場で達也が俺を殺そうと考えてもおかしくないということもバれてるということだ。

「…だが何故それを俺に話したんだ？」

達也もそれに気づいたのか？俺に聞いてきた。

「…それを話さないとさっきの奴等のことも話せないからな」

「どういう意味だ？」

「さっきブランシユのアジトに出てきた奴等、あれは四聖獣という妖怪だ」

「中国神話にでてくる四神のことか？」

「そうとつてもらっても構わん。ああいった妖怪から俺は命を狙われている。理由は俺が本来この世界に存在しない人間だからだ」

俺は一つの紙に2本の線を引いた。

「本来歴史とはこんな感じに決められた時間軸が存在する。だが俺というイレギュラーが現れて本来の時間軸とは違う時間軸が生まれた。いわばパラレルワールドということだ。だがズレた時間軸を戻そうとする者が現れた。四聖獣もその一つだ。だから奴等はこの世界の時間軸を戻すために俺の命を消そうとしている」

「この事は既に神からの手紙で教えてもらっている。」

「……………正直信じられん話だな……」

「だろ。俺が達也の立場でもそう思う。だが達也、よく考えてみる。奴等は俺を殺して元の時間軸に戻そうとしている。だが俺はこの世界で何年も過ごしてきた。当然俺と関わってきた人も大勢いる。だが歴史にそれほど影響を及ぼさない程度なら奴等は狙わないらしい。現に俺は雫とほのかの両親と何度も会い、親しい間柄だがそれだけで狙われてはいない。二人には、いや、リーナも含めて三人だな。三人には俺が色々やって鍛えているから本来の歴史より実戦に強くしてしまったせいかな、何度も狙われている。といつても三人がそれでもいいということだ。鍛えているわけだが……」

「……だがそれでは俺に話そうとした理由にはならないだろう。俺のことをよく知っているならばこの場で俺が何をしようとしているのかわかっているんだろ？」

「もちろんだ。だがなそれをすれば逆にお前達が危険になる」

「……どういう意味だ？」

「さつきも言ったが、俺がこの世界にきて色々過ごしてきたわけだが、歴史を揺れ動かすことをすれば命を狙われる。達もお前は忘れていないか？俺達は既に大きなことをやっていることを」

「!!」

「そう、俺は沖繩で司波さん達を助けた。達也はあの場に急いで駆けつけた。だがお前は、桜井さんと深夜さんは助けられたが司波さんは助けられなかったんだ。即死だった

から。」

本当は深雪も達也が助けられたのだがわざわざ言う必要はない。自分が危険になるだけだからだ。

だが、達也から殺気が漏れた。

「達也!!」

「!!」

俺の一声で達也は我に帰り首を振った。

「すまない」

「気にするな。話を続けるぞ。まあ大体言い終わったが……」

「ああ、つまり本来死ぬはずだった深雪が今生きているため奴等は深雪の命を狙っている。」

「司波さんが狙われているのにお前が手を出さないわけがないだろ？ そうなれば自然とお前も狙われるようになる。俺が死のうが生きようがな」

「……確かにそれだとお前がいてくれた方が心強いな」

「そういうことだ。そして、身内にもこの事は話すなよ。実際話した九島家の人間が殺されているからな」

「何!？」

「逆に話してない雫とほのかの家族は一度も狙われたことはない。俺の秘密を知ったり、本来の時間軸で死んでるはずの人が生きていたり、本来の時間軸で身につけない力を手にすると命を狙われることになる。俺が九島家に籍を入れずリーナが嫁に来るのもそれが理由だ。」

「…そうか、わかった。この事は母上と叔母上には話さないでおく」

「そのほうがいいだろ…。深雪に関してはお前に任せる」

話が一段落すると

「お兄様、お待たせしました」

「和樹さん、お待たせしました」

ちようど深雪とほのかと雫が夕食を持ってきてくれた。俺達は暫くして夕食を食べ終わると

「和樹、おまえたちがつけているそのリストバンドはなんだ？」

「…着けてみろよ」

達也は突然俺に聞いてきた。俺はリストバンドを外し達也に着けるように促す。達也は言われた通り左右にリストバンドを着けると手錠でもつけられたように左右の手が密着した。

「なっ!?!」

「お兄様!？」

「それは簡単に言えばサイオンでできた養成ギプスといったところか」

「慣れないときついわよ」

「私たちも慣れるのに暫くかかって一時間は動けなかったもん」

「あれはキツイ」

俺が説明すると当時のことを思い出したリーナ、ほのか、雫がなんか隣で言っていた。「達也、サイオンを全身に纏うようにフルに使ってみろ」

俺が達也にそういうと達也は言われた通りにやる。すると手錠のように手が密着していた手が自由に動けるようになった。

「……まさかお前達はこんな状態でいつも過ごしているのか?」

「強くなりたくないからな。それと同じものを両足にもつけている。それを着けながら大の字で寝られるように慣れればサイオンの暴走もなくなり魔法の強度、発動速度、そして、サイオン量も自然と増えていく」

そう言つて俺はズボンの裾を上げ見せながら説明した。リーナ達はスカートなため普段からそれは見えている。

「ただ、足につけているのは手につけているリストバンドを外すと効果がなくなるようにしてある。戦闘中に外すのは無理があるからな」

だからこそ俺とリーナは朱雀と青龍戦で足に着けていたモノは外さなかった。そんな暇もなかった。

「……和樹、俺達にも同じモノをくれないか？」

「……達也、お前達にはいいが、分かっているな？」

「……ああ、この事は誰にも言わない」

「……いいだろう」

このリストバンドは俺が作ったもの。つまり本来の時間軸に存在しないもの。それを身につけることは朱雀達のような者から命を狙われるということだ。達也には話してしまったので渡しても問題ないが他の人は違う。

この一件から俺は達也と深雪にも奴等と戦うための術を身につけてもらうためにリーナ達と共に訓練をする仲になった。(週一程度しかやらないが…)

す。
和樹はクエスト『和樹 v s 朱雀』をクリア。和樹の経験値と魔法ポイントが加算しま

ステータス

真田和樹

高校一年 15歳

レベル 48

体力 332

サイオン 511 (613)

力 172 (207)

敏捷 208 (250)

頑強 156

器用 230 (276)

魔法力 270 (324)

魔法技能 320 (384)

魔法

魔法	知覚	系統外	無	放出	吸収	発散	収束	振動	移動	加重	加速	魔法ポイント
	100	60	100	90	45	100	80	55	65	80	75	

スキル

全智の眼 飛天御剣流（奥義）

秘剣・焰霊

秘剣・火産霊神

自己加速術式 領域干涉 情報強化 硬化魔法 圧縮空気弾 高温（ハイデイグリー） 反射障壁 対物障壁 エア・ブリット 偏倚解放 ダブル・バウンド ドライ・ブリザード 干涉装甲 ムスベルスヘイム 爆裂 穴（ホール） 仮想行列（パレード）
 裂蹴紫炎弾 術式解体（グラム・デモリッション） ???
 ???

戦略級魔法

ヘビィ・メタル・バースト ???

飛天御剣流

龍追閃 龍翔閃 龍巻閃 飛龍閃 土龍閃 龍巢閃 双龍閃 火巢閃 追火閃 火
 翔閃 火巻閃 九頭龍閃 天翔龍閃

ステータス

司波達也

高校一年 15歳

レベル 46

体力 372 / 372

サイオン 500

力 103

敏捷 171

頑強 115

器用 198

魔法力 50

魔法技能 230

スキル

精霊の眼（エレメンタル・サイト） 体術（最上級）

魔法ポイント

加速	2	0
加重	2	0
移動	2	0
振動	2	0
収束	2	0
発散	2	0
吸収	2	0
放出	2	0
無	1	0
系統外	5	0
知覚	1	0

魔法

自己加速術式

自己修復術式

分解

再生

グラム・デモリッション

グラム・デイ

ス・パージョン

ミスト・デイス・パージョン

戦略級魔法

マ
テ
リ
ア
ル
・
バ
ー
ス
ト

幕間 幹比古の悩み

ブランシユとの事件から1ヶ月が過ぎた。俺達は特に何事もなく平和に暮らしていた。今日は風紀委員の仕事は非番だったので帰ることになった。

家に帰ろうと校門に向かってしていると、その途中のベンチに入学二日目の放課後に会って以来一度も会っていない幹比古が本を読んでいた。

「幹比古、久しぶりだな」

「え?…ああ和樹。久しぶりだね」

「何の本を読んでいるんだ?…古式魔法に関する本か?」

「うん。僕の家は精霊魔法の名門吉田家だから…」

「…前から気になってたんだけど、幹比古って何で二科生なの?」

本当は知ってるけどあえて聞いた。ボロが出るかもされないから。

「…:…簡単に言うると去年に起きた魔法事故で魔法を思うように使えなくなつたんだ…」

「…俺にはそうは見えないけどな…」

「え?…」

「俺は相手の顔を見ればそいつがどれだけ強いのが分かる。間違いなく幹比古は強い

部類に入る」

実際幹比古のステータスはこうだ。

ステータス

吉田幹比古

高校一年 15歳

レベル 27

体力 125 / 125

サイオン 211

力 49

敏捷 78

頑強 45

魔法

精霊魔法 喚起魔法 人払いの結界 雷童子 五感同調 木霊迷路 霧壺 地鳴り

やっぱり精霊魔法の魔法ポイントは高いな。ていうか精霊って書いてある魔法ポイントを見るのは初めてだな。

「……そんなわけないじゃないか。魔法を上手く使えないのに……」

精霊の魔法ポイントがこんなに高いのに魔法をうまく使えないなんてありえないだろ。

「だから違和感があるんだ。何で魔法を上手く使えないのかが。……幹比古今日は無理だが明日は土曜だ。よかつたらウチに来ないか？お前の魔法を見てみたい」

「……いっよ」

そして俺達は、明日に会う約束をして俺は自分の店に帰った。

翌日、幹比古は約束通り家に来た。幹比古は俺の家の場所がわからなかったため家の近くの公園で待ち合わせをして家に着いた。

「とりあえずあがつて」

「おじやまします」

そして、二人は入るとリビングにリーナがいた。

「あ、お帰り和樹。吉田君もいらっしやい」

「ただいま」

リーナに俺が言うのと俺も返事したのだが、幹比古は何の反応も見せなかった。気になつて幹比古の方を見ると眼を見開いて何か驚いていた。

「…ねえ和樹、クドウさん？間違ってたなら悪いんだけど、二人は一緒に住んでるのかい？」

幹比古の言葉に俺は反射的にリーナを見た。リーナも同じタイミングで俺を見る。すると自然と互いに口元が笑ってしまい

「何を今さら」

「てつきり知ってると思ってたけど…」

「…そうなんだ…」

俺とリーナがそう言うと、幹比古は答えた。

暫くりビングで紅茶を飲みながら三人で雑談をしていると

「さて、そろそろ幹比古の魔法を見せてもらってもいいかい？」

「…ああ、頼むよ」

俺達は地下の訓練場に向かった。

俺達は地下室にある訓練場に来ていた。

「なんだいここは!!」

「何って訓練場だよ」

「いやいや、一般の家の地下になんでこんな広大な訓練場があるんだよ」

そう、俺の家の地下室は、今や東京都と同じぐらいの広さがある地下室になっているのだ。四聖獣との戦いの翌日、神様からの手紙がまだ届いてきて、その手紙の内容に地下室が今後の戦いのために、広くしたと新たな設定が加えられていたのだ。

「さて、とりあえず市街ステージにするか」

俺がそんなことを呟くとながら機械を操作すると、その部屋が突然市街地になった。

「なっ!?!」

幹比古は突然部屋が変わってしまったことにひどく驚いていた。

「なにこれ?」

「ここでもら思う存分魔法が使えるぞ」

幹比古の言葉を無視し俺は作業を続ける。

「幹比古、これから武装した敵を三人だす。一人で全滅させてみる。この部屋では攻撃を受けてもビービー弾位の痛さしかしないから安心しろ」

俺が幹比古にそう告げ、俺は部屋から出ていった。

「えっ……あっ……ちよっ……」

幹比古は混乱していて頭がついてこれていない。そんな状態で一人にされてしまったので慌てている。

「幹比古、俺だ。聞こえてるか？」

「和樹？うん、聞こえてるよ」

「OK、じゃあ早速始めよう。今から人型の敵を三人だすから」

俺がそう言うのと市街地の所々に三人の武装した人が出てきた。

「幹比古、さっき言った通り三人の人を魔法で倒してほしい。時間制限はなし。OK？」

「…わかった。ちよつとまだ混乱してるけど後で聞くことにするよ」

「おし、じゃあ始め！」

幹比古は和樹に言われ今一对三の模擬戦が始まった。てつきりただ魔法を見せるだ

けで終わりだと思っていたけど、まさか模擬戦形式でやらされるとは思わなかった。

フィールドは横浜市内に似たような景色でビルが多く建っていた。

僕は魔法を使い辺りを警戒していた。

すると魔法の探知に引つ掛かった人がいたしかも三人同時に別々な場所で。流石に別方向から三人同時に攻められたら一溜りもないためとりあえず一人排除するため一番近い相手のいる方に走っていった。

マシンガンを持つている人がいた僕は物陰に潜み落雷を落とした。やはり発動速度が遅いと思った。

だが不意をつけたため相手は簡単に鎮圧できた。僕はそれを見て安心して警戒を怠ってしまった。

背後から僕を襲ってきた相手がいたのだ。僕はその事に気づいてなんとか逃げ魔法を使おうとしたが、逃げた先に待ち伏せていたもう一人の仲間がいたため魔法の発動が遅かったため僕は先に撃たれてしまった。

「おし、これで終了だ」

俺がそう言うのと部屋は元のただっ広いだけの部屋に戻った。

「どうだった幹比古？」

「…見てたんなら分かってるだろ？全然ダメだった。今のが仮に実戦だったら間違いなく僕は殺されていた…」

幹比古は俯き口を噛みしめながらそう告げてきた。

「確かにそうだな。だが俺は何の脅威もないところで魔法を上手く使っても実際何の役にも立たないと思ってる。何の妨害もないところと実戦で銃を向けられているプレッシャーでは何もかも違うからな」

「…そうだね。そして、僕はどちらもてんでダメだった」

「いや、これはお前の問題ではない」

「え？」

「問題があるのは魔法の術式の方だ。あまりにも無駄が多すぎる」

「な!?!何でそんなことがわかるんだよ!!僕の術式は吉田家が何十年も培ってきたモノだ

！それを一度見た程度で！」

「わかるんだよ。俺には術式を読み込むことができる。そして、相手でどれだけの強さを持つているかも見る事ができる」

「…そんなこと…できるわけが…」

「無理に信じてもらう必要はないさ。それにさつき幹比古は吉田家が何十年も培ってきた術式だと言ったな」

「あ…ああ」

「だからだろう？ 無駄が多いのは」

「え？」

「昔は現代と違って長い呪文が必要だったはず。その時代なら相手に術式の正体を知れないために色々偽装が必要になる。それが無駄に繋がるんだろう。だが現代ではC A Dで高速化されているためその必要がない。」

「そういうことか!? 確かに僕の術式には発動中に術の弱点を突かれないう偽装が施されているけど…それが無駄に繋がっているって事か…ははっ、古式魔法が現代魔法に威力では勝つてもかなわないわけだ」

「それは違うわ」

「え？」

俺達の会話にリーナが加わってきた。

「二対一なら発動速度が勝る現代魔法に分があるけど、知覚外の奇襲なら古式魔法の威力と隠密性に分配が上がるわ」

「九島閣下がよく言ってたからな。魔法で大事なのは使い方だと」

「九島閣下って、まさか九島裂!?!」

「ええ、お祖父様が言っていたわ。『使い方を間違えた大魔法は、使い方を工夫した小魔法に劣るのだ』ってね」

「…使い方が…」

「幹比古、どうする? お前がよかったら俺がその無駄を取り除いてもいい」

「ちよつと、いくらなんでもそれは…」

俺の言葉にリーナは強く反応する。幹比古は目を瞑り暫し考えて目を開き何かを決心したようにCADを取り出した。

「術式はCADにもプログラムしてある。和樹の思うようにアレンジしてよ」

「…いいんだな」

「うん。僕は和樹を信じることにする」

「…ありがとう」

幹比古の覚悟を決めた目を見て俺も答えた。

それから一時間で俺は幹比古のCADを書き換えた。達也ならもつと早いのかなと思ったりもしたが、俺なりにいいできだと思いい、そのCADを試すためにさつきと同じ一対三の模擬戦をやってみた。

相手が三人ということまで苦戦はしたが、今回は積極的に相手が自分のところへ来る前に自分から近づき一人一人倒していった。

CADも先ほどと違い違和感なく素早く魔法を放てたことに幹比古自身驚いていた。

17時から店があるのでその前の15時には幹比古も帰っていった。その表情から大分満足したように俺には見えた。

「和樹、よかつたの？吉田君のCADを弄つて。もしかしたら彼も雫達のように……」

「それは問題ない。奴らが狙うのはこの世界に存在しないはずの魔法を使っている人であつて、幹比古のCADは本来達也が幹比古に教えて調整したCADになつていたモノだからだ。未来は少し変わつても奴らが狙う対象じゃないのさ」

「それならいいけど……」

「それよりリーナ」

「何、和……………ん……………っ……………あ……………」

俺はリーナに声をかけ、リーナがこつちを振り向くと、俺はリーナと口を重ねた。突然のことでリーナも驚いたが、すぐにもちなおし更なる追い討ちをしてきた。

「ん……………ちゅば……………あ……………」

いわゆるディープキスつてやつだ。

俺は気持ちが良いすぎてさらにリーナを求め背中に手を回した。リーナも俺の顔に手を回してきた。

「……………ちゆる……………ん……………」

俺達は止めなかった。どれくらい時間が経ったか分からない。でも離れたくなかった。いつまでもこうしていたかった。

先に口を離したのはリーナの方だった。

「ちよつと待って……………気持ち良すぎて疲……………」

だが俺はキスを止められなかった。

俺はリーナを抱き抱えて自分の寝室に連れ込み、そして二人の互いの距離が一つになっただけだった。

九校戦編

九校戦メンバー決定

季節は夏、7月半ばにさしかかった頃すでに気温は30℃を超えるのが当たり前になってきている。生徒たちは定期試験が終わったことで九校戦に向けての気迫が高まり、学校内の空気はどこか浮ついているように感じた。ちなみに試験の成績は以下の通りだ。

総合順位

- 1位 真田和樹
- 2位 司波深雪
- 3位 工藤リーナ（僅差）
- 4位 光井ほのか
- 5位 北山雫

実技順位

- 1位 真田和樹
- 2位 工藤リーナ
- 3位 司波深雪
- 4位 北山雫（僅差）
- 5位 光井ほのか

理論順位

- 1位 司波達也
- 2位 真田和樹
- 3位 司波深雪
- 4位 吉田幹比古
- 5位 工藤リーナ

となっている。総合は大体俺の予想通りだった。実技はほのかが原作と違い森崎よ

り順位が上だったことが嬉しかった（森崎は6位）。理論は達也には勝てないだろうとは思っていたのでそこまでシヨックではなかった。

ただ、一科の連中は理論の1位と4位が二科生だと知りどんな汚い手を使ったんだよとか不正だとか言っていた。

A組ではその時氷の女王が舞い降りたような：

この後は今一番の話題の九校戦についてである。

九校戦

正式名称全国魔法科高校親善魔法競技大会。

毎年全国にある9つの高校からそれぞれ選りすぐりの生徒たちが集い魔法競技を競う大会である。九校戦は毎年魔法関係者だけでなく一般企業や海外からも大勢の観客とスカウトが集まる大舞台だ。

当然全国の魔法科高校はこの競技に力をこめておりこの第一高校も例外ではない。

そんな大規模な行事に普通はテンションが上がるかもしれないが学校を仕切る立場である生徒会はそうも言ってられない。大会はあと半月以上もあるのにその仕事の多さは殺人的だ。あの真由美が軽口を叩くこともなく黙々と仕事に取り組んでいるほ

どだ。

そんな中俺とリーナ、司波兄妹を含めた生徒会の面々と摩利は会議よりの机につき、向かいながら頭を悩ませていた。

「今年の九校戦はこのメンバーなら負けることはないでしょう。それだけの人材が揃っているわ」

「そうですね。今年の一年はもしかしたら私たちの年代以上かもしれませんし……」

七草会長と市原先輩がそんな事を言っていた。

「女子はそうかもしれませんが男子ははつきり言つてボツですよ」

「総合1位の和樹が言つても皮肉にしか聞こえないわよ」

「俺以外の奴がだいたい足手まといなんだよな。」

実際今回の実技試験で10位以内に入った男子は俺と森崎と十三束の3人だけだった。その十三束が九校戦の競技とは相性が悪かった。

「ところで和樹君。あなたには二種目出場してもらう予定なんだけど何がいい。一つはモノリスコードなんだけど」

「却下します。態々足枷をつけては三校にいる将暉には勝てません」

「…将暉って一条君の事？え？もしかして知り合いなの？」

「そうです……」

そう。将暉とは2年前偶然銀行の立て籠り事件に遭遇して知り合った。旅行に来てスターズとの戦鬪に遭遇するわで最悪だと思った。だがそのおかげで将暉とリーナに知り会えたのだから安いものだ。そして、将暉と知り合い家に招待されたときリーナの事を話したお陰で九島家との連絡ができ親友とも言える友人になったのだ。

「本当は俺もリーナも三高に來ないかと誘われましたから」

「……そうだったの……」

「まあとにかく勝てない面子でやって態々負ける気にはなりません」

「その言い方だと勝てる面子がいると言うことだな？」

渡辺先輩が俺にそう聞いてきた。

「……3人ほど思い当たりますがそれ以外とは組む気はありません」

「その3人とは？」

「1Bの十三束鋼、1Eの吉田幹比古と司波達也ですね」

俺の言葉に達也は酷く驚いた。無理もない。実技で二科生の中でも下にいる自分の名前が出てくるとは思えなかったのだろう。

「……どうしてその人選なの？」

七草会長が聞いてきた。達也だけでなくその場にいる誰もが思ったことだろう。さつきも言ったが十三束は九校戦の競技とは相性が悪い。モノリスコードも例外では

ない。近接攻撃は反則なのだ。これでは十三束の本領を發揮できない。

「勿論実力ですよ」

「…その三人なら勝てると言うのだな？」

「どうでしょう…イレギュラーがなければ勝率は5割と言ったところでしよう」

その言葉に生徒会メンバーと渡辺先輩は絶句した。十師族の一条を相手に5割で勝てるというのだ。普通に考えれば無理だろう。

渡辺先輩は会長を見て頷くと

「分かったわ。その三人の内二人を出すから和樹君も出てくれる？」

「…分かりました。では、十三束と幹比古でお願いします」

「達也君じゃなくていいの？」

「達也にはエンジンアをやってもらった方が効率的ですから…」

俺の一言で七草会長はガバツと勢い良く身体を起こし、獲物を見つけたような視線を達也に向ける。そう、実はエンジンア不足で悩んでいたのだ。

「盲点だったわ！」

「そうか…私とした事がうっかりしていた」

達也は深いため息を吐いた。モノリスコードに出なくていいと思つて安心した途端にこれだ。

「1年生のエンジニアが加わるのは過去に前例がないのでは？」

「何でも最初は初めてよ」

「前例は覆すためにあるんだ」

「達也諦めろ。お前が司波さんから逃げられるわけないだろう」

俺が達也に隣を促すと目をキラキラして期待している眼差しを向けている深雪がいた。それを見て達也はため息を吐き、逃げられないと見て了承した。

「それとさっきの二人だがお前の言う通り問題ないかテストさせてもらう。流石に実力が分からない者を九校戦のメンバーに出来んからな」

「…まあいいでしょう。でも先ほど言った通り他の人とは組みませんよ」

「ああ、それでいい」

「ということ達也頼んだぞ」

「は？」

「俺が出て勝っても俺がいたから勝ってたんだなんてバカなことを言う人がいないとも限らないからな。そうならないために達也が出た方がいいんだ」

「なぜ俺なんだ？」

「俺が推薦したからだ」

達也から睨み付けるような視線を感じる。余りに理不尽だからなあ…

「…そうね。確かにその方がいいわ。達也君お願いできる?」
「分かりました」

「相手は俺と一緒に組む予定だった森崎達でどうですか?新人戦メンバーを決めるのに上級生を相手にするより同級生同士でやらせて勝った方がメンバー入りという分かりやすい方法の方が後々面倒がなくていいですから」

「分かったわ。それで和樹君、後もう一つは何がいい?」

「…:…:…:…:スピード以外ならどれでもいいですけど…:…:やるならボードかピラーズですかね」

「スピード・シューティングはなぜ嫌なの?」

「ただ当てるだけなんてつまらないからですね」

「…:でもその理由だとアイス・ピラーズ・ブレイクも同じじゃないか?」

「その競技には恐らく将暉が出ると思いますからやってみるのも悪くないと思います。クラウドだったらボードの方が楽しそうですからね」

「一条に勝てる自信はあるのか?」

「…:…:一条家の爆裂はピラーズと相性がいいですからね。半々と言ったところでしよう」

「ならバトルボードだな。確実に優勝を狙える競技にするべきだ」

「分かりました」

それから2日が経ち、達也、十三束、幹比古は森崎たちとモノリスコード出場を賭けて戦うことになった。場所は森林ステーションだ。今回達也はデイフェンス、十三束はオフフェンス、幹比古は遊撃を担当する。これは俺のポジションがデイフェンスになることを想定し、他の二人の実力を知るテストでもあるからだ。

試合が始まると、十三束と幹比古は分散し各個撃破しに行った。

十三束はモノリスに向かう途中森崎と相対した。

森崎は得意のクイック・ドロウで十三束を倒そうとした。だが、十三束には通用しなかった。

この試合を観戦モニターで見ている人達は一同に驚いていた。森崎の放った魔法が突然十三束の体に触れた途端消えたのだ。

「今のは!？」

渡辺先輩が思わず出た言葉だった。

「術式解体（グラム・デモリッション）。但し接触型のですけどね」

「接触型の？」

「真田は知ってたのか？」

「はい。あれがある限り十三束は余程の事がない限り負けません」

「だが、十三束は遠距離攻撃が苦手なはず。それでは相手を倒せないぞ」

「まあ見ててください」

森崎は自分の魔法を消されたことで同様を隠せなかったがすぐに立て直し次の魔法、エア・ブリットを使った。そして、自己加速魔法を使い側面に移動しようとするが、十三束が先回りして待ち構えていた。

そこへ十三束が森崎の鳩尾に右こぶし叩きつけた。森崎はそのまま後ろの大木まで吹っ飛びそのまま気絶した。

「おい！今のは反則だぞ！」

「いえ、大丈夫です」

十三束が森崎を殴ったことで反則だと言った人がいたが俺がそれを否定した。

「何を言ってる!」

「直接攻撃は反則だぞ!」

俺の言葉尚意義を唱える先輩達がいたが俺は無視して

「市原先輩、今のシーンをスローで見せてください」

市原先輩がもう一つのモニターに今のシーンを見せてくれた。

十三束が森崎の懐へ飛び込み森崎の鳩尾に殴りにいったが、鳩尾には当たらず寸止めしていた。森崎はそのあと大木にまで吹っ飛んでいった。

「どういう事だ! 何故森崎はあんなに飛ばされたんだ?」

「爆風ですよ」

「爆風?」

「はい。空気の塊を自分の拳の周りを固定し、拳に固定した空気塊で周りの空気を押し出しているのです」

「だが十三束は、生まれつきサイオンが体に密着してしまうから体から離れた場所への魔法がうまく使えないんじゃないやなかったのか?」

俺の言葉に渡辺先輩が聞いてきた。

「渡辺先輩、空気はどこにあります?」

「どこって…大気中だ。空やオゾン層や勿論ここにも…!!」

渡辺先輩は自分の手を見ながら言うどハツと気がついた。

「…そう、そこにも空気はあるんですよ。手元にある気体に直接加速ベクトルを付与することで爆風を生み出す。それが十三束の魔法、ゼロ距離ブラスト」

俺が説明している間に十三束はモノリスを守っている相手を倒しモノリスを打ち込むことで試合が終了した。

ちなみに幹比古は『木霊迷路』を使い三半規管を狂わせることで方向感覚を失わせたことで相手を足止めさせていた。

達也は終始モノリスを守っていただけで何もしなかった。

これにより俺と十三束、そして幹比古が二科生ながら九校戦モノリスコードに出場することが決まった。

幻海

九校戦のメンバーが決まった翌日、お昼はいつものメンバーと生徒会室で昼食をとり、俺はリーナと端末でニュースを見ていた。達也はCADを整備しているとあーちゃん先輩が達也に声をかけてきた。

「今日はシルバーホーンを持ってきてきているんですね」

「ええ、ホルスターを新調しましたので馴染ませようと思ひまして」

「見せてもらってもいいですか」

「かまいません」

達也からシルバーホーンを渡されあーちゃん先輩は熱心に語りだした。無理もない。シルバーホーンはあのトラス・シルバーに手掛けられたもの。CADマニアのあーちゃん先輩が黙っていられるはずがない。実際「あく…憧れのシルバー様…」とか言つてシルバーホーンを頬でナデナデしているのだ。俺とリーナは思わず噴き出してしまい、司波さんも生徒会の仕事をしているのか？端末を弄っていると「ビービー」とミスっている音が聞こえてきた。

ある程度話すと今度は矛先が此方に向かれた。

「そういえば、真田君のCADって何を使っているんですか？」

俺は風紀委員の仕事でもあまりCADを使っていないのでほとんどの人がそれを知らないのだ。実際風紀委員の仕事は何かあっても俺の縮地が既に魔法のような動きなので誰も手に負えなかつたりする。

「これですが…」

俺はあーちゃん先輩に自分のCADを渡した。リボルバー型のCADだ。俺のCADなんて誰も見たことがないため七草会長や渡辺先輩も俺のCADを見に来た。

「えつと…こんなCADあつたかしら…」

「どこにも社名が書いてないな。どこのだ…？」

七草会長と渡辺先輩は見たことないCADを見て首を傾げている。だが、あーちゃん先輩だけ俺のCADを見て驚愕の表情をしていた。

「こ…これって…もしかして…幻シリーズですか？」

「えつ？」

あーちゃん先輩の言葉に七草会長と作業をしていた市原先輩が驚き、渡辺先輩は聞いたことがないためか首を傾げている。

「えつと…それってあの幻海のことよね？」

「そうです！まさか存在すら怪しいと言われていた幻のCADを見る事ができるなんてー！」

「お、おい。誰なんだ？その幻海というのは？」

「知らないの？摩利」

「ああ。聞いたこともないな」

その言葉に七草会長は若干呆れ顔だった。あーちゃん先輩も普段見せないような顔をした。

「あーちゃん、説明してあげて」

「はい！幻海とは起動式を二十個まで格納できる特化型CADを作り出した天才技術者です。それだけではなくこの幻シリーズは通常のCADよりサイオン消費量を犠牲にして発動速度や魔法強度が1.5倍に上がるという超優れものなんですよ！ですが性能があまりに高すぎて調整することが非常に難しく有名なんです。ですが世間に出回っている数は少なく、十台もないと言われてるんです。でも知名度はトーラス・シルバーに劣りますが、才能は並ぶほどの人物なのです。ああ…憧れの幻海様…」

「ぶほっ!!」

あーちゃん先輩の発言に俺とリーナは思わず吹き出した。

「どうかしたんですか？」

「いえ、何でも…」

思わず吹き出してしまった俺とリーナにあーちゃん先輩は不思議そうに訊ねてきた。

「そ、それはスゴいな。中条が興奮するのも分かる気がする」

そのあーちゃん先輩は俺のCADに頬ずりしている。ちよつと引く…

「だけど何で和樹君が持つてるの?」

七草会長が不思議そうに尋ねてくる。

「幻海は俺の知り合いですから」

「えっ、本当ですか!? 一体どんな人なんですか!」

俺の言葉に一番に反応したあーちゃん先輩がすごい勢いで尋ねてきた。

「70過ぎの婆さんですよ」

「70〜!!」

「もしかしてそれで連絡先やCADの製作が追いつかないから誰にも教えないの?」

「いえ、ただ人が嫌いなだけです。あとCADを作るのは単なる趣味だからだそうです」

その言葉に七草会長達上級生は絶句した。世界が誇る最高級のCAD製作者がただの趣味であると言いはなったのだ。このことが公になればCADメーカーを敵に回しかねない。

「私、未だにあの人が70過ぎてるなんて思えないんだけど」

「俺も同感だ。どこの世界に70過ぎで崖を登れる婆さんがいるんだ」

「ちよつと待て！今の話し本当なのか!？」

「ええ、本当です。一応俺の師匠ですから」

「「なっ!？」」

そう、何故かこの世界にあの幻海婆さんがいてたまに俺に稽古をつけてくれるのだ。何処にいるかはまだ秘密だ。

「……なるほど……お前の何処か謎めいた力は幻海からの教えということなのだな？」

「まあな」

達也に聞かれたので俺は簡単に返事した。

「ところであーちゃん先輩、課題を終わらせなくていいんですか？」

「あーちゃんって呼ばないでください!」

「まあまあ、それで課題は何なんですか？」

「加重系魔法の三大難問についてのレポートです。その一つ汎用的飛行魔法がなぜ実現できないかうまく説明できなくて……」

「成績上位5名から落ちたことのない中条が珍しいな」

「少し高度な参考書なら答えが載ってると思うけど……」

「つまり中条さんはこれまでの回答に納得がいけないということですね」

「そうなんです!」

「加速・加重系統を得意とする魔法師なら1回の魔法で数十メートルのジャンプも可能です。ところが空を自由に飛び回る魔法は実現されていない。正確には形式化された飛行魔法がですね。理論的には重力の影響をキャンセルして飛行することは可能ですが、既に魔法が作用している物体の状態を変化させようとする場合、作用中の魔法より強い事象干渉力が必要です。魔法による飛行中に速度や移動方向を変えるにはその都度魔法を重ね掛けしなければなりません。一人の魔法師の事象干渉力ではせいぜい10段階が限界です。」

「だったら魔法を重ねがけしないで既に作業中の魔法式をキャンセルすればいいと思うんです。」

「残念ながらそれはできません。より強い干渉力の魔法式が対象を上書きするのです。強い魔法式が弱い魔法式を消去しているわけではないのですよ」

「そうなんですか…」

「ですが面白いアイデアです」

上級生四人で飛行魔法について語り合っている。

「ん?待って、魔法の効力を打ち消す程度をことだったらすでに誰か試してみているはずよね?」

「少しお待ちを……ありました。一昨年イギリスで大規模な実験が行われていますね」
「結果は!？」

「完全な失敗です。普通に連鎖発動するより急激な要求干渉力の上昇が認められたそうです」

「そう……理由は？」

「そこまでは……」

「和樹君はどう思う？」

「え？」

七草会長が俺に聞いてきた。いやいやここは達也じゃないの？

「……その実験は基本的な考え方が間違っています」

「……どこが間違っているの？」

「終了条件が充足されていない魔法式は自然消滅しません。対象エイドスに留まっているからです。1回の飛行状態変更のためにキャンセル分の魔法式を余分に上書きしているんです。余分な上書きは累積されていますから事象干渉力の上限に到達するの
も早くなります」

「……イギリスの実験は飛行魔法に必要な魔法を余分にかけちゃってるから失敗した
という……?」

「そうです。実験の企画者は魔法の無力化について錯覚していたようですね。」

「……和樹君はどうやったらいと思う？」

俺は少し考え

「……タイムレコーダーで魔法の発動時点を記録し変数のみを書き換えていくことで、軌道式を連続処理し魔法式の連続発動を自動化させるのはどうですか？」

「…それなら効果時間の短い魔法の終了直前にタイムラグなしで次の魔法が効力を発揮できるわね」

俺の意見にリーナも賛同した。

「確かにそれなら従来の問題だった単発魔法の重ね掛けによる事象干渉力の限界をクリアできますね」

「ナイスよ、和樹君！」

「でもこれぐらいだったらトールラス・シルバーが試してるかもしれませんよ。なんせこれはループ・キャストの応用ですから」

「調べてみたところやった人がいるという事例はありません」

市原先輩の言葉に七草会長はこちらを期待するような目で見てきた。

「…今度試してみますよ」

放課後 部活連本部

「生徒会長！これはどういうことです！なぜ内定者の席に1年のしかも二科生が座っているんですか！それにエンジニアを一年が担当するなんて前代未聞ですよ!!」

「司波は風紀委員として実績がある。別格じゃないか？」

「そんなのわかんないだろ！」

「九校戦メンバーは我が校の代表なんだぞ!？」

イライラする。分かんないなら黙ってろって話だ。二科生だからと本来言いたいんだらうけど言えるはずもないから難癖つけてウイードごとき代表にするなどでも言われた方がまだスツキリするな。

そんなことを考えていたらいつの間にか俺と達也の腕前を見せるテストをされるこ

とになっていた。

俺たちは移動し先に達也がやるそうだ。相手は桐原先輩。

「九校戦で実際に使う車載型調整器で桐原くんのCADを競技用のものにコピーし即時使用可能な状態に調整してください」

マジで言ってるのこの人？会長の言葉に俺は突っ込みたいが達也なら大丈夫だろうと思いやめた。

「スペックの違うCADの設定をコピーするなんてあまりお勧めできませんね」

「え？」

達也は分かっているだろうけど会長はまるでわかってないようだった。マジかよ…

「仕方ありません。安全第一で行きましょう。桐原先輩CADを貸してください」

「ああ」

達也は桐原先輩からCADを借り調整していく。キーボードでやる完全マニュアル調整だ。

「なんだアイツ」

「今時キーボードなんて。古すぎる」

そう言って笑う奴もいたがはつきり言ってバカすぎる。これがどれだけ高度なことなのかもわからないとは会長がエンジニア不足で悩んでいるのも頷ける。

達也の調整は桐原先輩の機材に流したサイオンから画面に流れる莫大な情報を全て読み取り手作業で調整するのだ。それは凄まじい知識と技術を要する高等技術をスベックの低い大会専用に使っているのだ。

「終わりました」

達也が言うのと桐原先輩は早速CADを起動した

「桐原、感触はどうだ？」

「問題ありません。全く違和感がありません」

「一応の技術はあるようですが当校の代表レベルとまでは言えないのでは？」

「仕上がりも時間も平凡ですしね」

この人達はエンジニアに何を期待しているんだ？まさか実力以上の力を出させることが仕事だと思っているのだろうか？大体抵スベックのCADに高スベックのCADをフルコピーなんてしたら容量や性能の差でほぼ必ず使用者の精神が壊れる。基礎単一魔法しか入れられないCADにインフェルノを入れるようなものだ。それを使用者に何の違和感もなくできるなんて、この日本、いや世界に10人いるかいなかじゃないのか？それを当校の代表レベルではないとか、じゃあこの学校の生徒は全員世界トップの技術者達ってことだろ。

俺は盛大に突っ込みたいが次に俺がやるので言わないでおこうと思う。

「じゃあ次は和樹君」

「え？」

いつの間にか話が終わっていたようだ。全く聞いてなかった。

「それで相手は？」

「わたし」

「私って？」

「だからワ・タ・シ」

会長かよ！

「わかりました。会長の隅から隅々まで調整させてもらいます」

「えっ？ やっ？ ちよっ？」

俺の言葉に会長は顔を真っ赤にしていた。

「冗談ですよ」

「えっ？ あっ？ 冗談？ そうよね？ 冗談よね？」

……ちよつとからかいすぎたか……

俺は会長からCADを借り調整した。俺も完全マニュアル調整なのでコイツもかよ等という声があったような気がするが集中していたので無視した。

「終わりました」

調整が終わり会長がCADを起動しすぐドライアイスが出てきた。

「……………和樹君」

「はい？」

「あなたウチで雇われない！」

会長の言葉に回りが信じられないといったような顔をした。

「真由美、いきなり何を言い出すんだ！」

「だって摩利、これすごいのに！私が普段使ってるものより発動速度も違和感もない。スゴく使いやすいの！その分サイオンを多く消費するけどそれだけの価値があるわ！」

会長がスゴい剣幕で渡辺先輩に言い先輩もタジタジだ。

「俺の家に来れば別にタダで調整ぐらいならしますよ。ほのかや雫もしてますし…」

「ホント！じゃあ今日絶対行くから！」

「来るなら週末にしてください。平日は忙しいので」

「わかったわ！」

俺と会長の会話を聞いてた連中、特に男性陣は俺に突き刺すような視線を向けてくる。会長が休日男の家に上がり込むのだ。しかも、CADの調整をするということはその機器にもよるが下着姿にならないといけないものがあるのだ。俺の家のがそうでない保証などない。実際家にあるのは下着にならないといけないものだったりするが…。

そういうわけで男子連中から嫉妬の視線を向けられることになったのだ。勿論達也を除いて…

こうして俺と達也はエンジニア入りが確定した。

四人目？

エンジニア入りが確定した数日後の日曜日、雫とほのかは家に来ていた。そして…
ピンポン

家のチャイムがなりドアを開けるとそこには七草会長がいた。

「こんにちは！今日はお願いね！」

「ずいぶん早いですね、会長」

「そう？もう9時よ？」

「休日はゆっくりしたいんです……まあいいですけどね……」

「……なんだかごめんなさいね……」

「いえ……どうぞ……」

「お邪魔します」

そして俺は会長を家にあげてリビングにまで案内するとそこには雫とほのかがいて
会長はそれを見て憤慨する。

「ちよつと！北山さんと光井さんが来ているなら私もこの時間に来て問題ないじゃない

わー！」

「雫とほのかは暫く一緒に暮らしてるんですよ。九校戦の練習をするために」

「……なんで九校戦の練習をしに和樹君の家に来るの……？」

会長が小首を傾けて俺に尋ねてきた。

「なんなら見に行きますか？リーナも今練習中だと思いますし……」

俺がそう促し雫やほのかを含めた四人でリーナのいる地下室へ向かった。

「……………普通の家に何で地下室があるの……（ボソツ）」

会長は何か言ってたみたいだが聞くことはせず先に進むとリーナが訓練場でホログラムで作り出された今まで戦ってきた敵と戦っていた。最も今戦っているのは春のブランシユ事件で戦っていた青龍とは格段に弱い相手ではあるが、四人の妖怪たちの相手をしており、一人一人が乱童クラスの実力をもっており並の人ではまず勝てないであろう。

だが、今のリーナは青龍との戦いから大分鍛練をつけており、その程度の相手に遅れをとることはなかった。四聖獣との戦いで、俺、雫、ほのかの三人が呪霊錠を外さなかったことに対して、リーナは外さないと勝てなかったことに酷くプライドが傷ついたらしい。雫とほのかが相手した玄武、白虎相手なら外さなくても勝てただろうがリーナはプライドが高い女だ。なのでリーナはそれから誰よりも訓練を厳しくこなしていき、今なら呪霊錠を外さなくても青龍に勝てるだろう強さになっていた。

そうこうしているうちに俺たちは地下室に着き訓練室の前にある部屋からガラス越しでリーナの訓練を見学していた。七草会長は『何で一般家庭の家にこんないい部屋があるの…?』と言いたそうな呆れ顔をしていた。

丁度俺たちが来たところでリーナは仮想敵の一人を倒したところだったらしく部屋から出てきた。

「あつ！和樹!?見ててくれたのね！ねえ！ねえ！どうだった？私、とつても強くなったと思わない!！」

「ああ……悪い……。今来たところでリーナが戦っていたところは全く見てなかった」「なんでよ!!」

リーナが訓練場から出てきて和樹を見つけると、周りには目もくれず自分の成長ぶりを見てくれたと思いきい勢いよく話しかけてきたが、本当に今来たところなのでそれを言うとうと、納得できないとばかりの勢いで捲し立ててきた。

「リーナ、そんなことより雫とほのかがきているぞ」

「あら、ホント……」

「和樹君！リーナさん！私もいるんだけど!」

「……勿論忘れていませんよ」

「ちよつと！今の間は何!！」

「気にしないでください。さあ、隣の部屋でCADの調整をするのでそこに行きましよう」

後ろの方で会長が何か騒いでいるが無視した。実際俺は会長がいることを忘れてはいなかった。ただ、からかいたくなっただけだ。でもそんなことを会長に言えるわけがなく、そのまま何事もなく隣の部屋へ向かった。そこにはCADを調整するための機器が置かれていた。俺に続いて、リーナ、会長、雫、ほのかと部屋へ入ってきた。

「さて、会長。今からCADを調整するんですが、その前に服を脱いでください」
「……えっ?」

俺の言葉に会長は数秒間硬直したが頭が俺の言った言葉を理解すると途端に会長の顔が茹で蛸のように真っ赤になった。

「(この人って人をからかうのが好きなくせにからかわれるのはメチャクチャ弱いんだよな…) 家にある調整機では服を着ながらだとできないんですよ。因みに下着までなら大丈夫ですので安心してください…」

「全然安心できないじゃない!!」

「ああ……じゃあ会長は後にしましょう。まず心の準備が必要みたいですから。じゃあ雫、ほのか、二人からやろうか」

「はい!」

「うん……」

「え？え？やろうかって？二人はそれでいいの!？」

会長は何の躊躇いもなく服を脱ぎに隣の部屋まで向かったので、それでいいの？とでも言わんばかりに慌てて止めようとした。

「何慌ててんですか？二人のCADは俺が調整してるんですからこれくらい毎週のことですよ」

「それでも簡単に受け入れすぎでしょ!？」

「二人とも付き合ってるんですから別に今さら……」

「……………え？……………付き合ってる？……………誰が？」

「だから俺と雫、ほのかが……」

「……………え？……………でも……………確か工藤さんと……………」

「ええ。リーナとも付き合ってますよ」

「3股って……………真田君……………あなた……………」

「軽蔑しますか？会長は大多数の女子と付き合うことは不健全だと思えますか？」

「……………それが普通だと思うけど……………」

会長はジト目で此方を睨んでいた。

「俺は大多数の女子と付き合うことが不健全だとは思いません。付き合っている女子に

親愛を抱けないことが最も愚かなことだと思っています。一時の感情で身を任せてその場限りで終わらせること等最低以外の何モノでもない。周りの人で恋人ができて数ヶ月、早いときは数週間で別れる人なんているけど、正直バカにしか見えなかったです。だから俺は、この先他にも好きな人が出来たらその人を離さず、愛し愛される関係でい続けるつもりです……」

和樹の言葉を聞き、真由美は呆けてしまった。最初は多くの女性を恋人にする優柔不断、不健全だと思っていた。でもそうじゃない。工藤さんのことも北山さんのことも光井さんのことも八神君は好きなんだ。誰がかけてもダメ。一番とか二番とかじゃなく、三人とも大切な存在。その三人を幸せにしたいから例えここで私がどれだけ非難しようとも彼は折れるつもりはないのだ。

そんな彼を見て真由美は羨ましいと思ってしまった。三人という恋人はいるが、ここまで愛されている三人が羨ましい。どんな障害からも守ってくれる、そんな気がして……

そんなことを考えているうちに雫とほのかが簡素ガウンを身に付けていた。二人のCADは既に和樹は預かっていたので準備は整っている。

最初はほのかからだ。調整装置の寝台に横になるほのかは下着姿なのでしつかり目

に焼き付けておく。

暫くしてデータがとれたので服を着ていいといい意識をモニターの方に集中し調整していった。

その後雫のCADも調整し、次は七草会長の番だ。会長も覚悟を決めたのがガウンに着替え頬を赤らめていた。

「……和樹君……その……本当に……その……？……でも私……初めてだし……えつと……経験がない……か……ら……」

「えつと……何を言ってるんですか？七草会長……」

「え!?!……いや!?!……えつと!?!……そうじゃないのよ……別に気にしないでいいから!!」
「えつと……」

「とにかく和樹君!CADの調整お願い!」

会長は暴走気味に言い、CADを和樹に渡してから、勢いよくガウンを脱ぎ捨て寝台に横になった。モニターを見ながらチラチラと七草先輩の方を見てしまう。七草先輩は小柄だが実は胸が大きく腰も細い、つまり出るところ出て引つ込むところは引つ込む、女性としては魅力的なプロポーションをしているのだ。だが和樹もいつまでも会長をそのままにしておくわけにもいかないのでCADの調整に入った。

「さりげにデイスられてない!？」

「まあそれはともかく…どうですか？」

「やる!やるわよ!こんな面白いこと止められるわけないでしょ!」

「はい!私もやりたいです!」

「…うん、やる!」

そして三人は飛行魔法のテストを開始した。数10分試しに飛んでもらって何事もなくテストを終了した。

「お疲れ、どうだった？」

「もうサイツコーだったわ!まだまだ飛んでいたかったわ」

「私もです!」

「私も…ただ…」

「ただ?」

「サイオンの消費量が他の魔法と比べて激しい。私たちだったからよかつたけど…」

「…確かなな…だがサイオンを流し続けるのは仕方ない。サイオンを流すのを止めたら魔法を使えない。使えないということは重力にしたがってそのまま落下するということだ。つまり飛行魔法の時点でサイオンを出し続ける以外ないということだ」

雫の懸念に和樹がそう答えると

「確かにサイオンの消費量が半端じゃなかったわね。一般の魔法師は私たちよりもサイオン量が少ないからすぐにガス欠になってしまいうわ」

「まずはその安全性を得てから世間に公表ですね。こんな未成品では後々不安が残りますから」

「…ちよつと残念ね…。でも完成の目処は出来たわね。完成したら教えてね」

「ええ。世間に公表してからですね」

「何でよ!?!」

「今回はついでしたから…。いなかったら、話すのはもつと先でしたね」

会長は少し納得いかないといった顔をしていたが七草家の人間にバレるのはあまりよろしいことではない。本当に今回はついなのだ。

そして三日後雫の家の会社に行き、今回の飛行デバイスを渡した。だが二日前にトラスⅡシルバーが飛行魔法を公表したことで、俺は二番目ということで会長は悔しがっていた。何故?とも思ったが気にしないことにした。逆にリーナ達には原作知識で教えていたため特に気にしてなかった。

和樹君が飛行デバイスを作つて私は自分のことのように喜んだ。でも二日前にトーラスⅡシルバーが公表しているので史上初とはならなかつたことにガツカリした。もしあの時出来ていたら……でも安全性がない物を公表できないといった和樹君の気持ちもわかる。それでも後ちよつと早かつたらと思つたと悔しくて仕方がない。

でも何で? 和樹君のことでこんなに悔しがっているの? え? ちよつと待つて? 私もしかして和樹君のこと好きなの!? え? でも和樹君つて工藤さんとも北山さんとも光井さんとも付き合つてるのよね。私は私しか見てくれない人以外とはいや! ……でも……: そういえば和樹君が言つてたわね。

『大多数の女子と付き合うことが不健全とは思えません。付き合っている女子に親愛を抱けないことが最も愚かなことだ』

『この先他に好きな人が出来たらその人を離さず愛し愛される関係でいたい』

もしかして私……: ……ダメ! ダメ! ダメ! 好きになつたらダメ! ……好きになつたら

